KIRISUTO The Christian Home Journal.
Vol. 13. No. 5 May 1961
Japan Commission on Christian Literature Tokyo

昭和二十四年二月三日 第三種郵便物認可
昭和二十六年五月一日発行（毎月一回一日発行）

月刊 キリスト
五月号
定価 五〇円
NCC文書事業部

マークが保証する！

丈夫できれいな…
フジテツトタン
強力トタン板…
フルハード
富士製鐵
本社・東京・日本橋
国内販売総代理店：日本鉄板株式会社

創業
300
年

日本橋の歴史は
白木屋の歴史

にほんばし
白木屋
電話(211)0511

IBM 2879
製版・印刷・恒陽社

# キリスト教と文学の会

主催 日本基督教協議会・文書事業部
たねの会

日時　1961年7月19日(水)—21日(金)

場所　長野県中軽井沢　星野温泉

◇主題　**文学入門**

◇会長　(鳥居坂教会牧師)　浜崎次郎

◇講演　「小説の技術」　(作家)　椎名麟三
「評論の技術」　(文芸評論家)　佐古純一郎
「ドラマの技術」　(劇作家)　高見沢潤子
「文学とは何か」　(金城短大学長)　柳田知常

◇指導　小説、評論、ドラマのグループにわかれ、テキストにより、実作の指導をいたします。あらかじめ作品を6月末までにお送りになれば批評をしてさしあげます。

◇参加者　60名(先着順)キリスト者または求道者

◇費用　2,000円(宿泊料(2泊6食)1,500円・テキスト代・聴講料500円)

◇申込方法　申込用紙を添えて、7月10日までに日本基督教協議会・文書事業部(東京都中央区銀座4の2)振替東京11679までお申しこみください。

◇持参品　聖書・讃美歌・筆記用具・洗面具など

……(きりとり線)……

申込用紙　　年　月　日

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| フリガナ<br>氏名 | | 男・女 | 令年 | 職業 | |
| 住所 | | | 教会名 | | |
| 希望グループ | 小説・評論・ドラマ | | 送金方法 | 現金書留・振替・為替 | |
| 備考 | | | | | |

R・アバ著　滝沢陽一訳

# 礼拝　その本質と実際

礼拝とは何か？
霊と真とをもってする
礼拝の手引き

この本は、礼拝を行なうにあたって、原理の解説と、実際的な指導を与えようとして書かれた。典礼の伝統がきわめて広範囲に異なっている諸教会が一つになろうというエキュメニカル運動が進められている今日、これは緊急の問題である。異なった伝統をもつキリスト者の間のより深い理解に役立つとともに、正しい礼拝の在り方を学ぼうとする一般信徒のためのすぐれた入門書である。

〈内容〉
▼礼拝の原理　▼起源と発展　▼みことばの奉仕　▼祈り　▼讃美　▼聖礼典

B6判二三六頁　価三五〇円〒三二円

# 死と生をめぐって

石島三郎・浅野順一・佐古純一郎

誰も死に対して例外なものはいない。かくも絶対のものである死を直視するとき、粛然とせざるを得ない。しかし、死は本当に絶対なものであろうか？

本書は、死の意味について、また復活および自殺をめぐってキリスト教と日本人の死生観を著者自らのそれとして語ったものである。

女性と生活シリーズ

価 140円　〒16円

# 聖書の世界

信徒みんなで読み合う
聖書研究誌

▼教会内各グループの聖書研究のテキストです。
▼牧師の指導で本誌によって計画性ある聖書研究を！
▼誠実な聖書研究の伴侶として唯一の月刊誌です
▼新制中学校卒業生なら十分読めるやさしい表現です。

今月の聖書研究
四月号　教会の基礎
五月号　教会の誕生
六月号　教会の生命

A5判　五二頁

価50円　〒4円　1年概算 600円

松木治三郎著

# 人間　その運命と愛をめぐって

運命・愛・自由など、人生のさまざまな問題は、神と人間とのかかわりが解かれないかぎり解決しないと信ずる著者が、自己の人生体験、信仰体験を語りつつ、平易に書きおろした本書は、今日の若い人たちの心情に即した、キリスト教的人生案内の書として出色のものである。

新書判232頁　価200円　〒24円

黒田平治著

# キリストの足音

〈序文より〉　大村　勇

彼は、ストマイの反応で全く聴覚を失っていた。しかも瞑想録は単なる神秘主義的なものでなく、神の言をいきいきと聞きながらこの世の問題に対する深い洞察と鋭い批判を示している。——「彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている」ということをしみじみと感じさせられる。

黒田君が聞いた主の足音を、ひとりでも多くの人が、この書を通してきくことができるように祈って世に送るしだいである。

新書判218頁　価200円　〒24円

日本基督教団出版部
東京都中央区銀座4の2　振替東京188329

## 編集後記

◇「愛するということ」特集をおおくりします。三月号編集後記でお願いした読者の手記「愛するようになるまで」は、おかげで十数篇あつまり、編集部一同、大喜びで読ませていただきました。できるだけ多くのせたいと思いましたが、誌面の都合で、金沢さん、小島さんの二篇を掲載いたします。まだ数篇、どうしても掲載したい原稿が残っておりますので、これは、次号から「読者の生活記録」として連載させていただきます。前々から欲しい欲しいと思っていた生活の記録が、このようにたくさん、えられたことは、ほんとうに感謝です。これからも、証し・生活記録のページは、読者に解放いたしますので、どしどしご投稿くださいますようお願い申し上げます。掲載分には僅少ながら謝礼を呈上します。

◇一年ぶりで、また、「愛読者カード」を同封しました。読者の皆さんが、編集に参加してくださる良い機会ですので、ぜひご記入のうえ、お送りください。このカードに記されたご意見を十分尊重して今後の企画をたてていきます。

◇お気づきでしょうか。今月から八ページ「信仰に生きる」のページが増えました。紙も写真の出やすい上質紙を使いました。まだグラビアページを刷れるほど部数がなく、経済的に苦しいので、まず、こういう試みをしてみました。今月のように、多くの原稿が集まってくると、もっともっと増ページをしたくなるのですが、どうしてもそれができません。いままでのページ数も、現在の値段では維持できなくなりました。増ページ、写真入りを今後も続けるために、また、内容を一段と充実させるために、左のページで、お願いしてあるような値上げをさせていただきたいと思います。値上げブームに反抗してゆきたいと願っていましたのに、残念なことです。この雑誌も、むろん、日本の経済の動きの外にいることが、できないのです。

◇新しい企画としては、前記「読者の生活記録」と昨年「キリスト教入門」で好評だった高木幹太先生の「恋愛論」をおおくりします。従来のページの充実とともにご期待ください。

## 6月号・予告

〈信仰に生きる6〉
**あるバタヤの生活記録から**
——最下層に生きるキリスト者——
〈わが信仰の生涯〉
**俠客の子と生まれて**　（衆議院議員）　**西村　関一**
〈伝道説教〉（下谷教会牧師）　**菊池　吉弥**
〈巻頭随想〉
**正木ひろし、青山四郎、松岡励子**
〈キリスト教のいろは6〉
**神はあるか**　**島村　亀鶴**
〈聖句をめぐる座談会6〉
**権威に従え**（ロマ一三章一節）
〔新連載〕
**恋愛論**　**高木　幹太**
キリスト者の恋愛は？　男とは？　女とは？
**読者の証し**
ご投稿をお待ちしています。具体的な生活の記録です。次号は大阪市・佐藤健一氏の「なんでもないこと」（愛するようになるまで応募原稿）です。
〈社会を見る目〉
**天皇・神社への不敬罪法**
**愛すること生きること**　**久山　康**
**讃美の泉**　**津川　主一**
〈生きる意味について6〉
**連帯社会としての福祉国家**　**佐古純一郎**
**印刷所**　**株式会社　恒陽社印刷所**
〈小説〉
**夜警番の日記6**　**椎名　麟三**


月刊キリスト

昭和三六年　四　月二五日　印刷
昭和三六年　五　月　一日　発行

編集人　高戸　要
発行人　浜崎次郎
発行所　日本基督教協議会　文書事業部
東京都中央区銀座四ノ二
振替　口座・東京一一六七九
電話(561)六一三一・八四四六
発売所　教文館
東京都中央区銀座四ノ二
毎日新聞社販売店
東京都中央区有楽町一ノ二
印刷所　株式会社　恒陽社印刷所



直接、ご購読になりたいかたは、発行所まで、お申しこみください。

五月末までのお申しこみは
一部　五〇円（〒四円）
半年　三〇〇円（〒共）
一年　五五〇円（〒共）
二部二〇仙（海外）

# お知らせ

「月刊キリスト」発行所

## 六月号から六〇円に

まことに残念なお知らせをしなければなりません。と申しますのは、来る六月号から、どうしても誌代を六〇円にしないとやっていけなくなったのです。じつは、すでに、この五月号が、かなりの赤字なのです。なんとかして、この値上げブームにさからって、今までの定価を守っていきたいと努力したのですが、ページを減らしても、表紙の色刷りをやめても、どうしても、やっていけなくなったのです。

これは、印刷費、紙代の値上がり、人件費の値上がり、運賃の値上がり、近く実施される郵便料金の値上げなどから、しわよせされて生じてきたものです。

愛読者の皆さまも、きっと周囲の値上げ攻勢に悩まされておられることと思います。そのようなときに、たとい一〇円でも、ご負担を多くすることは、心苦しいのですが、なんとか、この雑誌を続けていくために、また、少しでも、内容が良くなり、多くの人に読まれるために、お許しねがいたいと思います。

## 予約購読の方は

半年360円・一年700円に

したがって、予約購読については、今までの半年三〇〇円（送料共）、一年五五〇円（送料共）を**半年三六〇円**（送料共）、**一年七〇〇円**（送料共）とさせていただきます。

しかし、とくべつに、五月三一日までの予約申しこみ（前金）は旧料金で、お取りあつかいいたします。五月号で前金が切れたかたはもとより、五月以後に前金が切れるかたも、**五月中に前金**でお申しこみになれば、**一年五五〇円**、**半年三〇〇円**です。

このサービスは、教文館、聖文舎、日曜世界社などのキリスト教専門書店または本誌発行所で行なっております。

## ご送金について

ご送金は、今まで、現金を封入してくださるかたが多うございましたが、七月から、現金を封入することを郵政省で許さなくなりますので、七月以後のご送金はなるべく振替でお送りください。お忙しくて、郵便局へ行けないかたは、一〇円切手で、ご送金くださってもかまいません。しかし、なるべく、振替か、カワセか、現金封筒をおつかいください。

いずれの場合も、本誌におりこんである振替用紙のうらの申しこみ書にご記入の上、ご送金なさると便利です。

パーマネントの頭がころがっていて、そのボサボサになった髪の毛に半ば蔽われた青白い小さな顔が、その頭の附加物といった感じでその髪の毛のなかからむき出しになっていた。もちろんそれは順子の顔だった。しかし私には順子という気はしなかったのである。その彼女は、いかにもおとなしすぎ、平静すぎて、私の出会った順子とは全くちがったように見えたからだ。しかもその彼女は、眼をとじていて、無念無想の行でもしているといった感じなのだ。医者と小声で話していた私服の警官がふいに私へいった。

「どうだ、女を見てかわいそうなことをしたと思わんかね？」

私はだまっていた。どう返事していいかわからなかったのである。だが、その私はふいに誰からか見られている気配を感じた。おずおず見ると、その部屋のなかには、ほかに四、五箇のベッドがあり、その上の患者たちや附添いの人々が、私服の警官からたずねられている五十男の私へ改めて注意を向けはじめているのがわかった。私は、なんとなく後退りした。警官は、その私の様子に考えを変えたらしく、歩き出しながら面白くもない声でいった

「じゃ、出よう」

私は、釈然としない警官の顔を残して病院を出た。しかし釈然としなかったのは、私の方だったのである。私は、たしかに順子のすかっていたことにほっとはしていたが、しかし心からの喜びを感じていたというふうではなかったからだ。どうしてそういうふうになるのかわからなかったが、私は、あの彼女につながれてしまっている感じがしていただけでなく、そのことに憂鬱さえ感じていたのだ。私は、その感じにとまどい、足にまかせて知らない通りを歩きながら、一体自分はどうなるのだろうと考えていたのである。その私には、あの私服の警官が私に問いつめたときの言葉が、まるで私を脅かすように思いうかんでいたのである。私はその言葉を遂に口に出して呟いていた。

『ほんとに、ほんとに何の関係もないのか』

私は、自分の口にしたその言葉の前にたちすくんでしまっていた。私が彼女をたずねた動機には、みじんもそんな心なんかなかったはずだのに、まるで自分でも気付かない野心を彼女に対してもっていたかのようなやましさが感じられて来たからだった。

『ほんとに、……ほんとに……』と私は繰り返した。

私の身体に羞恥がつらぬいた。そして情ないことにはまたもやあの警官のときと同じように額の汗をぬぐわなければならなかったのだった。全くその私は私自身をつかみかねていた。たしかに私は、彼女に会う前からあれこれ心から心配しながら、彼女のアパートをたずねたことは事実だった。しかし心から心配するということは、野心でなくても愛なのであろうか。ことに相手が若い女の場合、私のような五十男の独身者は、その女のことをあれこれ心配するということは、愛とか憎しみをまじえずに不可能なことなのだろうか。

『ほんとに……ほんとにといわれると、自分もあやしくなるなあ』と私は慨嘆しながら呟いた。

そして気がつくと、私の眼の前に近々と五才ぐらいの幼児が立っていて、私をいぶかしそうにのぞくようにしながら、見上げているのだ。私は、思わずその幼児へたずねた。

「わたしがどうかしたかい？」

すると幼児は、一瞬身をひるがえすようにしてはなれたが、すぐに軽蔑したように、

「変なの！」

と叫ぶと、駈け出して行ったのだった。私は溜息をついて、都電の通っているひびきをたよりに、その通りの方へ向って歩き出した。そして何気なく振り返ると、青いセーターを着せられているその幼児は、立止ったまま、まだ私の方を眺めているようなのだった。

『変なの！……か』と私は心に呟いた。

たしかに私は、変であった。私は、何か大切なものでも失ったように、とぼとぼと歩き出していたのであった。

（つづく）

## 読者の声

★ご投稿を歓迎します。
★謝礼を呈上します。
★住所、氏名、職業、年令をご明記ください。

### 物心両面の救いを

――真木さんに答えて・その2――

「貧しい人々をどうする」ということは社会的な大きな問題です。個々バラバラな力ではどうにもならない、国民全体で考えるべきです。まず貧困のおきる原因には、大きく分けて二通りあると思います。

国や世界の経済動向に左右されておきる貧困（輸出入による、国際収支の赤字、経済力成長政策による貧富の差、企業合理化による失業者増大、諸物価値上げによる実質賃金の低下）など。個々におきる貧困（天災地変による災害、死亡、生別れ、疾病障害、失職、事業失敗、自からおこすトバク行為、飲酒遊とう、犯罪）など両者ともに国の政策による社会保障充実により解決すべき問題と思います。後者の場合は、物質だけでは解決しない問題が含まれています。あなたのご感見提供の救いが必要です。人間の生活には、物心両面の救いがあってこそほんとうに貧困から救われるものと思います。現実の問題を解決するには長い時間がかかりますが、やはり聖書による神の福音を広め、神の知恵と愛を基盤として、社会保障や教済を進めてゆけば、あなたの心配される「貧しい人々」はいなくなるものと思います。

聖書のみことばの中に、「金持が神の国に入るのは、ラクダの針の穴を通るより難かしい」とあります。裕福な人も、貧しい人、罪人も同じ信仰をもち、兄弟姉妹であることは感謝すべきだと思います。

（福岡県・嘉穂郡・宮川富男・鉱員・35才）

### 国家主義は悪いか

四月号六七ページに、谷口雅春著『ヨハネ伝講義』の広告について、無神経すぎるとしてその掲載を難じておられ、編集部も同調しておられるが、谷口師はアメリカのニューソートの基督教師たちからは、日本でより以上に尊敬されており、近代進歩的な狭い社会思潮の中にある日本でこそ、師に対する認識を意っている。

国家主義的がなぜ悪いか、四月号の共産党の赤旗栄氏よりは、まだ谷口師のほうが日本にとってはありがたい存在である。また聖書講義は、牧師でなくてもだれでもよいはずである。聖書は万民のものであるはずである。唯物論的、思惟的な執筆の多い『月刊キリスト』は小生もウンザリしている。もっともっと唯神的、唯心的な執筆がほしい。生長の家は、なにを説いているかも知らず、単に新興宗教という合ことばで、この尊敬すべき師を無視しようという読者の多い（？）のにあきれる。イエスは、この『月刊キリスト』を決してよろこばれはせられますまい。

（尼崎市・大塚秀松）

### 趣味的なクリスチャン

たくさんの記事を読み、心をみたすことができました。心も体もたしかに新しくかえられている自分を、改めて知ることができたのですが、「この世と妥協するな」という座談会には、いくつもの疑問をもちました。

クリスチャンはここに語られているように、はっきり自分の意見を出すことを、いつもおさえるようにしてきた。あの安保問題だけでなく、あらゆる社会の問題をみていながら、クリスチャン個人のそれぞれの意見というものは、ほとんどなかったにひとしい。教会はたしかに働いていたかもしれないが、平信者の意見は一つとして発表されはしなかった。これは趣味的クリスチャンのいい証拠だ。教会というあたたかい家庭的ムードに酔わされているのに満足しすぎる間に、社会は政治は個人的生活は、いろんなテーマーをなげ、多くの人々をキズつけてきた。これを救うのは、夜三〇分の祈りだけで解決できなくなっている。ナマのイエスをとおしてものを考え、行動する時代がきているのだ。

信仰が個人の生活からきりはなされた、四角いたまご的証しはおことわりしたいのだ。いろんな社会でキリスト教は生きている。それはおもてに出ない小さなものが多い。しかしストライキもデモも真剣にのぞめば、キズつけそしてキズつく態度には、おちいりはすまい。そこに信仰をあからさまにせずに、祈りをもちながら行動している人がいる。それぞれの立場で祈るところに、現代の真のキリスト教があるのではないだろうか？

（山口県・都濃郡・国兼浩子・21才）

### 現実にぶつかって生きる

キリスト者の生き方は強いといわれ、聖書にも指摘されながら、いままでクリスチャンといわれる人たちの生活を見ていると（外観しか知らないためかもしれないが）なんでも現実を肯定して満足してしまっているという感じが、ぬぐいきれないでいましたが、三月号、「詩人、江口榛一氏の生活と意見」には、現実に正面からぶつかっていく生き方を見、感激いたしました。

「信仰に生きる」ずっと続けてください。それから、表紙についての説明をどこかに入れてはいかがですか。

（広島市・広大医学部付属看護学校寮・石原幸子・看護学生・20才）

が、そこに待っているたくさんの外来の患者たちは、一人も私に注意をはらっているように見えなかっただけでなく、ときどき廊下を通りすぎて行く看護婦たちも、私の方を振りかえりもしなかったのだ。

『自分はこのまま帰ることもできるんだ』と私は考えた。

だが、そのときもう受付の女は、四十ぐらいの背広姿の男をつれて引き返していたのである。私は、その姿に衝撃を感じた。順子がやはり死んでいるのだという気がしたからだ。受付の女は私へ近付くといった。

「警察の方が用事があるそうなんですよ」

私は、靴を脱いで、備付けのぞうりとはきかえた。女は、その私たちを広い廊下の方へ案内して行き、事務室の隣りの部屋のドアをあけた。細長くせまくるしい部屋で、間に合せのそれのように殺風景だった。それでもソファが置いてあって、応接室らしいのだ。私服の男は、私の住所や名や勤先などを聞き身分証明書を出させた。それから何思ったかその証明書をもったまま立上ると部屋を出ていったのであった。何かを調べるためであることは明らかだった。

『何が何やらさっぱりわからない』と私は考えた。

私服の男はなかなか帰って来なかった。逃げるならいまなら逃げられるな、というばかげた考えがうかんだ。なぜなら私には、逃げる必要なんか全くなかったからである。それでも私は仕方なさそうに立上った。その細長い部屋の一方には、窓があって、半びらきになっているその窓から、くろずんで生気のない植込みの椿の葉がのぞいていたからだった。私は、その窓へ近付いた。小さな植込みの向うの街路にトラックやら自転車やらが忙しげに通っていた。もちろん窓には鉄格子なんかなく、私にだって平気でとび降りられる高さなのだ。といって私に逃げるつもりは全くなかったのだ。

そのとき救急車のサイレンが聞えたと思うと、消防署と白い車体に書いてある車が車寄せに入って来たのである。するとまるでその救急車を待ちかまえていたかのように、三、四人の看護婦がとび出して来たのであった。彼女たちは救急車のサイレンが近付けば、そのようにするように訓練されているのにちがいなかった。すると救急車の後部がひらいて黒制帽の白衣の男がとび出して来た。そしてなかにも係員が一人いるらしく、重そうな担架が運び出されて来たのである。そして看護婦たちは、その担架を受取ると、急いで玄関のなかへ消えて行ったのだ。その動作は、いかにも馴れているというふうだった。そのとき、植込みの前で自転車をとめてそれを見ていた商人風の男が、通行人にこういっているのが聞えた。

「あの女も、きっと自殺したやつですよ。寝巻を着ていましたからなあ。この病院の院長は、篤志なんでしてな、自殺者の面倒をよくみるんですよ。一日に、多いときは三人ぐらいの自殺がかつぎ込まれて来ますよ」

私は、笠城順子も、あのようにかつぎ込まれて来たのだろうと思った。それは私の想像のなかで、みじめすぎる姿となって思いうかんだ。私は、打ちのめされた気持になって自分の席へかえった。まるで生きて行く方途でも失ったかのような気がしていた。全くいままで彼女に対して何をしていたんだろうという後悔が、ちらりとその私の心をかすめた。

「それじゃ、それじゃ、死んだというんじゃないんですね」と私はやっと帰って来た私服の警官へいった、

「助かりそうなんですね」

「まあ、医者はそういっていますがね」と彼はうたがわしそうにいった。「どうしてそんなに心配なんですか。そんなに心配するなんて自分でもおかしいと思いませんか？」

「それはおかしいかも知れませんが」

「どうです、みんな正直にいってしまっては。警察は、遺書はないにしても明らかに自殺だと思っているんですし、あなたに迷惑のか

かる心配はないんですよ。ただ、警察は事件の真実が知りたいだけなんですよ。だから正直にかくさずにいってもらうと、おたがいに面倒がはぶけるんですがね」

「だから何の関係もないんです。ただ、知り合いだというだけで」

「やはり警察に協力していただけないのかなあ」と私服の警官は少し機嫌を損じたようにいった。「本人がいまの昏睡状態からさめれば、すぐすっかりわかることなんですよ。あなたはもう五十をすぎている年輩の方でしょう。そんな恥しいことになってもいいんですか？　自分からいった方が気持がいいだけ、とくじゃありませんか？」

「それはよくわかります。しかしほんとに昨日はじめて会ったばかりなんで」

「どうだかな。まあ、あなたのいう通りだとしましょう。それではどこまでも、あの女とは関係がないというんですね」

「ええ」

「ほんとにかね？」と警官はがらりと態度をかえた、「ほんとに、ほんとに何の関係もなかったといいはるんだね」

私は、額へ手をもって行った。どうして嘘でもついているように汗が出て来たのかさっぱりわからなかった。ただ自分がやましい気のしていたことは事実だった。まるであの順子と何かあったかのようにだ。だが、その私は、へどもどとであったが、こうこたえていたのである。

「何の、何の関係もないとはいっていません。つまり、その、世間でいう意味での男女関係はなかったんです」

「わからないね」と警官は私の額の汗へうすら笑いをうかべながらいった、「あなたのいうことはあいまいでさっぱりわかりゃしないよ。関係はないといってみたり、あるといってみたり、どっちがほんとうなんだね」

「だからつまり、世間でいうような意味ではなかったんです」

「ほんとに？」と警官は意地わるく念を押した。

私は、だまってしまった。ほんとにといわれると、警官から指摘されていながら、自分でもあいまいな気持になっているのに気付かずにはいられなかったからだ。しかもその私は、あさはかにもこう考えていたのだ。

『ひょっとしたら、自分はあの女が好きだったんだろうか？』

しかし私はすぐに、そんな私自身に絶望していたことはいうまでもない。私は、私自身の責任をつぐなうために彼女のことをいろいろ心配していたのだといまのいままで思い込んでいたからである。だが、警官は、私と彼女との痴情関係に狙いをきめているらしかった。というのは彼はこういったからだった。

「世間の常識によるとだね、独り者の年輩の男が、夫に死なれた女のところへだぜ、一日に二回もたずねて行ってだね、その後で自殺の心配があるとアパートの人に口走っているなんていうことは、警察としては、何かあったと見なければならないじゃないか。ぼくは、実はこの病院からの帰りに、あなたのところへ寄ってそのことを聞きたいと思っていたんですよ。ところが丁度そこへあなたが来たというわけだ。だからこの際、正直に白状した方が、おたがいの手数がはぶけるというもんじゃないか。そうでしょ？　だからもう一度たずねますよ。どんな関係があったんです？」

「だから先程も申し上げた通り、笠城さんの御主人がなくなったことに私にも責任があると思って、おうかがいしたところが……」

警官は、手をあげて私を遮ると、腹立たしげに立上った。

「よし、わかった。あなたみたいな強情な人は知らんよ。よし、あなたがどうしたのか、相手の女を見せてやろう」

ベッドの傍に立っていた若い医者が振り向いた。ベッドの上には盲縞のいかにも古物らしい蒲団がしわになってまくれ上っていた。病院からの借物の蒲団にちがいないのだ。しかしその蒲団の向うに

# 夜警番の日記(5)

椎名麟三

## 5 関心について

都電に揺られながら、私は心に呟いた。

『わたしは一体何をしたというんだろう！』

その私には、笠城順子が赤い布をもちながら部屋のなかに突っ立っていた姿が思いうかんでいた。私はあの女とは何の関係もないはずだった。しかも職場の倉庫係の吉田のいうように自殺はその当人ひとりの責任かも知れなかった。たとえ死しかえらぶことができない状況に追いつめられていても、現実に死をえらぶかえらばないかはその当人の意志によるものなのだ。ということは死をえらばなくてもすむからだ。そして私が教会で聞き、聖書から学んだことは、人間がどんなに追いつめられても、その人間の死に値する状況というものは、イエス・キリストにおいてはなくなっているということであり、それが私の信仰だった。だから自殺するということは、少くともイエス・キリストに対する一つの裏切りにちがいなかった。それでなくても私は、思い切りのいい男だった。死をえらんだような女には用のないはずだった。十年ほど前、妻が男をつくって去って行ったときも、もちろんそれは私にとって少くない痛手だったが、一方では、なるほど、そうかと思って、彼女の行先へ乗り込んで行こうともしなかったくらいだった。私は、小さな工場の夜警番にすぎなかったし、夜と昼とをとりちがえて生活している人間だったからである。だから妻の虚栄をみたしてやることなんかできなかっただけでなく、彼女に、肉体的な喜びをさえ十分にあたえてやれなかった以上、そんな男は、妻から捨てられても当然ではない

か。そして私は、それでも一週間は苦しんだが、すぐ妻のいない生活にも馴れてしまっていた。その点、私は順応性があるといえるのだ。だから笠城順子の順子という名が、妻のそれと同じであるにもかかわらず、私は、今日までそのことを思い出したこともないくらいだったのである。そして私は、きっぱりしており、きっぱりできる男と自分を考えていた。だが私は、笠城順子がどうなったのか、あれこれ思いわずらいながら、こう心で繰り返していたのであった。

『神さま、どうかあの女が無事でありますように』

その私は、あの女が万一、死んでいさえすれば、自分にもきっぱりした態度がとれるだろうという気もしていたのである。しかしやはり一方、彼女の残した二人の子供の面倒を見てやることはできなくても、このことだねて行くぐらいのことはするにちがいない大儀な自分も感じていたのである。私は、M町の停留所で降りた。不安な緊張が、私のなかに強くなっていた。しかし私は、たとえ彼女が助かっていたとしても、彼女にどうしてやっていいのかも見当つかないでいなかったのだ。

教えられた荒木病院の車寄せのポーチは、うす汚れていてまるで何十年も前からそこにあったとでもいうように古びて見えた。工場にかこまれているこの病院は、きっと煤煙の雨で汚されてしまっているにちがいなかった。ドアを入るとひろい待合室があった。そこには原始的な大きな炉が切ってあって、その炉で何か燃すのか、折角の白壁もうす汚れているのだ。しかしその待合室には、意外なほどの外来患者らしい人々で混雑していた。私は、受付で、今朝ここへ救急車で運ばれて来たという笠城順子のことをたずねながらいった。

「助かりましたでしょうか？」

受付の女は、急にだまって不審そうな眼で私を見た。残念なことには、その私の声はかすれてしまっていたからだった。全く私は、事実をたしかめればよかったので、声をかすれさす必要なんかなかったはずなのだ。私は、その自分に気付いてふたたびたずね直した。

「やはりだめだったんでしょうか？」

受付の女は、ますます不審そうに私を見ながらやっと口をきいた。

「あなたは、笠城さんとどんな御関係の方なんですか？」

私は、受付でこんな尋問にあおうとは思いがけなかった。私は思わずたじろぎながらもいった。

「どんな関係って、つまり知り合いというだけなんです」

「御近所の方？」

「いいえ、近所じゃありませんけど」と私はますますたじろぎながら、その自分をかくすように冗談めいた口調でいった、「患者がたすかったかたすからないか、おうかがいするのになかなかむつかしいんですね」

「警察の方からいいつけられているんです」と女は切口上にいった。

それで私は、しゅんとしてしまった。女は、私に氏名を聞いた。私は、どぎまぎしながらもそれへ答えた。しかし女は、その氏名を書きとろうともせずに私を不審げにみつめたままなのだ。だがその女の眼は、たしかに順子と私との関係を誤解しているようなのだ。すると私に余計なことが起った。自分の顔に血の上って来るのを感じたのだ。それでなくても五十男の赤い顔というのは、あまり見よいものではないということを知っていたにもかかわらずだ。すると受付の女はふいに立上っていった。

「ちょっと待っていて下さい」それからふたたび歩き出そうとして念を押したのだ、「そこにきっと待っていて下さいよ」

それから彼女は、駈け出しながら部屋をとび出して行ったのだ。私は、その彼女の様子にかすかな脅えを感じた。あるいは順子は、自殺ではなく、他殺で、受付の女にその犯人らしい男と思われたのではないかという気がしたのである。私は、自分の陥っている事態をたしかめようとでもするように、あわてて待合室の方を見た。だ

# 讃美の泉 (5)

――讃美歌物語――

津川主一

## 21 いのちのみことば――五〇一

イギリスのバーシンガム市のメソジスト教会の一牧師が、あるとき、次のような経験をした。

この牧師は、神経痛で、ひどく悩んでいる老人の家を、訪問したのである。牧師は老人の枕もとで、「いのちのみことば、たえにくすし、見えざる御神の、むねをしめし……」と、しずかに、しかし心をこめて歌った。

歌いおわると、老人は目に涙をいっぱいためて、牧師に言った。

「先生！　この歌を聞いて、わたくしは全く痛みを忘れました！」

弱りきった老人のほおには、熱い涙が、とめどもなく流れたのである。

この老人は、それから数日たって、この世を去った。牧師は、その知らせを受け、心で自分自身に言いきかせた。

「あの老人はこんどこそ、ほんとうに、もう悩みも、痛みもない国へと、行っているのであろう」と。

## 22 イエスよ心にやどりて――五二一

モルモン宗の本山のあるユタ州で起った話である。

一八九三年のある日、ブラッドレー牧師のいる、これもメソジスト教会へ、ひとりの婦人が出席した。この婦人は、モルモン州の移民として、そこへ移住してきた人であった。

それから何回も出席したが、どうしても心の安定が得られない。こうして幾週間は過ぎ去ったが、ある日曜日の翌朝、家事にいそしんでいるとき、ふと前日に、教会でうたった讃美歌が、口にのぼってきた。「イエスよ心にやどりて……」と、だんだん歌っていく間に、五節の終りの句にきた。われわれの讃美歌では、例のごとく切りすてられてしまっているが、原語では、「主は、探し求むる者を、こばみ給うことなし」とある。

電光のように、一瞬彼女の脳裡で、霊感がひらめき、救いのかぎをとらえることができた。

そして心のやすらぎが得られ、ついにそのかくし切れぬ喜びを、ブラッドレー牧師に、打ちあけたのであった。

### 23 いつくしみ深き友なるイエスは——三一二

「とおときわが友」のことばで、長く歌われてきた、大衆的な讃美歌。同じふしで、母の日の歌もうたわれ、このふしは学校の教科書にも編入されている。

一八四五年に、ひとりの孤独なスコットランドの若者がカナダに移住してきた。二五才の青年でジョセフ・スクライヴンといった。

この青年は、婚約していた女性と、結婚式をあげる日に、事故のために死別しなければならなかったのである。

この憂うつな青年は、以後、きわめてじみな生活をおくり、孤独な人たち、それから貧しい人たちの友となって一生を終った。

一日、病床にあったとき、看護のために来てくれた近所の人が、この讃美歌詩の原稿をみつけ、これがスクライヴンの手に成ったことを、はじめて知ったのである。

のち彼は、憂うつ症にかかり、湖水に身を投げたが、その地点には、今も、この寂しく美しい讃美歌碑が立っており、唯一のかたみの、この歌は、東京クルセードの千人聖歌隊によっても、合唱されることになっているのである。

### 24 都のそとなる丘の上に——二六一

牧師の忠実な妻として、一生をイエスと世の人々のために捧げつくしたアレキサンダー夫人が、まだ結婚しない前に書いた詩で、一生の間に約四〇〇の聖詩を書いたといわれる。

この詩は、世話していたこどもの一人が病床に伏せっているとき、これを看護しながら夜書いたもの。このこどもは、あとで病気がなおってから、

「これは、わたくしの讃美歌だ」と言っていたそうである。

ところが、それから幾年ものち、普仏戦争の難を避けて、楽聖シャルル・グノーがロンドンに出かけ、グノー合唱団を組織して、芸術活動をつづけていたころのこと。イギリス人の学校から帰ってきた娘のジャンヌが、学校で教わった讃美歌詩を暗誦しているのを聞いて感動し、すぐにこれに作曲したのが、この讃美歌の独唱版とし、あるいは編曲されてコーラスで歌われる曲である。

作曲してから、その自筆の楽稿をアレキサンダー夫人に、グノーは贈ったが、夫人はながく家宝として、それを秘蔵していたそうである。

### 25 くすしき血しおの湧く泉に——旧二五六

詩人ウィリアム・クーパーが、友人のジョン・ニュートン牧師の感化をつよく受けていたころに書いたと言われるオルネー讃美歌中の代表的なこの福音的讃美歌も、こんど日本の讃美歌のなかから、抹殺されてしまった。

この詩はローウェル・メイスンの大衆的で、敬虔な曲とともに、サンキーなどが言っているように、どれだけの人たちを神に導いたかしれない。

たとえばスコットランドのグラスゴー市である夜、ひとりの少年が、かわいらしい声で、この純情なメロディーを歌いながら行く。すると立ち番していたクリスチャンの警官が、これに和して歌った。

ところが数日たってから、ある人が警官に語りかけ、

「あの晩、あなたと少年が歌っていた、讃美歌を聞いて、心の目覚めを経験し、救いにはいった婦人のあることを、ご存じですか」

と、言ったこともあるそうであった。

わたくしも、この讃美歌を静かに歌って、ひとり涙にむせんだことがある。そういう歌は、決してたくさんあるものではない。

（以下次号）

（関東合唱連盟理事長）

はじつにたくみに分析したわけで、そのことは、今日なお多くの示唆を与えてくれると思います。

しかし、マルクスは労働者の人間疎外を、生産物による疎外ということに比重をかけすぎて、労働の過程で起ってくる疎外という問題についてあまり重みをかけなかったように思われます。つまり、あまりにも社会経済的条件を重くみすぎて、実存的条件をほとんどかえりみなかったところに、マルクスの欠陥があったように思われます。階級性ということを宿命論的に考えすぎました。その点については務台理作氏がつぎのように批判しております。「マルクス主義は社会的条件について、唯物史観の立場から、近代資本制社会の成立とその発展の過程を明らかにし、とくに商品生産の過程を分析して近代資本制社会の中に現われる矛盾を明らかにしているのですが、人間現実の中に含まれている実存性の役割については、その独自の意味を認めようとしません。そのためマルクス主義は、すべての人はあたかも生まれながらに階級意識をそなえ、生まれながらに賃金労働者であったり、利潤寄生者であったかのように人間をみているのではないでしょうか」(『人間と倫理』)

マルクスが人間の実存性について深く考えなかったのは、やはり、彼の唯物史観に問題があるのです。たしかにマルクスが洞察したように、資本主義社会では労働者の疎外が起ってくるわけですが、それなら社会主義社会ではそういう問題が起らないのでしょうか。そういうわけにはまいりません。社会的条件だけを考えたら、資本主義を克服して社会主義社会をつくることで疎外は克服することができそうに思われますが、人間をそうおめでたく考えるわけにはまいりません。マルクスの洞察に深く耳を傾けなければならないことはわたくしも承認するのですが、それを絶対化するところからはマルクス主義的偏見しか生まれてこないでしょう。マルクス主義的偏見には陥りたくないのです。

**連帯社会**　みんなが働く社会、働きたい人が働ける社会、働けない人がこまらない社会、そういう社会のことをわたくしは、連帯社会という観念としてイメージしたいのです。そうして、連帯社会においていちばんたいせつなことは労働観念の変革ということです。生きる意味を、ものをつくり出す労働生活のなかから見出していくことです。労働をさげすむような考えかたを自分のなかではっきりと清算し、働かないで食べようなどと考えることに恥を覚えるような人間になることです。

そうして、労働するということを、自分を中心にして考えることからぬけ出して、労働をとおして参与していくのだという積極的な方向に考えていくようになることです。そういう労働観念が変革されないかぎり、どうしても連帯社会の創造ということは不可能であります。

そこから、わたくしは、マルクス主義によってではありませんが、やはり、資本主義社会をどうしても克服していかなければならないという決断に達するのです。なぜなら、資本主義社会では、わたくしがいまいったような労働観念は生まれようがありません。したがって、資本主義社会をなり立たせている社会の機構をそのままにして、とうていわたくしのいわゆる連帯社会は実現できないのです。わたくしは今日、資本主義社会を変革しなければ、人間に労働の平等性は保証されないという考えかたにはっきり立つのですが、

それを、階級闘争という形ではわたくしは問いません。やはり民主主義を徹底化していくところから、必然的に開かれてくる社会主義への道をわたくしは選ぶのです。

民主主義を社会主義実現の手段と考えるのではなく、むしろ社会主義を民主主義実現の手段と考えるのです。その点で、たとえば議会制民主主義ということについても、それを、民主主義の手段によってなにかをつくり出していく制度というふうに考える考えかたをわたくしはとりません。社会主義が目的なのではなく、民主主義を完成することが目的なのです。民主主義を完成していったら、どうしてもわたくしのいう連帯社会の方向をとることになります。しかしそのためには、わたくしたちは、せっかちであってはなりません。一朝一夕で民主主義の社会が実現できるなどと考えてはなりません。

それよりも、わずか十数年で、民主主義の社会がつくりあげられなかったことに、いたずらにいらだたしさを感じて、逆に、民主主義から非民主主義の方向にわたくしたちの社会をひきもどそうとする勢力や、動きがあることのほうが危険であります。わたくしたちはそういう逆コースにたいして、徹底的に拒絶をしていかなければなりません。そうしないなら、生きる意味を力強く見出していく条件をつくり出すことはできないでありましょう。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

いうまでもなく、これは日本国憲法の前文であります。日本国民は決意した、とありますが、いったい、だれが決意したのですか。わたくしたちひとりびとりが決意するのでないなら、これは単なるお題目です。この日本国憲法の理念を、わたくしたちの社会で現実化していくことが、わたくしのいわゆる連帯社会の創造ということに深くつながってくると確信いたします。そこからさらに、

すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない

という第二五条の持つ意味が具体的に出てくるのです。民主主義を実現していくということはこういうことでなければなりません。わたくしの連帯社会というイメージは、けっして、空しい夢ではないはずです。それはもうわたくしたちが権利として主張できる根拠を持っているのです。この問題をさらにわたくしはいわゆる「福祉国家」の問題として考えてみたいと思います。

（次回のテーマは『連帯社会としての福祉国家』）

るかによって、わたくしたちの人生はたいへんなちがいが出てくるのです。わたくしは、労働は目的だと思っております。いいかえるなら、わたくしにとって、労働するということは、食べるための手段ではありません。そんなうそをいってはいけない、お前だって食べるために働いているのじゃないか、といわれるかもしれません。食べるために文章だって書いているのだろうといわれるかもしれません。客観的にはそう思われてもしかたがないでしょうが、わたくし自身は、もっとちがったモチーフから文章を書くという労働をしているのです。

労働が食べるための手段でしかない場合、わたくしたちは労働のなかで喜びが見出されません。それに、啄木ではありませんが、働いても働いても暮しが楽にならない、ということですと、食べるための手段としても、労働はみじめになってくるでしょう。労働するということが、単に食べるための手段であるというのは、要するに、労働するということが、自分を中心にしてしか考えられていないことなのです。自分のために働くことなのです。しかし、労働するということはそういうことなのでしょうか。わたくしたちは、なによりもまず、労働するということを、自己中心的に考える考えかたから解放されなければなりません。わたくしはそのことを、労働の社会化というふうに考えるのです。

いったい、わたくしは自分のために文章を書くなどということがありうるでしょうか。わたくしには文章を書くことをそういうものとしては考えられないのです。わたくしは、文章を書くという労働をとおして、なにごとかに参与するのです。参与というよりも参加というほうがよければ、参加といってもいいのですが、労働するこ

とは参加することです。そのとき、労働は単なる手段ではなく、それ自体が目的になるわけです。労働することをとおして、なにごとかに参加するのだということが、はっきり自覚されてくるにしたがって、労働することには意味とよろこびとが出てきます。そうすると、わたくしたちは、働くためには食べなければならないということの意味がわかってきて、食べるということの保障をしっかりと見出さなければ、労働をとおして参与することができないことがわかってくるのです。食べるために働くのではなく、働くために食べるのだということが、そこではっきりとわかってくるでしょう。労働するということが参与なのだという前提にたってのみ、働こうとしない人は食べようとしてはならない、ということの意味がはっきりしてくるのです。

**みんなが働く社会**　みんなが働く社会、それが労働するということのなかで人間が生きる意味を見出す第一の条件です。人間の平等性ということを、むしろわたくしはそのような、労働の平等性ということで考えていきたいのです。社会の一部の人々が汗水たらして働いているのに、一部には、働くことをしないで楽に食べていこうなどと不都合なことを考えている人間がいるようでは、とうてい労働の平等性ということは成り立ちません。

しかし、みんなが働く社会が成り立つためには、働こうと意志するすべての人に、働く場所が与えられねばなりません。いくら働こうと思っても、社会がその人に働く場所を与えないということでは、やはり労働の平等性ということは空文に等しくなってしまいます。わたくしたちの社会の現実は、潜在的に一千万からの失業者を

持っているといわれます。こういうことでは、どうにもいたしかたがありません。労働人口が完全に労働しうる社会を、わたくしたちはなにかユートピアみたいに考えてはならないのです。それは、きっとわたくしたちの手でつくり出せる社会なのです。労働の社会化ということは、そうすることにおいてはじめて現実的な意味を持ってくるわけですから。

しかし、それだけでは困ります。みんなが働くといっても、現実に働くことができない人があります。児童、老人、病人その他いろいろの理由や原因で働けない人々がたくさんいるわけですが、そういう人々が生きていけない社会は、やはり労働の平等性が保証される社会ではないといえましょう。労働の社会化ということは、そういう労働できない人々の生活をも社会的に解決していくということをふくまなければなりません。

要するに、みんなが働く社会、働きたい人が働ける社会、働けない人が困らない社会、それがわたくしの労働の社会化ということの目安であり、わたくしの理想社会へのイメージであります。そうしてわたくしは、これはけっして空想ではないと思います。こういう社会をつくるかつくらないかが、生きる意味について問うということの実践的課題になるわけで、こういうことを離れて、どんなに立派な人生の意味づけがなされても、それは単なる空理空論になってしまうわけです。

**労働者の人間疎外**

ところが現実のわたくしたちの社会はあまりにもわたくしのイメージから遠いわけです。みんなが働く社会ということはだれひとりとして否定するはずはありませんが、働きたくても働く場所がないというのは現実であります。しかも、合理化という美しい名目で、たくさんの働く人々が職場から追放されていくのです。わたくしは、労働する人々を職場から追放することを合理化などとよぶことはたいへんおかしいと思います。それほどにも不合理なことはないからです。しかもそのようにして職場を失った人々を、受け入れてくれるような新しい職場というものはなかなかみつかりません。それだけではなくて、職場を失った人々は、その日から生きる条件を失うわけですから、たちまち人生が闇のようになってくるわけです。そのほか働くことのできないたくさんの人々が、けっして生活の保証を与えられておりません。わたくしたちの社会は、いったいこれでいいのでしょうか。

それを資本主義社会の矛盾として追求したのがカール・マルクスだったといえましょう。わたくしはマルクスの階級理論を全面的に受けいれることはできません。また、歴史を階級闘争の歴史として固定化して意味づけるマルクス主義の歴史観にも、同じがたい点をたくさん見出すのです。しかし、資本主義社会では、労働者の人間疎外はさけがたいとするマルクスの洞察は、今日なお深い真理性を失っていないと思います。マルクスの考えによりますと、資本主義社会では労働者は生産の手段を持たないわけですから、自分の労働力をすら商品化して売り渡さなければならない。しかもそのようにして自分の労働でつくり出す品物を自分が支配することができないで、かえって自分がつくるものによって生活がおびやかされるという、そういう疎外をどうしてもされることができないというわけです。そういうふうに、商品生産を特色とする資本主義社会で労働する人々が疎外されないわけにはいかない必然性について、マルクス

生きる意味について・第五章

# 労働するということ

佐古純一郎

働こうとしない者は食べることもしてはならない　それゆえ……

もし働こうとしないで、しかも食べることをしようとするような人がいるなら、そういう人をこそわたくしたちはさげすんでもいいのです。労働することをなにかしらいやしいことのように考えさせられてきたのはいったいどういうことなのでしょうか。それは資本主義というよりも、もっと以前からの問題であったものと思われます。人間が士農工商とわけられて、そこにきびしい身分の差がつけられていた封建社会で、農民といえば、「どん百姓」でありました。「百姓のぶんざいで、なにをいうか」というわけです。じっさいは、農民の汗水たらした労働にささえられてこそ生きる保証が与えられていたのに、そういう働く人々がいちばんさげすまれてきたのです。それが近代の資本主義社会にはいりますと、労働者に向けられるようになりました。労働する人自身が、自分の労働に誇りが感じられず、一日も早く働かないで食べていける身分になりたいと考えないでもなかったのです。

働かないで食べられる人があるとするなら、じつはそういう人たちはだれかの労働の上にあぐらをかいていることなのです。そういう人こそ「恥」を知ってもいいわけです。わたくしは人間が生きるということの意味づけを、労働するということから見出していきたいと思うのです。いいかえるなら、みんなが働くということ、そうして、自分が労働することに、限りない意味とよろこびとを見出しうるような生活、わたくしはそれが、人生を生きる意味だと思うのです。少なくともわたくし自身はそういうふうに考えているのです。ところが現実の社会はそうではありません。人間は労働することをむしろ嫌悪しているのです。そうして早く労働から解放されたいと願っているのです。労働することに意味が感じられなくなっているのです。これはたいへん不幸なことではないでしょうか。

労働とはなんでしょうか。それはものをつくる生活のことです。ものをつくる生活のなかによろこびが見出されてはじめて、わたくしたちは人生を創造的に生きることができるのだと思います。ところが、じっさいは、労働が耐えられない苦痛になっているのではないでしょうか。もちろん、ものをつくる生活には苦痛が伴ないます。しかし、その苦痛をつぐなってくれるのは、ものをつくることによろこびが見出されるときのことです。わたくしはこうして文章を書くことが労働なのですが、文章を書くということにも苦痛が伴ないます。ときには、それこそ頭が痛くなるほど苦しいことがあります。しかし、わたくしはその苦痛のなかに、むしろよろこびを感じるのです。苦痛のないよろこびなんてあろうとは思われません。

**食べるために働くのか、働くために食べるのか**　いったいわたくしたちは食べるために働いているのでしょうか、働くために食べているのでしょうか。そんなことは鶏がさきか卵がさきかというようなもので、ことばのもてあそびになりかねないのですが、しかし、労働するということの意味が、この二つのどちらから考えられるかによって、わたくしたちの人生はたいへんちがってくるようにも思われます。

食べるために働くのでしたら、働かないでも食べられるようになれば、人間は労働しなくなるかもしれません。お金をたくさんためて、早く働かないで食べられるようになろうなどと考える人がいるなら、その人は食べるために働いているのでしょう。つまりそこでは労働は手段にすぎないのです。労働を手段と考えるか目的と考え

からだの具合は　聞かないで！
くちびるだけの　ことばはいや！
　ひとにそむかれたときにこそ
　わたしの灰が光るでしょう
からだの具合は　聞かないで！
たとえ　からだが焼かれても
　わたしのあばら骨は　美しく
　あの人の胸を飾るでしょう」

なぜ、バラバーナが狂おしく、自分が死刑になりそうな、せまった口調になったのか――それは、ボウリヤにもわかること。愛する人にそむかれた、あわれなバーナの悲しみも、今では消えて、はっきりと、ろう内のだれにも目だつのは、ろうやの中でのお友だち・人ごろしボブのいつくしみ。

「とうとう、あのひとは死刑になるの。聞いてください、ボウリヤちゃん――こんどの土曜に呼び出され、わたしのボブはかわいそうに、ろうやの広場の射てき場で、兵たいどものれんしゅう台――てっぽうのまとにされるのよ。ゆうべはきれいなお月夜で、この地下ろうの格子から、ぼたんもあやめも白々と、夜目にもさやかにかがやいた。

ところが、そうっと、ボブさんの、まくらの上をのぞいたら、「かわいいボブ坊」と宛名のある、手紙がひらいてありました。

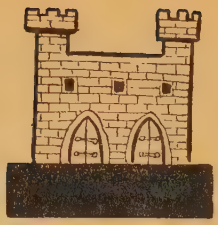
――かわいいボブ坊、さようなら。生まれたひとは死ぬけれど、殺された人は、生き返らぬ。おまえも死んでおわびする、つぐないの旅へおたちなさい。けれども、ひとりでは行かせない――おまえの時間ぴったりに、わたしもいっしょに行きましょう。かわいいボブよ、この母も、残されたいのちの一刻が、尊いなどとは思いません――この地上ではだれからもすてられ、見はなされ、つばきされ、塩さえかけられるナメクジが、ちょうど、わたしとおまえです。かわいいボブよ、ではこれから、墓場の石のコケのように、お手々を、しっかり、つないで行こ！」

いちにち　雨ふり　夕方に
すずろな風が　吹いてきた
　むこうの森の　こずえから
　あわい夕陽が　ななめに射す
古い石べい　コケむして
ドーフエやしきの　コケの花
だあれも見ない　ゴミのような
こんな　かすかな花だって
みめぐみなくば　咲かれない
　――じぶんひとりが思い立ち
　咲こうと　つぼみをつけたって
みずから咲かれる花はない！

じぶんひとりが思い秘め
咲かずにおろうと　つぼんでも
咲かずにおれるつぼみもない！
ごらんよ　夕陽にかがやいて
つゆを　ふくんだ　コケの花
めしべは天を　さしながら
女王の気品を　ただよわす

いちにち　雨ふり　夕方に
すずろな風が　吹いてきた
　むこうの森の　こずえから
　あわい夕陽が　ななめに射す
古い石べい　コケむして
ドーフェやしきの　五十人の
女中の　ほとんど　四十九人……
だあれも行かない　ろうやみち
きたない井戸べり　流し水の
ちょろちょろ流れる　くさいどぶの
どぶ川行けば　地下ろうの
入口まじかな　どぶたまり
　ろう番のほかは　だれも見ぬ！
　けれども　ポウリヤだけは見た！
あわい夕陽の　どぶ川に
はっと　おどろく　あでやかさ
やさしい天使のすそのような
あやめの花が、むらがり咲く
むらさきや　黄の　花の上に
ふしぎや　きれいな虹がたち
ひとつのあやめの花びらに
みんなが　いやしいとばかにする
一ぴきのさびしい　なめくじが
　ポウリヤ見上げて　ごあいさつ
「まあ　おきれいなポウリヤさん
虹たつ　きれいな　夕方ね
ちょうど　あなたの服のように！」
「あら　なめくじさん　あなたこそ
わたしなんかは及びもせぬ
きれいな　虹いろのおめしもの！」
そのポウリヤのことばどおり
あやめの花に　つつまれた
なめくじの背は　かがやかに
きれいな虹が　輪をえがく
ええ　そう！　わたしは知っている
——あやめの虹も　空の虹も
なめくじの背から　出たことを！
　ええ　そう！　わたしは信じている
　——あやめの虹も　空の虹も
　なめくじの背から　出たことを！

（つづく）



創作童話

# アリッポの乞食むすめ

絵・太田博也
文・岡林茂生

## 後篇　第五章　ぼたんの花とあやめの虹

生まれる前からの　おやくそく
枯木に見える　わたしだけど
ぼたんの精は　待っていたの
つぼみ　ゆるめて　ひらこうと
——たったひとりのお人でも
だれかが見たら　ひらこうと

ある朝　だれかの　やさしい目
だれだか　それは　知りません
けれども　ぼたんは　ゆるやかに
あなたの　ためにひらいたの
けれど　あなたは　見てくれぬ
すたすた　素足(すあし)で　行ったまま
百年　千年　まだ　来ない……

けれども　わたしは　気落ちせぬ
いえいえ　かたい　かたくなな
わたしの　つぼみを　ひらいたひと
あなたの　ふしぎな　おちからと
やさしい愛の　まなざしに
今　生き返った　このわたしも——
ぼたんの花も　ほこりやかに——
あなたの　おめぐみを　伝えましょう

わたしも　ぼたんも　夜な夜なは
おねむになって　つぼむけど
ひとりで　つぼむのではない——
どんなに　あやふい日の前も
わたしが安らかに　ねむれるのは
あなたを　つつんで　いるからなの！
どんなに　あらしの恐い夜も

ぼたんが花びら散らさぬのも
あなたを　しっかり　だいているから！
　すたすた素足で　行った人よ
　やさしい　まなざしで　見た人よ
あなたの　ちからに　ふれた以上
わたしの　いのちも　せいいっぱい
ひらける力のあるうちは
　朝々　地上に　咲き返る！
百年　千年　過ぎようと
ぼたんの精も　枯れるまで
あなたの　目ざめを　飾るでしょう。
あなたが　ふたたび　来ますまで！

人間には三つのことしかない。アレッポ村の人たちも、生まれて、生きて、死んでいく。そうして、だれもの願いなら、やっぱり三つのことしかない——生きたい、死にたい、笑いたい！

ドーフェ公のおさしずで、生まれて、生きて死んでいく、ただそれだけのことだから、三つの願いも、けっきょくは、どれでも同じことである。——死にたいというのは、生きたいこと！　生きたいというのも、もっと良く、自分のいのちを生きたいこと！　笑いたいというのも同じこと——真底からの喜びを、自分の胸に持ちたいこと！　ぼたんの花が咲くように、心にあふれる喜びを、ああ、わたしだって、どんなにか、自分の顔に咲かせたいか！

けれども、アレッポの人たちの、道で出会ったあいさつは、天候とからだのことばかり。

「——こんにちは、へんなお天気ね？」
「——からだの具合は、いかがです？」
けれども、そんなあいさつに、答えることばは風に消え、くちびるだけの動きである。

ドーフェやしきの地下ろうの、どろぼう女バラバーナは、そんなことばがきらいだった。意味ない地上のことばより、ろうやの中のあいさつは、もっと親身な実がある。しかも地下ろうの中だから、お天気なんかは知らないし、からだの具合はどうでもいい……

ドーフェおくさまの小間使、やさしい娘のポウリヤが、ろうやへタマゴを差入れて、からだの具合をきいたとき、
「うふふふ、あなたは子どもねえ……」
あわれむように、バラバーナは、自分の胸をゆびさした——
「からだの具合は、どんなでも、自分に関係のないことよ。人間が生きていくためには、こころの具合がたいせつです。ですから、わたしは答えるわ——ポウリヤ、わたしのたましいは、生きている人より元気なの！」

と言って、バラバーナは、鉄格子で、もらったタマゴをパチンと割り、そのままゴクンとのみこむと、おどけた調子で歌い出す——

ぴんぴん　生きてる人よりも
わたしは　もっと　生きている
こくんと　のみます　生たまご
ひよこが　ぴよぴよ　おなかでなく
　死んでいる死人より死んでいる
　生きている死人が　おどろくだろ

社会を見る目

# 池田内閣の宗教政策

宮崎彰

池田内閣の宗教政策は自民党の文教政策の一環として行なわれている。文教政策は党の基本方針から生まれるが、その柱石は新保守主義、修正資本主義および民主主義の三本建である。これはきわめて漸新に聞こえるが、みかけ倒しで前近代性と非合理性をチョンマゲのように残している。自民党は一九五五年一一月、保守勢力を結集して生まれた。その目標は総選挙に圧倒的な勝利を占めて、憲法改正に踏み切るためであったが失敗した。しかし、その野望をすててはいない。それどころか、現人神に郷愁をもつ反動右翼分子とともに、現憲法をアメリカ占領政策の遺物ときめつけ、万難を排してもこれを改正、主権在民をやめて立憲君主制を確立、自衛隊を独立させようともくろんでいる。目下、拡大解釈や行政措置などで実質的に憲法を改変しつつある。かかる反動性が近代性とまじり、それに派閥がからみあって、矛盾にみちた自民党の政策を生み出している。以下　一、自民党の文教政策　二、自民党の宗教政策　三、池田内閣の宗教政策および　四、今後の問題点についてのべよう。

一、自民党の文教政策

日本国憲法を改正しようとする党の根本方針は、文教政策においては教育基本法の改正という目標をとる。文部省と日教組とがことごとに衝突している現状であるが、文部省の方針が教育委員会や教科書などアメリカ教育使節団の残していった民主主義教育の線を一つ一つ破壊して、官僚統制にもっていこうとするのに対して、日教組がその遺産をまもろうと闘争しているかっこうである。文部省の方向転換は、独立後、戦犯を解除された旧内務官僚の大達茂雄が一九五三年五月、文相に就任するとともに始まった。彼は特高出身の旧部下緒方信一を腹心にして、前記の反動立法を工作させたのである。文部省内部でもいろいろと抵抗があったが、清瀬一郎が文相となるや自ら党の小使と称して、治安対策委員会の指令を一つ一つ流すことになった。池田内閣は憲法改正の急先鋒である荒木益夫を文相とし、改党に際しても留任させたが、日本人教育を主張し、ＩＬＯを罵倒、脱退を宣言するといった古い感覚と視野の狭さは国際的な評判をよんだ。緒方はいまや次官として文部行政の実権を握っているが、これと協力しているのが政務次官綛結弥三である。彼も緒方と同様、特高出身で、世田ケ谷の六所神社宮司をしていたが、紀元節復活運動の推進者であることはあまりにも有名である。このトリオの合作が、四月から実施された君ヶ代や日の丸の強制という天皇制謳歌教育である。アニミズム信仰を盛り込んだ歌を国歌として、主権在民の世に強制するほど時代錯誤的な、そして憲法を無視した行為はあるまい。われわれは全力をあげて拒否すべきであろう。

二、自民党の宗教政策

昨年の末、総選挙が行なわれたが、自民党は日本仏教青年会のアンケートに対して大要次のような宗教政策を発表した。

㈠、宗教界に対する要望

その強力な組織力をもって、社会改良と個人救済にはげんでもらいたい。とくに、㈠教化施設を利用して青少年の不良化防止に努めてほしい。㈡伝統文化の擁護に全力をあげて

ほしい。(ハ)国際親善に努力してほしい。

(ニ)、宗教法人法について

ぜひ改正しなければいけない。しかし、各教団の意見は十分尊重する。

(ホ)、宗教行政について

信教の自由はまもる、しかし、公共の福祉と背馳するものに対してはなんらかの規制が必要であると考える。

(ヘ)、伊勢神宮の特殊性について

神宮は一般宗教団体と同列に論ずるわけにはいかない。ヤタの鏡に関して、政府見解が結論的に公表された以上、問題は解決した。

以上から選挙用の美辞麗句を省くと、宗教団体の取り締まり、神宮国営化による天皇制復活といった戦前の構想があらわれてくる。自民党宗教政策を一言にしていえば、宗教法人法の改正であり、それは信教の自由への挑戦を意味している。

三、池田内閣の宗教政策

池田首相は病気が幸いして戦犯にもならず戦後、政界に登場した。このことは彼が戦前の意識をそのまま持ち続けていることを意味する。神、仏、天皇を崇敬し、何ごとも各宮家に報告、衆院議長、最高裁長官らを伴なって賢所の祭祀に列席していることをみてもわかる。彼は神宮皇学館を復活、神道教育を民主主義の中核とするため、五億円の募金に大童である。彼の精神的指導者は、敗戦の詔勅を起草した理論右翼の筆頭安岡正篤である。安岡は池田のブレーンに宏池会という名を選んで与えた。さて宏池会における彼の宗教政策の立案者は東大の岸本英夫であるらしい。岸本教授は宗教法人法審議会の委員でもあるが「信教の自由」と「政教の分離」を分けようという意見の所有者である。北欧や英国の例にならい、国教を認めても信教の自由はありうるという考えはきわめて危険である。

池田首相の就任後の言動をみるに、神宮の就任奉告参拝は、慣例と法規を研究したうえ、「個人」として行なっている。イセのほかに、明治神宮にも行ったがこれは新例である。ヤタの鏡については自民党の特別委員会とよく打ち合わせて解答している。浜地文平が質問書をだしたのが十月一八日、首相が政府見解をのべたのが二二日と三日しか余裕がなく、しかも議会開散まぎわのため、質問も行なわれずにすませた。自民党としてはこの選挙で社会党に圧勝し、憲法改正を一挙に決行しようとしたようだ。池田の低姿勢も、空前の選挙資金も、また、民社のテコ入れも、すべて計算して行なわれた。しかし、それは成功しなかった。憲法改正の第二の機会は失なわれてしまった。

ヤタの鏡が天皇家のものであるということは、西暦八世紀につくられた政治的神話に一説として記してあるだけで、これが神道の教義ならともかく、政府が歴史的事実として認めるとはゆゆしいことである。しかも天皇が自己の神話的起源を否定した一九四六年元旦の人間宣言と背馳するのだからなおさらである。

四、今後の問題点

ヤタの鏡を天皇家の所有と断じたのは、神宮の式年遷宮の費用を国庫でまかなうためである。今後、神道行事を国事と見なして公金を支出することが、公然と行なわれるおそれがある。義宮の結婚式、迪宮の葬式、継宮の相続式と目白押しに並んでいる。すでに典礼委員会が設置されて、研究中であるが、これら天皇家の私事のほかに、オリンピックの聖火リレーなどが利用されよう。宮内庁は国事のほかに、「公事」という概念を勝手に設けて、継宮夫妻の観光旅行に特別列車を仕立て、一般国民に多大の迷惑を及ぼした。

池田首相は近く宗教界と懇談会をもつようであるが、神道界は在郷軍人たちと不敬罪設置運動を起している。仏教界も同調してるようだが、それは、保育園などに国庫補助を出させ、基地問題で仏教に有利な裁定をしてもらいたい、という下心からの取引きとみられる。自民党の宗教政策は、憲法無視の方向に進んで信教の自由を大いに脅かしている。

（日本聖書神学校講師）

人生相談室

# 浪人生活と教会

（回答者）気仙三一

【問】わたしは今春県立の高校を卒業し、兄（わたしと双生児）とともに、それぞれの志望校に受験をしました。兄のほうは結局第二志望のある大学の工学部に合格したのですが、文科系を志望したわたしは第一、第二志望の両校とも失敗してしまいました。一番上の兄もやはり浪人生活をしてはいったので、その生活を知っているわたしにとって、自分もこれからあの浪人生活をするのかと思うとユーウツで、一時はすっかり気がめいってしまいました。父母も気を落とさず、この一年間予備校へ通って、目的に向かって努力するようにと言ってくれますので、このごろは気もいらいらせず、つらい一年ですが、やれるだけやろうとは思っています。このほか、わたしの今の問題は教会生活をどうするかということです。わたしはC・Sから教会に通い、青年会のメンバーであり、一昨年洗礼を受けています。わたしの教会の青年会は、他にやはり浪人することになった連中が五人ほどいますし、浪人二年目の人も二、三人いて、よく浪人生活と教会生活の関係について話しあっています。先日も牧師がディスカッションのときに、日曜の礼拝だけはキチンと守り、教会生活を続けるようにと言われ、それに対して受験中は一時教会生活を中断して勉強し、合格のあとまたキチンと教会に出席すべきだという意見が出てずいぶん議論をしました。わたしの父母（非クリスチャン）は、日曜日教会にわたしが行くのをこのごろはあまりよい顔をしないのです。浪人は教会生活をどのように考えたらよいのでしょうか。

【答】毎年この時節になると、新しい浪人の集団が生み出され、深刻な問題を方々に提起します。浪人である本人はもちろん、その家族もとにかくこの一年間ほんとうに心の底から晴れることのない日々を過すことになるわけで、ほんとうにおきのどくに思います。このように多数の〝浪人群〟が存在しなくてはならないということはほんとうに大きな国家的損失ですし、一日も早く普通の能力を持ち、向学の志ある者は、だれでも大学にはいれるような日が到来せねばなりません。

先日ドイツから自転車でアジア大陸を横断して日本にやってきた愉快な青年と会いましたが、彼は電気の技術者で、人工頭脳の機械を専攻しているのだそうです。「どこの大学を出たのか」というわたしの質問に、「いやぼくは専門学校を出たんだ、ドイツでは学者が大学へ行くんでぼくはこれで十分」と答えていました。ところが、日本ではなにがなんでも大学を出なくてはならないという固定観念が社会の各層に広くかつ深くしみ込んでいて、なかなか抜きがたいものがあり、受験生に向かって、そういう考えを止めよといくら世の識者が説いても、社会全体の通有観念が変わらない以上どうにもならないと思います。やはり社会の矛盾は矛盾として、現在置かれている浪人生活は戦い抜いていかねばなりません。

さて教会生活のことですが、これはどこの教会でも大きな問題になっており、青年会で

も一種の日陰者のようになりがちな〝浪人〟諸君に対して、どうすべきかということは、もっと真剣に考えられなければならない問題です。

不合格ときまると、いっぽうの極端な型では、自分はできて、実力も十分あるのだが、運が悪かったのだとか、その前日からかぜをひいたのでコンディションが悪かったのだというような、責任の転嫁をやったりするのを見受けます。いずれにしても、自分の失敗に際して、自分自身を正当に直視するのを避ける結果おこる現象で、浪人生活とはそういう自己内の葛藤に責めさいなまれる生活です。しかし、最もたいせつなことは、その中にあってもしっかりと自分自身を見つめ、深く自己の将来を考えることで、もしこれが果されるならば、つらい浪人生活も、あとになって、人生のよき勉強であったことがわかるでしょう。そのためには周囲の浅薄な同情や、励ましはかえってわざわいのことが多く、深い理解をもったあたたかい周囲のささえが必要です。そういう意味でも、教会生活は目に見えない大きな助けを果たすものです。ただし、教会生活を単に日曜礼拝に出席するというだけのものと考えることはどうでしょうか。教会生活と一口に言っても、礼拝や集会に出席すること以外にもっと広い範囲での教会との接触もあるのです。左に浪人生活を経験したのち、ある国立大学にはいり、今春文字通り優秀な成績で卒業して、一流銀行に就職のきまったO君のことばを掲げておきます。

『自分の名が出ていない合格発表の掲示を何度も見直して、寂しく帰られた君の胸中を思うと、かつて同様の経験を送った者として慰めのことばを知りません。わたしは君の来春の合格を信じますが、そのためにはやはり一流の予備校を選んで、四月から毎日休まず通われたほうがよいと思います。それから、教会生活のことなのですが、わたしが浪人したときのことを申しあげますと、だいたい平均月に一回礼拝に出たぐらいだったのです。教会があまり近くなかったのも一つの理由ですが、なによりも礼拝に出席するだけの心のゆとりがなかったのでした。ただわたし自身や、まわりの友人たちの例から言えることは、受洗している受験生は無理に礼拝に誘わないでも、合格すれば、またきちんと礼拝に出るようになるということです。受験というものは、とても厳しいものでとにかく合格せねばなりません。ですから日曜日でもやりたいときは勉強したほうがよいし、模擬試験に行くのもよいでしょう。でもときどき教会に行きたくなると思います。そんなときにはぜひ行ってください。

さて一ヵ月一度ぐらいの出席では、教会との関係が薄れるように思われるかもしれませんが、わたしの場合はそうではありませんでした。時おりの礼拝出席のときも、牧師先生は〝よく来たね〟と、あたたかく迎えてくれましたし、おりにふれて激励のはがきをくださったり、訪ねてくださったりしました。また、ひとりの長老さんはときどき食事に招いて激励し、ともに祈ってくれました。そうしたことが、どんなに励みになったかしれません。君も若き日に信仰を覚えることのできたことはとても幸福ですし、いま、その信仰を強くする機会を与えられていることは、大きな恵みではないでしょうか。お互いにいつも神の守りを信じて謙遜に、着実に勉学に励んでいきましょう。弱音を吐かずにがんばってください。」

なおO君は前述のように銀行員としての将来を期待されていると同時に、ある教会の忠実な会員であり、教会学校の教師としての奉仕をされている兄弟であることを付記しておきます。くじけず、将来の栄光に向かって進んで行ってください。

（青山学院大学講師・牧会心理学専攻）

すから略しますが、これでみますと、人は生物学上、サルと同じように発生、成長の経過をたどりますが、神の像（人格性）に似せてつくられた点、すなわち人格をもっている点が、まったく違うのであります。
　さらに、人は天地の植物、動物のつくられた最後につくられたもので、動物、植物を治むるものとしての地位を与えられています。
　そして神と語りあうものは、この人間だけでありますから、人間こそ神の傑作であります。
　このまえから三、四回にわたって記しました文章の中にもありましたように、人間の心の中に神と語りあう要求のあることは、人間の最も大きな価値であり、神に従って生きることがわかるところに、人間の尊厳があります。

## 4　明日をつくるもの

　さてあなたは自分をどう考えになりますか。
　自分が神の傑作だと思いますか、尊い値うちのあるものと思いますか。
　「ひいき目にみてさえ寒きそぶりかな」と一茶は歌いました。いくらひいきしても、自分を神の傑作とは思えないといわれるでしょう。もっともだと思います。そこでちょっと方向をかえて考えてみましょう。

自分のみている自分
他人の評価している自分
神の評価している自分

　どうでしょう。自分についていちばん知っているのは自分だからと、自分だけで判断するのはちょっとまってください。善きにつけ、あしきにつけちょっとまってください。他人の評価を考えに入れてください。
　アメリカのラジオ放送説教で有名な、ピンセント・ピール牧師のところへ、ひとりの婦人が来て「自分は絶望だ、なんにもする気になりません」と訴えてきた。「それではあなたは病気で長く苦しんでいますか」「いいえ、どこも悪くありません」「では仕事ができないのは、小学校ぐらいしか行かなかったからですか」「わたくしは女学校を出ています」「おそうですか、それは結構、ではお一人ですか」「いいえ、主人は会社の社長です」「ではご主人があなたを愛してくださらないのですか」「主人は実際親切です」
　こういうように話しあって、牧師は「あなたは体格も、健康もあり、学歴もあり、家庭はよろしい。それで絶望することは一つもない。ただ自分の心だけ、自分はだめだと思っている。それをなおしなさい。かならず神さまは守ってくださる」と言いますと、「ほんとにそうでございました」と元気になって、家に帰ったそうである。
　だめだと思いだしたら、なにもかもだめだ。だれも自分をかまってくれぬ、自分ひとりがこうなっても、世間はなんとも思わぬ、自分はつまらぬ存在だと、自分だけで判断をするのはすこしわがままではないでしょうか。
　盲目になった岩橋武夫博士は、青年時代に自分に絶望して自殺しようとしたとき、これを見た母上がおいかけていって、その上からお母さまがしますのかと、とめられて、生きていてくれるようにと、衰弱するのを知って、初めて自分の生きる意味を感じ、信仰にはげんだ結果、あんなりっぱな人となったのでした。
　よく考えてみてください。あなたの現在どうであろうとも、明日があります。あなたには、一あたらしき明日の希望と、う自分の作業に頼らなければだめだ、と、明日こそ希望をもち得ないニヒルの心持ちを表わしています。しかし人の親は、また愛する者は、その子、その愛人の将来をのぞみます。明日がなければ明後日を創造します。あなたのために、明後日を創造するものが表れます。そこに人間の姿があります。あなたの未来をつくる者、この努力のひとりが、あなたの友、親、愛人でありましょう。もしそれさえもなくなるとき、イエス・キリストがおられます。

## 5　自分の価値と生きる使命

あなたがたが人生に使命を感じていらっしゃる

とき、あなたは必ず新しい自分の価値を見出されることでしょう。

人間とは、「人と人との間」と書いてあります。孤立は人間ではありません。人と人、人格と人格との関係に生きるとき、初めて人間としての価値を発見されることでしょう。「父上よ今日はいかにと手をつきて問う子を見れば死なれざりけり」と歌った人もあります。わたしの深く感じている一つの話は、本間俊平先生の直話です。老後の先生が、事業を退いて自分の家でやすみなさるとき、夜中にお孫さんが夢を見て、「オジイチャマ！オジイチャマ！」という。自分を呼んでいると思って起き上がって、隣りのへやへ行ってみるとスヤスヤとねむっている。そして「オジイチャマ！　ムニャ、ムニャ……」といっている。

それを聞いて、「自分はもう一生のなすべき事業はやってしまった、もうこの世に用のない身だと思っていた。ところが、この小さな孫が、夢の中でも自分の名を呼んでいる。ああ、この孫のために、生きてやらねばならぬ！」と非常に感じたとのことでした。

ついこの間の受難週のとき、わたしは、新宿のある高等製菓学校の入学式に列席しました。

その席上できいた話ですが、ひとりの教師が、熱海の貫一お宮の松の近くにある八百半という店に行って、店内をあちらこちら視察して奥のほうに足を運ぶと、その小さな狭いへやにひとりの少年の店員がいた。踏台にのって四斗樽の中の大根をかきまぜている。小さなからだを樽の中に半分ほども入れ、右手を肩のところまで突込んでいた。彼は、昔の教師が来たのを知って「あっ先生！」といって手を樽から出したが、見ると、指はアカギレとヒビでいっぱい血がふき出している。年末のことだったので、寒いだろうね、と言うと、そのアカギレの手を高くあげて、

「先生！　わたしはこの手に誇りを感じているのです」

「お客さんが八百半の漬物は、オイシイと言ってくれるのは、この手でまぜるからです。わたしはこの手に誇りを感じています」

と言った。

この少年の姿が、そのアカギレの手が、わたしには目に見える思いがした。彼は自分の手の値うちを知っていた。それは、使命を感じている手であった。

わたしは、それについてふと思いだしたのは、吉川英治氏が、『新平家物語』を書いているとき、諸国よりはげましの手紙をもらった。

そしてこれを書いて終らねば、読者にすまないと思って、自分のからだをたいせつにするようになり、生きることの使命を深く覚えた、というような文章があったことです。

## 6　神に知られて生きる

わたしの親族の者で小学校入学のとき、ひとりで行ったのがあった。他の子供は父兄同伴であった。ひとりひとりの子どもの名が呼ばれて、父兄と教室にはいっていった。

やがて、その子の名まえが「ふぢはらがいすけ」と呼ばれた。答えがない。また呼ばれた。そのとき「あらー　おらの名まえを呼んでらあ！　おらここにいるぞ！」とその子が叫んだ。知らぬ人々の中で、自分の名を呼ばれたときの満六才の子の驚異の叫びであった。

だれもが、自分を問題にしてくれぬと思っているとき、読みあげられた自分の名、その少年は、このときほど、自分を認識したことはなかったでしょう。

人は神に声をかけられている。神が人を、神の子として話しかけんとしていることを、初めて知ったなら、この少年のように歓喜して神の前に自分の存在をハッキリと知るであろう。「われをわれとしろしめすかやすべらぎの玉のみこえのかかるそのとき」との古人の歌を思う。ここに人間の神に知られた無上の価値があるでしょう。

（次回は「神はあるか」）

〈キリスト教のいろは〉〈第五回〉

# 人間の値うち

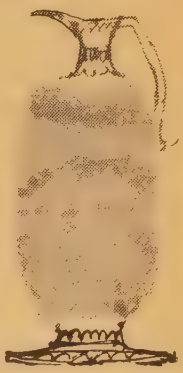
島村亀鶴

## 1 自殺国日本

昭和三四年九月の調査によりますと、日本人の平均寿命は、男子六五才、女子七〇才になって、人生五十といったのは昔話になりました。わたしの生まれた一九〇〇年（明治三五年）ごろには、日本人の平均年齢は、男子四四才、女子四五才であり、ずっと飛び越えて西洋の中世紀ごろは、人間の寿命は三三才か三四才ぐらいでした。それからさらに飛んで紀元元年ごろになりますと（ローマ時代）、わずかに二二才ぐらいしか、平均生きていないことになっています。

このように統計をしらべてみますと、人間の寿命は、科学の発達と衛生、医学などの進歩によって、次第に長生きするようになってきました。

しかしこんなに平均年齢が増加してきた半面に、日本では自殺する人が多くなってきました。恥ずかしい話ですが、現在、世界中でわが国は世界第一の自殺率の多い国であります。そしてもっとくわしくいいますと、男子は世界で自殺率第四番、女子の自殺率は世界第一であります。日本の婦人の方がいかに悩んでいるかがわかります。



これを年齢別にしてみますと、二〇才から二四才までの自殺率が群を抜いています。（世界健康組織W・H・Oの年報）青年の自殺が多いわけですが、日本国内の青年層の死亡原因のうちで、男女ともに一五才―一九才までの死因の第一は自殺であります。ついでながら日本的特徴としては、集団自殺すなわち親子心中などが多いことであります。

これは生きる希望を失った青年男女や、絶望線上にある家族が、日本に増えてきた証拠であると思います。それと同時に人間の値うちに対する考え方が、次第にうすらいできた結果ではないかと思われますが、いかがでしょう。

## 2 人間がなくなる

どうして人間の値うちが、うすらいできたのでしょうか。人間をそまつに、安っぽく取り扱うような傾向が表われてきたのでしょうか。

ひとりの女子大学生に問うてみました。

「人をバカにするようなものがハンランしていますよ。娯楽にしても無意味な娯楽が多くて、朝から晩まであんなことしていたら、バカになるにきまっていますよ」

と答えました。わたしは「娯楽もレクリエーションになるのじゃないか」と言ったのですが、「意味のないことをつづけていては、人は死んでしまいます」と彼女は強く言いました。

わたしは四月三日の新聞を見ました。そこにアドルフ・アイヒマンの写真と、彼を人類の敵として裁判する記事とが、のっていました。彼はポーランドのアウシュビッツで、毎日二千五百人のユダヤ人を裸にして、毒ガス室へ入れて、三分から一五分ぐらいで焚殺してしまった人です。このためユダヤ人は二百万人も殺されています。ドイツの大量殺人は、記録映画「わが闘争」や「十三階段への道」に悲惨、目もあてられぬさまに表わされています。二回の世界戦争によって、人間のはか

なさを知らされてからは人間に対する尊敬の思いが薄くなったのは事実と思います。

映画で思いだしたのですが、チャップリンの「モダン・タイムス」をみたとき、工場で一日中機械のネジをしめる作業をする労働者、それをチャップリンが演ずるのです。彼は夕方、家に帰るために工場の門を出ます。仕事のタセイで両手でネジをしめるかっこうをしながら、道を行く妙齢の婦人に突きあたるので、お巡りさんが来て狂人とまちがえて留置所へつれて行かれる光景があります。

わたしはこれを見たときに、人間が機械のまねをしている、機械の一部分になってしまっていると思った。休むことを知らぬ機械といっしょに働いていたら、人間は機械になる。機械に人格はいらぬ、ジャマになる。人格をなくした人間を資本主義はつくっている。これこそほんとうの殺人だ。人間を機械の中から救い出さねば、機械に人間は食われていなくなってしまう。なくなれば次の人間を、その部分品としてあてはめる。機械の部分品としての人間、これは取りかえがきく、人格をもたないかぎり。現代のマスプロダクションと、インスタント時代には、人格をもった人間はジャマになる、機械の部分品としての人間が求められ、能率がはばをきかしてゆく。

これでは人間の価値はますます下落するいっぽうです。

「意味のない世界と人生」
「大量虐殺される人間」
「機械にされてしまった人格」
こうなっては人間もおしまいです。

### 3 人間の尊厳は

人間の置かれている社会から見た場合に、値うちが軽くなってきた、それはひとまずそれとしておいて、次に人間の値うちを一つ一つ、ひろい上げてみましょう。

先夜、婦人牧師の上田公子先生にお伺いしてみたのですが、先生は千葉や府中などの刑務所の囚人に同情して、その人たちに伝道をされている方です。

「犬や猫がいくらかしこくても、チンチン、ワンワンぐらいのことです。善悪を問わず人間のすることは、偉大なことです。動物がいくらシャチホコダチをしても、人間のすることにはかないません。人間はいかにスバラシイものか、人間の考えること、行なったことを全部文章に書いたら、この大会堂いっぱいになります」と言われました。

わたしは「善悪を問わず偉大である」とのことばに打たれました。先生は、それがゆえに善において偉大であるべきで、悪を行なってもヒットラーのように全ドイツを統一することができた。だから自覚して、この偉大さを善用せねばなりません、とことばを続けられました。

動物と比較した場合の人間は、器物の製造、火気の使用、言語や文字や文化があること、都会をつくること、死の自意識のあること、数えあげればいくらでもあります。しかし動物は祈りをいたしません。神に向かって祈る、神との交通するものは人間以外にありません。

次に人間の中には、道徳があります。良心があります。良心をごまかすことはできない。ある場合は、正しいことのためには、いのちをすててかかるものですから、ここに人間の尊いものが発揮されるわけです。

ギリシャの人は、人間をアンスローポンとよびました。上をむくもの、という意味があるそうです。人間が動物とちがって立って歩くことができる、したがって顔をあげているからかもしれませんが、上を仰ぐもの、すなわち神に向かっている者と考えると、意味が深くなります。

聖書をみますと、天地創造のときに、神が人間をつくったことを書いてあります。

その要点は、(一)人間は神によってつくられたものである。(二)神は自分の像（かたち）のように人をつくった。(三)土をもって人をつくり、これに生命を吹き入れた。(四)人間は男と女とにつくられた。というのであります。

この一つ一つを説明すると、ながくなりま

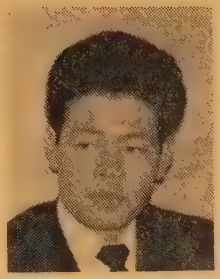
ほんとに教えられました。

### 結果は神の手に

**橋本**　不平はありますけどね、ほっとけないんです。

**石島**　いつまでこんなことをくりかえすんだろうって気持ちと、やはり、やらずにほっておけない、という気持ちと……。

**橋本**　ぼくに救われるんじゃなくて、兄は神に救われるほうがいいんだけど、しかし、まだそれはわからないから、自分は自分で、奉仕のわざをつづけていれば、神さまは神さまで、カタをつけてくださるだろうと思うんです。兄にしてやることは、神さまにおかえしすることだと思って……。



**石島**　イエスに愛されているんだから、自分も人を愛してゆこうという……。

**橋本**　ええ。自分なりにできるだけやってれば、いいか悪いかは神さまがしてくださる。

**石島**　そりゃそうだなァ。その結果がどうなるかは、自分の手のなかにはない。

**橋本**　こうしたらこうなる、人がどう受けとる、それはわからないから、相手が信仰あるなしにかかわらず、神さまが引きうけてくださるという気持ちで……。

### ともに喜ぶ

**石島**　悲しみのほうは、とっさに、こっちの泣きどころをつっついてきて、つい涙をさそわれるようにもなるが、「喜び」のほうには、複雑なものが働くんじゃない？

**坂本**　悲しみのほうは、直接うったえてきますが、喜ぶほうは、たとえば、同僚がうまくいったときなど、なにかほかの感情がはいってきますね。

**橋本**　喜ぶものとともに喜ぶって、たいへんなことだと思います。あとで考えて、よかったな、と思うにしても、そのときは、あいつうまくやったな、なんて……（笑）

**星田**　ひとの喜びを喜ぶとき、いちばん単純なのは、「うらやましいなァ」って気持ちですね。

**石島**　「うらやましい」、はいいなァ。そういう自然な単純な同感は、うつくしい。

**橋本**　教会の青年会の年上の人で、恋愛とか結婚とかについての話をいやがるんですね、女性にたいして自信を失なっていて……。ところが、この正月に、その人がニコニコしてやってきた。カマかけてきいてみたら、恋人ができたんですね。ぼくは自分のことのように、うれしかった。

**坂本**　それは、自分に関係がないからで、その相手が自分の恋人だったら……（笑）

**橋本**　そういうこともありました。（笑）好きな人いたんですが、ほかの人と結婚しました。でも、相手の人は、ぼく尊敬してるし、自分よりふさわしいと思いましたから、かえって、あかるい気持ちでお祝いしました。

### 交わり

**橋本**　話しあうことがいちばんいいですね。言いたいこと言っちゃって、わかりあう。

**坂本**　そのときはカッとなっても、あとで考えれば、それでよかったと思いますね。

**星田**　わたし、言いにくいんですけど、ひとりの男性を、わたしとお友だちとふたりが、愛するようになって、そのお友だちからその人にたいする気持ちを打ちあけられました。わたし、苦しくなっちゃって、憎しみがでてきて……。でも、わたしも、自分の同じ気持ちを言っちゃいました。そしたら、それから、その人が、なんだかわたしに下手にでるようになってきて、その男の人に、わたしの気持ちを伝えちゃったんで

す。そして、その人は長老さんにまで話して、話をすすめちゃって、わたしたち近く婚約することになったんですが、その間にいろいろ、わたしには、ワリきれないことがあって、そのお友だちとすなおにつきあえなくなってきました。

**石島**　交わりって、一度かげがさすと、なかなかとれませんね。

**星田**　会ってるときはいいんですけど、離れると、ウラを考えちゃって……。

**石島**　ウラを考えなきゃならないような気持ちは、つらいな。

**橋本**　教会で紹介された人で、近くに住んでる友だちがいます。とても気があう。そいつは、オフセット印刷につとめていて、教会に出にくいので、苦しんでいて、職場をかえたいって言ってるんです。いま、ふたりで事業をやろうと、プランをたてています。ぼくにとって、「ともに喜ぶ」ことの最高の例だと思っています。

### ほんとの喜び

**橋本**　ぼくは、いま、弟とふたりで仕事をやってるんですが、弟は教会へ行ってません。神を知るという、このほんとの喜びを、知ってくれたらな、と思いますね。

**星田**　うちはクリスチャン・ホームで、わたしの姉は、女学校がミッションでしたが、そのころ、教会を離れました。不幸になって、いま、北海道で、父のところにいるんですが、父は、姉に信仰によるほんとの喜びが与えられるようにと、ただそればかりねがっているんですね。姉にすれば、かえって、それが迷惑なんです。もっと、人間的な情愛にふれたいんですね。求められている愛を与えないで、重荷になるような愛をそそぐことになっていて…そのことで、ときどき父と口論しちゃうんですが……。

**坂本**　直接的にいくのがいい場合もあるでしょうけどね。

**石島**　そこに、ほんとのものがあるにせよ、ただ神さま神さまじゃ、反抗したくなる。

**星田**　わたし、反抗期のころ、なんとなくズルズルっと洗礼うけちゃいましたが、あとで、いろいろ疑問がでてきて、しばらく教会へ行きませんでした。一年すぎて、お友だちを連れてかなきゃならないハメになって、教会へ行ったら、父は、泣いて喜んでくれました。そしたら、とたんに、また行きたくなくなった。（笑）ただそれだけを父は喜んでるのかと思っちゃって……。

### クリスチャン

**坂本**　いきなり、神さま、じゃ、多くの人は抵抗感じますね。

**橋本**　ぼくら、きびしい職人生活してますから、牧師先生の話は、それはそうだが、そうばかりは言えないって、ズレを感じちゃいますね。

**石島**　未信者は信者に抵抗し、信者は牧師に抵抗し、牧師は……（笑）

**橋本**　聖書のことばだって、ただナマでぶっつけられるんじゃ、こまっちゃう。

**星田**　教会にいるときは、ことばどおりいくんですけど、私生活では、ねたみがムラムラとおこってくる。だから、クリスチャンの顔と罪びとの顔と、二つあるみたい。

**石島**　教会では、ひとつには、ほんとにすなおになるんだろうけど、他面、その空気にならされて無感覚になるんじゃないかな。それに、教会には、なにか、自然でない、ヨロイ着たみたいなとこがあってね。

**坂本**　作為なくやりたいけど、できない。けっきょくは、祈るよりほかないですね。

**橋本**　聖書のことばを、そのとおり守らなきゃいけないってのは、うなずけませんね。人には、それぞれ個性があるんで、ぼくはぼくらしいクリスチャンであればいいんだと思うんです。

（次回は「権威に従え」）

《聖句をめぐる座談会(5)》

# ともに喜び、ともに泣く

（司会）石島三郎

【出席者】

坂本武志（36）判事
橋本晃（25）はきもの業
星田光子（21）学生

【聖句】

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。」
（ローマ人への手紙一二章一五節）

## 経験していないと

**星田**　お友だちが悲しんでいるとき、自分にもおなじような経験があると、泣けてくるんですね。そうでないときは、どうしてあんなに悲しんだり泣いたりするんだろうかと、へんな気持ち……。

**坂本**　うちの教会の保育園の子が、ガケくずれの下になって、死んだんです。暮の二七日のことです。わたしの妻が保育園の理事をやってる関係で、わたしは、そのお葬式に、弔辞をいうことになりました。が、星田さんじゃないけど、ほんとに自分が体験したことなら、よくわかるんですけど、子供を失なった経験がないもんで、どうやって、ともに悲しんだらいいのか、わからないような気持ちを味わいました。

## フリをする

**星田**　二、三年まえ、お友だちが、自殺をはかって、やがて死んだんですが、その臨終のとき、まわりに集まっている人がみんな泣いちゃったんです。だけど、わたしは、どうしても泣けない。うれしいなんて気持ちは、もちろんありませんけど、どう悲しんでいいかわからないような、しら茶けた気持ちでした。

**石島**　みんなが悲しんでいるとき、自分だけ平気みたいに見られると、こまるもんで、なにか、さも悲しいようなようすをする。そんなこと、あるんじゃないかな。

**坂本**　作為的になるんですね。

**石島**　神学校時代に、ある先生から言われた——牧師は、健康でなきゃいかん。本気で、心から、人びとと悲しみも喜びもともにするのは、たいへんな身心の消耗だから——って。ぼくは、とても、そういうはげしい精神の振幅には耐えられないな。

**坂本**　でも、牧師さんが、ほんとにそうしてくれないと、ついていけませんね。（笑）

## 泣く

**星田**　わたし、子供のころから、映画みたり、小説よんだりすると、よく涙がでるんです。しかし、ほんとに強くせまってくるものや、現実的なことでは、かえって涙が出てこないんですね。

**石島**　母もの映画なんか見ると、なァんだと思いながら、涙がでてくる。

**星田**　くだらない、くだらない、と思いながら……。（笑）

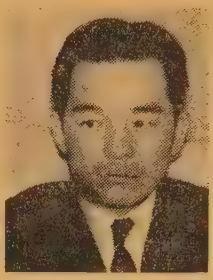
**橋本**　父が三年前になくなったとき、みんなすごく泣くけど、ぼくは、みんながふしぎがるくらい、ぜんぜん泣かなかった。父はながいこと病気だったもんで、苦しみつづけるよりは召されたほうがいい、という気持ちもあったし……死後の世界を信じていましたから……。

**石島**　問題は、涙がでるとか出ないとかじゃないね。

**坂本**　ほんとにともに悲しむ、ということ。

## 自己愛

**坂本**　いつか落語きいてましたら、山の手線的愛ってことを言ってました。他人を愛してるように見えながらけっきょくぐるっとまわって、自分に帰ってくる。自己愛ですね。



キリスト教では、アガペーということが、よく言われるけど、ほんとにはなかなかできない。

**石島**　ぼくたちには、純粋なアガペーなんかない。かならず自分を愛し、自分を求めるものがくっついている。

**坂本**　しかし、それを追いもとめなきゃならないんじゃないでしょうか。できるかできないかは、ともかくとして……。

**石島**　いちばん無私の愛にちかいものがあるとすれば、それはオフクロの愛かな。多分に本能的なもんだが、「自分のオナカをいためた」というのは、特別のものらしいな。坂本さん、奥さん見てて、どう？

**坂本**　まだ、わかりませんな。（笑）なにか主観とも客観ともつかない、モヤモヤしたものが、あるような気がしますけど……。

**石島**　父親の立場から見れば、ずいぶん問題になることもあるけどね。

**星田**　わたしの母は、とにかくわたしの意見をいれてくれます。そういう愛しかたは、わたしにはできそうもない。

## 家族関係で

**橋本**　ぼくは、五番目の子で、三男ですが、父が死んで、財産相続の問題のとき、母はぼくの名義にしてくれました。クリスチャンだというんで、信用してくれて……。

**石島**　兄さんたちは、「ともに喜んで」くれた？（笑）

**橋本**　まァ認めました。兄たちも、ぼくを中心にして、やってくれています。教会へ行ってるってことで、信用してくれてるんです。

**石島**　じゃ、自分たちも、きみといっしょに教会へ行きゃいいのに。（笑）

**橋本**　聖書をおくって、すこしずつやっています。からだで伝道していこうと思って。

**坂本**　ちかしい間がらでは、愛するということもあるが、逆にウラミにかわりやすい。財産相続して、それがよくいけばいいが、うまくいかないと、憎まれる。愛憎がカラミついてきて、いいあいだはいいけど、悪くなってくると……。

**橋本**　ぼくは、兄に仕送りしてるんですが、ときどき、不平がでますね、自分のたのしみも捨てて、送っているのにと……。しかし、いつも、教会へ行ってるんだ、オレがやらなければ、と思うんです。なんのムクイがあるわけではありませんが、自分がここで主の苦しみにあずかるんだと思ってよろこんで背負います。兄のほうが、どうあろうとも、と考えて……。

**坂本**　わたしたちの愛は、相手の態度しだいで、かわりますね。橋本さんのように、兄さんたちがどうあろうと、かわらずつづけているのは、自己愛をこえてるんですね。

弁だ。夫人時代さんは、生まれたのがクリスチャン・ホームだったし、老人は一四才のとき洗礼を受けているから、おふたりとも信仰生活は長い。なにごとも、長いということは並たいていでない。点訳奉仕がまさしくそれだ。

——点訳者は、一時の申し込みはどっときますが……しかし、へたに点訳者増加運動はしないほうがいいです。一時の感傷なんかでできるものではないんですから。だから、若い女の人に長続きしてるのはいないですよ。けっきょくこういう方です。

そう今駒氏は竹山さん夫婦を指す。

——そういうわけだそうですから、おふたり、なかなかたいしたものじゃございませんか。

と記者が言うと、うららかな春の陽ざしがいっぱいの縁側に、ひなたぼっこの老人の影が大きくゆれて、

「いやあ、もともと盲人さんに対して、なにかという念願があってのことではなくて、自分のすることは終ったというときに話があったからとびついたまでで……」

と、あっさりケンソン。

「ただいまでは、むしろ気がまぎれるんでございますよ」

と、これまたにこやかな時代さんだ。

こんなちっちゃなこと、書かれちゃ困るんですよと、ほとんど語ってくださらないおふたり、仮名としたのも、そんなおふたりのたっての希望があってのことだ。まことに口数が少ない。

——やっぱり、ご自分でお読みになって、これはぜひ盲人さんにも読ませてあげたいという気持ちが点字を打たせるのでしょうね。

と時代さんにおうかがいしたら

——ご想像におまかせします、ホッホッホ……と笑って、すべてが全体こんな調子だ。

お写真を……と言ったら、とんでもないと逃げられた。カメラ氏、ひなたの庭に立ったまま、いたって手持ちぶさたのてい。

「右の手でしたことを左の手に知らすな」と言ったのはイエス・キリストだった。光をかかげた人々は、みなそうだった。見せるためでないとき、真実な生きる姿がある——静かな隠居ぐらしを送るはずの竹山さん夫婦に、青年のように脈うつものは、そうした真実さと、イエスを思う信仰の純一さであることを、相対したしばらくの時間記者はひしひしと感じたのだ。

スーッと
さわやかな
スーパーライオン

フレンチハッカのきいた
ステキな味と香り
歯を強くするふっ素入り
30円・50円・100円・150円

# 本を読みましょう

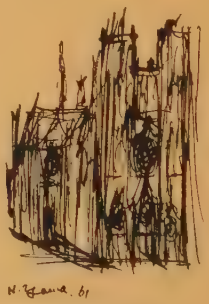
## —幸福と愛への招待—

◇W・B・ウルフ著
周郷博訳
『どうしたら幸福になれるか』（上・下）（岩波新書・各一〇〇円）

◇シュザンヌ著
井上良雄訳
『その故は神知り給う』（新教出版社　一〇〇円）

◇笹尾鉄三郎著
『天をおもう生涯』（日本宣教選書Ⓑ・教文館　一三〇円）

◇内村鑑三著
『内村鑑三聖書注解全集・第十一巻・使徒行伝・ロマ書』（教文館　三五〇円）



『どうしたら幸福になれるか』（上・下）はオーストリアのウィーン生まれの精神医学者ベラン・ウルフの著書。ウルフはニューヨークの組合教会精神衛生相談所の所長をつとめた人で、教養と趣味の非常に豊かな人であったといわれている。この本はイギリスのペンギン叢書の一冊として一九五七年に出版され、ドイツ語・フランス語・オランダ語・デンマーク語・ギリシャ語などに訳され、各国でベスト・セラーとなった。

著者はこの本で、「劣等感」とか「ノイローゼ」とかいう問題を適確に説明して、いわゆる心理学流行の時代に、われわれの聞きかじりの浅薄な心理学的迷信を指摘してくれる。若い人にも、主婦にも、老人にもぜひ推薦したい本である。

『その故は神知り給う』はシュザンヌ・ド・ヴィスムというフランス生まれの牧師夫人が、ロンドンのスイス教会で、若い少女たちのためにつくった日曜学校への奉仕と、彼女が最後の「召し」と感じた手術と病気。これらの深い経験の中で書かれた手紙は、読む者に人生の深さと、信仰の豊かさをしみじみと感じさせるだろう。訳者井上良雄氏自身がこの本によって受洗に一歩進んだと「あとがき」に告白している。

『天をおもう生涯』は、日本における「きよめ運動」のクサビであった笹尾鉄三郎氏の説教集である。同氏については、内村鑑三氏が「大聖徒」「偉人」といったという逸話がのこっている。後半に記されている評伝によって、キリストに生涯を献げ四六才で永眠した同氏を知ることができる。

「内村鑑三聖書注解全集、第十一巻・使徒行伝・ロマ書」は、全十七巻の全集のうちの一巻で、著者の使徒行伝とロマ書に関する注解を集めたものである。著者のロマ書に関する注解は、「ロマ書の研究」という大著がある。これは本全集では十六、十七巻に収録されているので、十一巻には、「ロマ書の研究」以外のロマ書に関する二三編と、使徒行伝一四編が収録されている。

日本のクリスチャンとして、聖書を勉強する場合、内村氏の聖書注解をもっと活用すべきである。おそれわれは、外国人の書いたものをありがたがる傾向があるが、むしろ、世界のクリスチャンに、日本語を学ばせ、内村氏の著書をすすめるべきである。

内村氏の聖書注解は独特の味わいがある。それは、彼が自分の体験にもとづいて注解しているからである。著者は使徒行伝とロマ書をとおして、パウロを語りながら実は自分について語り、自分に対する非難、攻撃に答えている。

内村生誕百年記念の年にあたり、本書と取組んで聖書を学ぶことをすすめたい。

（関西学院高等部宗教主事）
小林宏

能率が上がるだろうにという意味だ。

「それでも、わたしの点訳書を読んだ盲人さんから、感謝の手紙がまいりましてね、ムリしないでやってくださいなんて……だからムリにページをふやさずに、できるだけというのがわたしの方針です」

こんなささやかな奉仕でも、老人をなによりよろこばせたのは、数多い盲人から寄せられる感謝状だった。おたずねして肩をもんでさし上げたいとか、あなたをわたしのおとうさんと呼ばせてくださいとか……盲人は、ただ点訳書を読むだけでなく、それを一字一字刻んで作ってくれた人のことをけっして忘れないものだ。あなたのおかげであの本を読むことができましたといった感謝は、かならず指先でたどった一冊一冊にともなうのだ。おそらく、病軀を鞭打って老人に点字を書かせるのも、こうしたひとりひとりのよろこびが背後にあるからだろう。それを老人は、こんなふうに言うのだ。

「自分のやった本が読まれたっていうことですね、ただ図書館にはいってるだけでなくみなさんに読まれるってことがうれしいですねえ」

## 一般書から信仰書へ

二間の居間で、ポツポツと点字を打つ老人に動かされて、夫人時代さんがともに点訳奉仕にたずさわるようになったのは、それからまもないことだった。老令の悲しさ、点字を書くことはおろか、読むことさえむずかしいと思ったというが、かなりの期間をかけて、大学ノート三冊にびっしり書いて練習したそうだ。

こうして、点訳夫婦は誕生したわけだが、やはり、ベテランの老人にはかなわないらしい。

「なにせわたしは家事のかたわらですもんで、なかなかそれにかかりきれなくて……」

と時代さん。

いま、時代さんは、オーラル・ロバーツというアメリカの伝道者の半生記を点訳している。活字本ではB6判一六九ページのものだが、家事のかたわらぽつぽつと続けて三ヵ月ぐらいかかるという。

「でも、一冊しあげたときのよろこびはなんとも言えませんよ」

そういう時代さんも、やはり一〇年前、右手首に腫瘍ができて、神経を一部切断したため、点字を打つ右手首から指は不自由なのだそうだ。なるほど、並べられた両手を見ると、たいていの用をそれですます左手は、大きく節くれだっているが、右手は小さくやさしい。

「冬なんか、氷みたいに冷たくなってしまいまして、点訳のとき困るんですよ」

時代さんが最初に訳した本は『子供に聞かせる五〇の有名な話』というもの。それから『心に光を持て』とか、古谷綱武の『美しい心人間らしい生きかた』といったふうに、もっぱら子供向きの本だ。これまでの点訳数は、一六種類、二〇冊。最近は、これにムーデーの『キリスト教の真髄』などの信仰書がはいりはじめている。

老人、すなわち文夫さんのほうは、家事のかたわら一という制約がないせいか、これまでの点訳書二〇八冊というぼう大さ。ページにして三万八千二六八ページを、一字一字打ったのだから驚く。それに、こちらは内容が豊富だ。武者小路の『愛と死』が最初の訳書、以下同じく『真理先生』、川端康成『山の音』、『千羽鶴』という順、また、石川達三『風にそよぐ葦』とか、菊田一夫のラジオドラマ集といったものから、蒲生礼一『イスラーム』や岩村忍『アフガニスタン紀行』のような歴史もの、あるいは末川博『法と自由』大内兵衛『社会主義はどういう現実か』というカタイもの、そうかと思えば、杉靖三郎『四〇からの健康』に三遊亭円朝の『牡丹燈籠』といったものまで、それはそれはにぎやか。これに、最近はやはりキリスト教の本が加わりはじめた。それもやさしい手引書が。

（点訳奉仕をするYさん）

## 陰に生きる真実

日本点字図書館常務理事本間一夫氏（四五才）は、この点訳夫婦を、こんなふうに語る。

――竹山さんのご主人がこの仕事をはじめたのが昭和二七年ですから、ちょうど一〇年になるわけです。まあ、一〇年以上というのはそうあるものでないですし、竹山さんほどたくさんの量はいないですね。いま奉仕してくださる篤志家で、練習中の千人、奉仕に当たっている方が五百人おりますが、夫婦でやってるというのはほかにいません。兄弟はおりますが……。

昭和一五年、盲人文化啓発のためにと、私財を投じてこの事業をはじめた本間氏は、過去二〇年間ささえられてきたその背後の力に、こうした隠れた篤志家の善意がたえることなくそそがれていたことを語る。

――すると、竹山さんのようなお方がひとりでもふえるということが望ましいわけですね。

――そうです。それがなによりです。

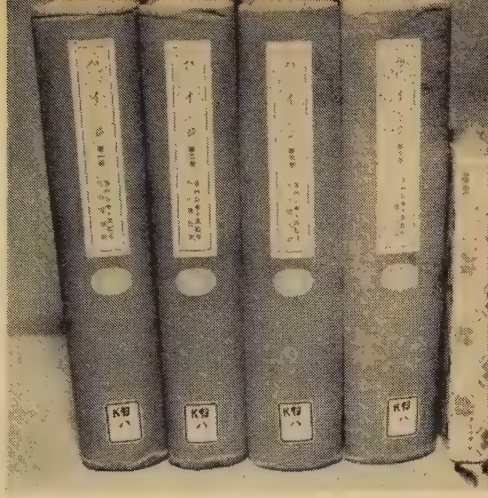
この図書館では、中途失明者などで点字の習得の困難な人たちのために、朗読奉仕者によるテープ録音を多数とって、本と同じに全国に貸し出しているが、しかし、点字図書の需要は種類・冊数とも、いよいよ増すばかりだという。たしかに、竹山さん夫婦のような方は、本間氏が言うように「めったにえられない優秀な人たち」かもしれないが、ひとりでも多くの〝光の製造人〟が増えることが望ましいわけである。

点訳奉仕に当たる人たちは、主義・思想・信仰をこえて広汎に存在するが、なかでも、キリスト者の〝光の製造人〟はもっとたくさんいてもよいと、日本盲人キリスト教伝道協議会主事・川崎教会牧師の今駒泰成氏（三六才）は言う。たとえば、バルトの『キリスト教倫理』解説シリーズや、『カルヴァン説教集』など、神学書ばかりを昭和一八年から訳し続けている、東京山手教会の山田久子さん（五七才）は、あまりに貴重な存在であるし、また神奈川教会の寺尾郷彬氏、鳥居坂教会の小柳芳枝さんなどは、キリスト者の点訳奉仕者として、感謝の的となっているという。

――願うことはですね、奉仕者が増えることとともに、いま、全国二〇万の盲人で、点字書を読むのはそのうちのせいぜい七、八万人という現実ですね。晴眼者のみならず、盲人自体に読書運動を広げることです。

と今駒氏はつけ加える。

ともあれ、点訳奉仕は地味なものだ。奉仕者は隠れたままでこつこつといそしむ。それでいいし、そうあるべきだとは、竹山老人の



（右の岩波少年文庫2冊が左の本4冊になる）

ければならない。長い時間をかけて作られたこの本は、したがって、たいへん貴重なものとなる。そして、でき上がったそれは、限定版も限定版、ただ一冊きりだから、ほかに読みたい人がいれば、昔のようにまわし読みするよりほかはない。

こういうわけで、貴重な点字本の一冊一冊をたいせつに保存し、盲人の希望があれば、全国どこへでも貸し出して、まわし読みの便をはかっているのが、盲人界唯一の機関日本点字図書館（東京都新宿区諏訪町二一二）だ。蔵書数約三万七千冊、これらは、年間四百万円から五百万円というわずかジェット機一機の部分品代でいどの国家保護のうちから作られたものだが、このうち約一万三千冊は、まったく民間の無名の、あの人この人によって作られたものと言えば、善意とはいえ、無料奉仕の力の大きさに驚くだろう。

隠れたこの人たちこそ、寸暇をさいて、盲人のために一字一字を点字に直して刻みこむ、いわゆる点訳奉仕をして一冊の本を作り上げ、点字図書館に寄贈している、言ってみれば〝光の製造人〟である。学生あり、主婦あり、サラリーマンあり、いずれも隠れたままでこつこつと続けるこの〝製造人たち〟によって作られた〝光〟は、この図書館を通じて全国の盲人の心を明るく照らし出す。

宮城県に住む一盲人松川音次郎さんは、点字の便りにこう書いている——

「ワタシノウチハヤマノナカノイッケンヤデス。ウチノマワリガタンボヤハタケデ、ワタシモハタケノクサトリシテイルトキ、トショカンカラノホンガキテ、ウチノモノガハタケマデモッテキテクレマス。ワタシハオオイソギデヨアラッテヨマセテイタダキマス。ナキソウニナルクライウレシイノデス」

## 隠居ぐらしをささげて

「こんなによろこんでいただきますと、それがまた。わたしたちのひじょうな慰めとはげましとシゲキになるんですねえ……」

世田谷区弦巻町の静かなお宅に、竹山文夫さん（仮名——七九才）をおたずねすると、この人はそう言っておだやかに笑った。

竹山老人は夫人の時代さん（仮名——七七才）とともに、あの〝光の製造人〟なのだ。

竹山老人が点字を習いはじめたのは終戦後数年たってからのこと。それまでのこの人は、故郷の山口中学を出て京大法科を卒業後、裁判官を志願したが、ふとしたきっかけから大浪速銀行にはいり、まもなく、とくに推されて朝鮮に渡り、朝鮮銀行大連支店長となったという盛んな履歴。満州事変のときには、満州中央銀行の創設に参画、自身は理事をつとめた。そして、昭和一一年には、これらいっさいをやめて内地に引き揚げ、静岡に住んで文字通り晴耕雨読の生活にはいった。

それはさておき、昭和二二、三年ごろのことだ。

「おとうさん、首がおかしい」

そう息子さんに言われて気がついてみるとまだそのころは人の目にもわからないし、自分でも何も感じていなかったが、たしかに首のあたりが変だ。シロウトにはわからないが、とにかく、首の筋肉に起こる神経的な病気なのだそうだ。老人が、まもなく東京にいたお嬢さんの嫁ぎ先へ引きあげたときは、す

（暗がりで本を読む子供たち）

でに外出ができないくらいになっていた。首が不用意に曲がってしまうので、つねに左手を顔に当てていなければならない。睡眠中だけ、この姿勢から解放されるというぐあいで、これは老人にとって相当つらいことだったらしい。

「わしの体はもう役にたたん自分のすることは終りだと思ったですねえ。そんなところから、これから先どうするかを考えるようになりました。それまでは、能だ観劇だと、のん気にやってましたけども……」

いまも、左手で顔をささえながら老人は言う。それも、その後入院手術した結果、さらに悪くなって、それがいまでも点訳の仕事にさしつかえているらしい。

さて、点訳の話があったのはそのころだった。ある日、隣りに住んでいる長男のところに行くと、こんな相談をもちかけられた。点字図書館の人にたのまれたのだが、だれか、点訳奉仕者を知らないかというのである。

「点訳奉仕？　知らんねえ、第一そんなもの見たことないし……。しかし、それはわしにはできんもんかねえ」

「いや、できないこともありますまい」

そんなわけで、老人は図書館へ行ってさっそく案内をうけた。とにかく体が悪い。点訳を習い覚えるのはたいへんだったが、老人は書く練習にはげんだ。点字を打ち終ると、図書館で添削を受けて腕をためした。こうして老人の点訳になる貴重な本が、一冊二冊と点字図書館の書庫に入れられるようになったのは、昭和二七年からだった。

「さいわい、家庭生活に恵まれておりますし、子供は元気でやってますから、不足はないんですよ。ただ、この病気さえなければという気持ちはありますね……」

と老人。病気さえなければ、もっともっと

なくして、聞くものなのだ。そして、この子にとって、なによりいらだたしく悲しいのはマンガにしても活劇にしても、いちばん見たい、いや聞きたいと思うすてきな場面になると、そこはたいていセリフがなくなって、ただ見ることのできない動きだけが展開するということだ。

「でも、ぼく、ぜったいに、今どうしたの？なんてきかないんだ。だまってね、たいがいこういうことじゃないのかなあって、ひとり想像するのさ、見えないんだもん、しょうがないよ」

今、全国で、こうした盲人は、老若あわせておよそ二〇万。出生時からの先天性盲人と中途失明者をふくんだ数がこれだ。そして、これだけの人たちが、この子のように、テレビを見るものでなく聞くものとしてしか知らないのだ。この人たちには、テレビよりは古ぼけた音の悪いものでもラジオのほうがいいというのは、おそらくそのせいだろう。

まさしく、中途失明者をのぞいて、およそ見るということがどんなことであるかを、この人たちは知らない。赤・青・黄など、色というものをこの人たちはけっして知らない。ただ一色、知っているものがあるとすれば——それは「黒」だ。

昼も夜もない、四六時中同じ暗黒、星のきらめきもない闇——この人たちにとって、「黒」は、けっして色のなかのひとつではなく、好むと好まざるとにかかわらず、自分たちが置かれたそれよりほかない「状態」なのだ。

そして、この人たちのほとんどすべてが、この「状態」からほかの状態に、ちょうどすまいを変えるように移転するということは考えられないのだ。その意味で、この「状態」は、移転も脱出も不可能な流刑地で、しかたなしに生きる昔の囚人のさまに似ている。

まことに、この人たちこそ、そこで生きべく、しかたなしに住みついた住人——常住不変の〝暗黒の住人〟なのだ。

## ここに光がある

——でも、わたしは、そういう言いかたを好きでないです。そりゃ、晴眼者からすればたしかに〝暗黒の住人〟かもわかりませんがわたしは、それが全部ではない、わたしたちは、けっしてそうばかりではないってことを言いたいですね。

先天性全盲の二八才になるOさんは、強い語調でそう言う。

——わたしたちは、耳を使ってラジオからふつうの人以上にいろいろなことを学びますし、本だって、ふつうの人たちと同じスピードで、何冊でも読んでいるんです。ことに、わたしたちにとって、本くらいありがたいものはないですね。わたしのこれまでの勉強は、本があったればこそ、みなさんと変わりなく進めてこられたわけです。

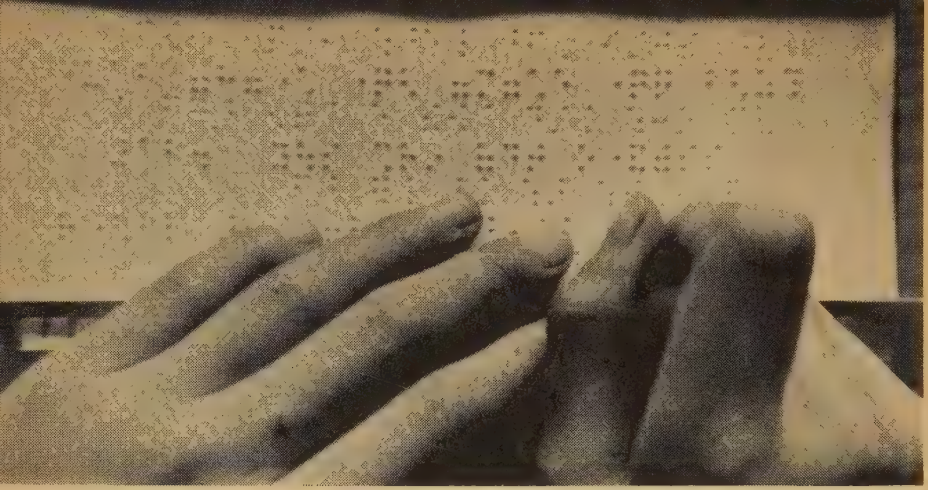
全盲の青年Oさんが、晴眼者と変わらない大の読書家、話題も豊富、愛好する文学作品を次々とあげる——これはいったいどうしたことか。たしかに、Oさんの顔には、晴眼者が想像する〝暗黒の住人〟らしい陰のある表情が見られない。

——つまり、これなんです。

そう言って、Oさんが見せてくれたもの…目は心の窓というが、Oさんの心の窓は、目ではなく、ちがったところにちゃんと開かれていた——

それは、細かくよく動く指先である。読書家のOさんは、これで本を読むのだ。指先の読書というものがあるかどうか、あるどころではない、そのために作られた、ふつうの人が読むことのできない特製本が数千冊もあるのだ。

この特製本を、点字本という。ハンランする週刊誌やベスト・セラーの活字は目で追うものだが、この特製本の点字は、一字一字指でたどるのだ。もちろん意味や内容はそっくり活字本と同じだ。島崎藤村の『破戒』は、



（点字を書いてゆく手）

活字本で「蓮華寺では下宿を兼ねた」という一句で破乱万丈の物語がはじまるが、点字本でも、もちろん字こそちがえ、同じことばだ。そのふしぎな点のつながりだけの文字をここに写すわけにいかないが、「レンゲジデハゲシュクヲカネタ」というふうに……。

——だからねえ、とてもありがたいんですよ。もう、名作でもなんでも自由に読めるんですからねえ。

Oさんのうれしそうな話である。このふしぎな文字の本が、Oさんのとざされた心に照る唯一の光だと言っても、それはけっして言いすぎではあるまい。じじつ、Oさんは「わたしの人生の光・心のともしび」とはっきり言うのだ。

小さな点だけがいろいろな形で並んでいるだけのこの本を、たどたどしく指先でたどることをおぼえたある全盲の男の子は、同じくその文字を一点一点使って、こんな読書感想文を残している。

「コノゴロ、ヨムノガハヤクナリマシタカラコナイダハ、ミヤザワケンジノ『ドングリトヤマネコ』トイウホンヲヨミマシタ。ヤマネコニマネカレテ、イチロークンガヤマニイキマシタ。ドングリタチガオオサワギシテ、セイノタカイノガ、イヤ、アタマノマルイノガエライト、サイバンヲネガッテイテ、ヤマネコハコマッテイマシタ。ソレデ、イチロークンガサイバンシテ、ヤマネコニコウイワセマシタ。「コノナカデイチバンエラクナクテバカデ、メチャクチャデ、テンデナッテイナクテ、アタマノツブレタヨウナヤツガイチバンエライノダ」。ソレデ、ミンナシズカニナリ、サイバンハオワリマシタ。コンナモノガイチバンエライノナラ、ジャ、ボクダッテソウジャナイカトオモイマシタ」

## 光の製造人たち

ところが、こんなふうに愛読されていながら、この本は、けっして増刷に増刷を重ねるというわけではない。いったい、本は手のこんだもので数が少ないほど、それは豪華本・限定本として珍重される。とすれば、初版がたった一冊、ほとんど再版ということのないこれらの点字本こそ、限定版第一号ぼっきりの貴重な特製本ということになる。

それというのも、手がかかるという点では、まるで、昔の筆写のように、一字一字の文字を刻みこんで一行をなし、一ページをなし、一冊をなすというのがこの本だからだ。活字ならば「昔の筆写」ですむところを、この本では、「ムカシノヒッシャ」というふうに、二倍三倍の長さで、それも定められた特別の点の刻み方をもって一字一字書き込まな

[illegible]

[illegible]に思っていなかったですか。

「わが子に対する信頼をもっていたから。そう思いませんでした。いかなることがあっても、現状は永久に続くものではなく、変化[illegible]ていけば、それが最もよい。職業はなんでもよい。与えられた能力をよく用いて、世のため、人のために[illegible]きも、おもしろいと思った。わたし自身、一[illegible]いる。官僚主義のヌルマ湯につかったような[illegible]捨てたことは、その一三をアドベンチュラス（冒険的）にし、ホープフル（希望的）にしているとみたね。もっとも息子は今日では平凡なサラリーマンになって働いているがね。学校を退学させられたり、受験に落ちたりすると、なにもかもダメになったような気がして、お先まっ暗だと思うがそんなことはない。人生のレールは一本だけじゃないからね。ぼくは息子に向かってきみの卒業した大学は東京大学ではなく会字塾大学だったね、と言って笑ったよ」

――それでは、親の子に対する愛というの[illegible]んをひとつ……

「親の子に対する愛は、大きなものがあるき[illegible]と子の血族関係は、この人格関係を形成する一つの機縁にすぎない。血はそれほど重要で[illegible]

[illegible]親に対する孝を説くが、なにゆえ神に対する孝を説かないのか[illegible]遠言して神と人間との関係を[illegible]マニズムの家を[illegible]り、人間界をもって本体とし、神との関係、霊的世界をもって、人間界の影像とみていたからだった。今にして思うと、ウエンライト先生のことばは、神を本体とし、人間世界の[illegible]

[illegible]ぼくは知らない。聞いたこともない。しかし[illegible]、神の人間に対する人格的関係が濃く影を[illegible]ている。

最後に、第一次大戦後、キリスト伝を書い[illegible]う。

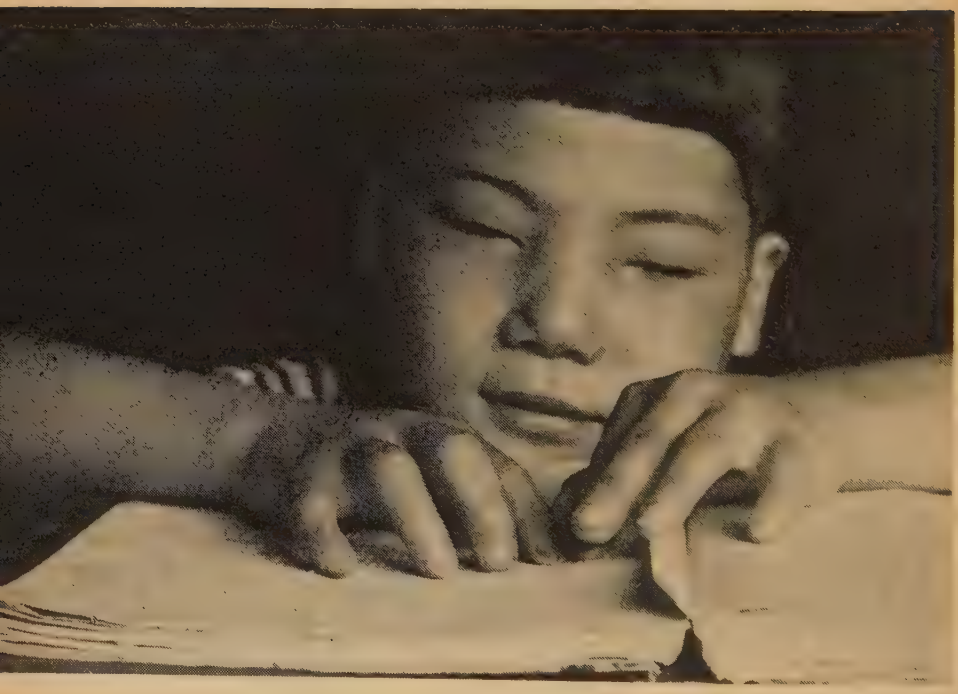
[illegible]る。しかし父の子に対する愛は純真にして永遠である」

（キリスト新聞社・教文館社長）

＜信仰に生きる5＞

# 〝暗黒の住人〟に光を

## ―点訳奉仕に生きる老夫婦―



### 一年中の闇

十人あまりの子供たちが、息を押殺してテレビの活劇に見入っている。なんとかいうエライ強そうな男が取りかこむ悪漢たちを片っぱしから投げ飛ばす――しかし、多勢に無勢、悪漢たちはしだいにその正義の男を崖っぷちに追いつめる。何一〇メートルドは波頭も白い岩だらけの磯、緊迫した空気、しんとして声もない――危機一発、かけ声するどく崖下の空中に放り出されたのは正義の男、ではなくして悪漢の親玉――

「わァッ、すげえ！」

「やったア！」

子供たちがいっせいにどよめく。

そんななかで、ただひとり、いったいなにごとが行なわれたのかとばかりに、きょとんとしている子供がいる。その子は笑わない。顔さえまっすぐテレビに向いてはいない。しかし、友だちの歓声のわけを知ろうと、テレビに片耳を向けて一心に身を乗り出す。

――この子は盲人なのだ。なかば開かれた目には、両眼とも暗い影がさしている。

この目は、テレビを見ることができない。すべての子供がよろこぶ輸入マンガも、血わき肉おどる活劇も、けっして見ることができない。この子にとってテレビは見るものでは

# 子を愛す

（語る人）

## 武藤富男

とかく、親が子を愛する愛し方はムズカシイもの。溺愛では子は育たず、放任ではようなんかわからない——

ところで、かわいい長男が、時代の波に動かされて、昭和二十七年五月一日の"血のメーデー"のころから、全学連執行委員のひとりとして活躍した……そういう子を持つキリスト新聞社・教文館社長武藤富男氏（五十七才）に、親として子に対して持つべき愛を聞いてみると——

——先生のご長男は一羊（いちよう）さんとおっしゃるそうですが、これはどんな意味でおつけになった名まえですか——

「新約聖書マタイ福音書十八章の九十九匹のうちの一匹の羊の話から取りました」

——すると、やはりよき羊飼いとしてのイエス・キリストを見出すようにとの願いがこってのことで……

「いやいや、ただ息子が、長じて不良になるとか、横道にそれることがあったならば、この聖句を引いて言い聞かせるためにつけました。いったい、親が自分の子を、自分の思い通りにしようなどと思うべきではありませんよ。生まれたとき、子に対して要求をもつのはまちがっています。期待はいいけれどもね。ただ、悪をなすことか、不良になるとか、わき道にそれるとかすることのないように責任はとるべきですね。よく、息子を何にするといって、はじめから決めてかかる親があるが、あれは必ずしも正しくないね。よい人にさえなれば、何になってもよい。労働者になろうが、職人になろうが、学者になろうが、芸人になろうが……」

——で、その結果、息子さんはどうなりました？

「息子は不良にはなりませんでしたよ。むしろ、ひじょうに純真で、マジメで、つねに人のため世のため、理想のために、自分を犠牲にしてつくすという人間になったと思いますね」

——ははア、それが全学連のことですね。

「そう、八年ぐらい前の話ですかね。ぼくは、息子が全学連にはいったことを、わき道へそれたとはみなかったですね。むしろ、全学連にはいることがわき道にはいったと思う人たちの狭い考えで、[illegible]いましたね。全学連だってよいところがあるじゃないかというのは、ぼくは独自の考え方をしているからです。つまり、ぼくは一つの民族は一つの生きている個体だと思っています。そして、その民族の[illegible]危機は、一七、八才から二十二、三才の青年にとってもっとも鋭く感じられる。その[illegible]というのは直覚的ですね。だから、大東亜戦争のときは、この年代の青年が、一番に[illegible]、[illegible]

して、親を悲しませたものです。今の若い人たちは、それを軍国主義による強制とみるが、戦争初期の特攻隊はそんなものじゃなかったね。日本民族の危機にあたり、もっとも尖鋭的に直覚的にその危機を感じとって、生命を投げ出してこの民族を守ろうとしたんだ。ただし、こうして死んでいったことには、どこかにまちがいがあると思うがね。このまちがいは当時の指導者の責任だね。戦後の全学連には、一七、八才から二二、三才の若人が、やはり民族の危機を感じとってたち上がったところがあるね。米ソ両国にはさまれた日本がこのままでは危いということを、若人たちは直覚的に感じとっているね。それを最も尖鋭に直覚して行動にあらわしたのが全学連ではないでしょうかね。アメリカに従ってさえいれば安心だと日本人が思うことには、どこかにゴマカシがある。『この民の傷を浅くいやし、安からざるに安し安しという』類だね。当時の日本の指導者には、バビロニヤの力を蔑視し、エジプト一辺倒だったユダヤの指導者みたいなものがあったね。全学連にはいって活動している息子を見ると、純真であり、自分をその運動にささげつくしていたよ。そして、これは、日本民族の危機を非常に尖鋭に感じとっているためだと思ったな。これに対比して、晩年において、感受性の衰えている自分を見出しましたよ」

——そういう息子さんをどう思いました？

「深い同情と共感をもったね。だから、わが子の純真さと勇気とに対して尊敬をいだきましたよ」

——すると、息子さんのとった方向は、親としては賛成で……

「いや、賛同はしない。ぼくにはぼくの生き方があるから。なんじはなんじの道を、われはわが道をだね、だから干渉はしない。ただ、息子の生活態度の純真さに深い敬意をはらったわけさ」

——奥さまはいかがでした？　母として……

「家内は、息子のからだと将来の生活を心配しましたね。ぼくは家内に言いましたよ、親は子供に関してみずから悲劇を作り、不幸を造り出すものだ。子が親の思うとおりにならないと、それを自分たちの不幸にしてしまう。悲劇や不幸は子に原因せず、親に原因することが多い。子供が全学連の執行委員になったからといって、それを不幸であると思ってはいけない。そう思えばそうなる。これを悲劇にすれば、深刻な悲劇になる。しかし、別の人生観からすれば、これはなんら不幸でも悲劇でもない。人生には苦難はあるが不幸はない。むしろ、息子がひたむきに生きていることを喜ぶべきだ、とね。

——二七年五月一日、血のメーデーのときはおふたりともどんな気持ちでしたか、親の情として……

「あのときは、息子はまだ東大にいた。夜帰ってこなかった。夜中の一二時、一二時半になっても帰ってこなかった。で、メーデーのなかにいたろうと推定した。おそらく、体にドロでもついていて、帰りにつかまったのだろうと思った。家内はケガするか死にはしまいかと心配したが、ぼくは、内乱ではあまり人は死なないものだし、メーデーの騒ぎは、まだ内乱というほどのものではないから、だいじょうぶだと思っていたから、心配しなかった。たとえ、逮捕されても、そんなことは不名誉でもなんでもない。そういうことに対して親は淡々たる態度をとり、弁護とか保釈とか身柄引取りとかいうことについては、十分な配慮をもってやるべきだと思った。こういうことは破廉恥罪じゃないんだから、これを恥だとか、家名を汚したなどと思うのはまちがいだよ。親は高い所に立って子を批判するのではなく、子の心持ちにまで降りて行って、子の重荷を負うてやるべきです。

家内は、その晩は門の戸が風でガタッという音とび出して行き、幾度も外にでてみた。息子は一時すぎに帰ってきたね。すると家内はすがりつくようにして迎えた。わたしは「きょうはどうだった」と息子に言った。息子は「きょうは歴史的な日でしたよ」と言って、

# すべてを神に捧げる彼と

小島清子

わたくしが現在の夫と出会ったのは、まだ女学校を卒業して一年半ぐらいたったころだったろうか、会社勤めもつまらないし、好きな洋裁を習えるということで知り合いの洋服屋さんに通っていたときで、所は小さな近くの教会であった。女学校を戦後のまだ二年目の年に卒業したわたくしは、心に戦争のいたでを負いながらもひとりの人間として、そして女として真に生きる意味を見出したい思いにもえていた。この求めてやまない思いを、ふとしたきっかけで通うようになった教会で満たそうとしていた。そして次の年には四人の人たち——その中のひとりは現在の夫であり当時専門学校の学生であった——といっしょに受洗した。彼と親しくなったのはそれからまもなく、教会学校の教師や、青年会の会報の編集などで顔をあわせるようになってからである。そのころのわたくしは、いままでわたくしを支配していた、長いものには巻かれろ、万事はなるようにしかならないという現状肯定的、あきらめ的考え方とまったく違う、キリストの示す生き方のまえに、現実の小さなわくの中の自分を越えて、たくましく生きる希望とエネルギーに満ちていた。わたくしは、キリスト教の精神、聖書から、最も大きな影響を受けている古い文学史の流れを持つ英文学を学びたいと思った。悩み、悲しみ、闘争、さびしさの心を持ちながら、愛する心を持っている人間、強さの中に弱さのある人間、わたくしは、かぎりなく人間を愛する心で、神と人とのつながりの過程を究めたかった。

彼もわたくしのこうした心の戦いのとき、工業専門学校の機械科から、新制大学の社会学科へ、さらに聖書学院へと心の変遷を神の前にいさぎよく明らかにしていった。そして、彼との会話や交わりを通して、すべてをかけて神のために生きようとしているお互いの姿の中に、やすらぎと愛を共感し、ひそやかにも自分にない異性の信仰態度の美しさを見出すようになったとも言い得ようか。このことはわたくしにとって、第二の心の戦いとなった。それはひたむきに自分の生きるすべてを神にかけていた者が、そのことによって、神の前に与えられるやすらぎと愛を、こんどはひとりの異性から感じることに、わたくしは神の前におそれたからである。心のかたすみに残った、折にふれて彼の言ったことばのはしが、いつのまにかわたくしの心にひろがるとき、あるいは彼を思うゆえの小さなしこりや、さびしさのあふれる思いの消えないとき、わたくしは、あらゆるきずなをたちきっても、神にだけ従って生きてきた自分の生きる道を思っては聖書を読んだ。「油断することなくあなたの心を守れ、命の泉はこれから流れ出るからである」（箴言四・二三）。しかしいくたびか彼への人間的なきずなをふりすてようとした。しかし、人間のきずなから離れ、神により近く行こうとすればするほど、それは彼と一つ思いになることだった。この

純粋な自由の中で、わたくしは自分の英文学の取組んでいる課題や、問題を彼に語り、彼の勉強している問題や考えを聞き、語り合うときを楽しんだ。

わたくしたちが属していた教派の聖書学院の学生は、異性との親しい交際を厳禁されていた。もっとも映画を見ることも、喫茶店でお茶を飲むことも禁じられていたのだが。したがってわたくしと彼との交わりが親しみを増してくるにつれ、教会の内部でも批判的なささやきが聞かれるようになった。神の前に生きる生を、神の愛と、心にとがのない思いを満たし、内面的にも戦い続けて歩むわたくしの心に、こうした外側からの無理解、しかも信仰の世界に生きることをかけて交わるわたくしたちの真実な愛情と、自己形成の励ましあいの否定に直面して、男性としての彼への、わたくしの現実的なかかわりを問われるとともに、信仰生活の苦しみを感じた。

彼は聖書学院での一年が終ったとき、ある牧師のすすめで、東京神学大学にはいった。周囲との、ことさらなまさつをさけるためにわたくしと彼は教会ではほとんど口をきかないようにしていた。ときには矛盾に満ちた思いで教会の中でのひたむきな祈りが、神に届かないかのようなうつろさを感じることもあった。こんなとき、幸いわたくしの学校はクリスチャン・スクールであったので、古風な静かな大学のチャペルで、心の戦いの疲れを神の前に憩うこともできたし、興味深い講義や、自由な友人たちとの語りあいが、教会での孤独をささえてくれた。そしてこの友人たちとの語りあいの中に、自由な若さやいろいろな人がらを感じながら、わたくしの心に浮かんだのは、わたくしが圧迫を感じたあの教会や組織の中で、黙々と耐え、神の前に生きることを深めている彼の姿だった。

そんな秋のある日、わたくしたちの教会が属する教団の総会に、わたくしも彼といっしょに出席した。聖書学院を卒業した人たちが伝道者となって出てゆくために頭をたれ、ひざまづき、あん手礼を受けていた。教派による信仰の相違や問題はあるにしても、なんの資格も、学問的権威も持たず、ただキリストの福音をたずさえて、どんな開拓の地へでも行こうとしているその姿を見たとき、神の召しの厳粛さがわたくしの心を貫いた。語り、交わるとき、神の前の自由と喜びをそのまま感じられる彼。その彼も、やがてはこうした姿で神の前に立つ、そう思ったとき、モーセがその前にひれ伏した燃えるしばを見る心地がして、「わたくしが悪であるならば、わたくしを焼きつくしたまえ、ただ聖き神のみ旨だけが働きたまわんことを」と心の中で叫ばずにいられなかった。

このことがあってから、彼を愛するということは、神にいっさいを献げている彼を愛することであり、厳粛な神の前にわたくしの心と思いをささげ尽す所でだけ、彼と愛しあえるのだと感じて、その深い喜びとともに、心の戦いのきびしさに生きねばならぬ人間の悲しさを思った。わたくしはこの深い喜びを持ち、悲しさを越えて生きなければ生きられない思いを新たに味わった。彼の家に誘われ、帰りを送ってもらったあるとき、わたくしは彼に言わざるを得ない思いで言った。

「わたくしは、あなたの行く所ならどんな所へでも行くわ」

「ええ、いつでもわたしたちふたりはいっしょですよ」その思いは深い神への讃美があふれ、

「わたくしは、わたくしの生きることが神の前とあなたに捧げる詩であり、うたでありたいと思うわ」

「ええ、ぼくが神のために生きるかぎり、あなたはきっとぼくのやさしい慰めになってくれる」神にすべてをかけて生きる思いが、神のためにすべてを捧げて伝道に生きる彼を愛し、その伝道のわざに彼の働きを助けてたずさわることに結びついたとき、神の恵みと深い愛をわたくし自身ささえきれぬほどに感じた。

それから数年して、神学大学を卒業した彼とわたくしは結婚し、わたくしたちの生まれ育った東京の地を離れて、東北の開拓伝道へと向かった。

（小島さんのご住所は福島県伊達郡保原町）

苦しさ。万物の霊長もこのようなときは一個の動物的な存在にすぎない。

悪夢のような一夜が明けると、目の前には鬱蒼たるジャングルに蔽われたガダルカナルの島が、大きく横たわっていた。波静かな海上には点々と同じ艦の者が浮かんでいる。わずか一夜を境として、それはなんと変わり果てたみじめな敗者の姿ではなかったか。頭から重油を浴び、太陽の直射を受けて、体は疲れていくばかりであったが、それでもなんとかしてガダルカナルの味方の陣地まで泳ぎつこうという希望があった。

しかし、そうした希望もまもなく微塵に打ち砕かれてしまった。どこから現われたのかアメリカ軍の上陸用舟艇が、海上に点在するわれわれを収容にやって来たのである。そして、遂にどうにもならず捕えられてしまった。数日の間は、まるで夢でも見ているようであった。それでも、この自分が日本の軍人が伝統的に最も恥ずべきものとして考えてきた敵国の捕虜になったのではないかという思いに到ると、いたたまれない気持ちであった。目の前はまったくの闇であった。捕虜になったという意識が確かになればなるほど、もはやこの自分に残されている道は死以外になにものもなかった。なんとかして死なねばならない。それからというもの、自分の心の絶えず中心を占めたものは、この「死」ということだの一語でしかなかった。そのときまで、自分は自殺ということはそうむずかしいことではないと、漠然としてではあるが考えていた。しかし、いざそうした状況に追いこまれて真剣に死を対決せしめられたとき、この同じ自分の体内に、良心もどうすることもできないほどの、強い生の本能が働いているのを見出して驚いたのである。それからは、一日一日が死を求める良心の叫びと、生の本能との果てしない格闘となった。

われわれ捕虜は、ガダルカナルからニューヘブライズへ、そしてそこからまたニューカレドニヤへと輸送船で運ばれた。ニューカレドニヤでは病院に入院させられ、耳だの負傷した個所の手術や手当てがなされた。敵国人である相手の愛のこもった行為を、軍人としてのわたしの心は、素直に受け取ることができなかったが、人間としてのわたしの心は、それによって強く打たれた。時日がたつにつれ、本能に打ち勝てないで生きる自分は、やがて、どうにでもなるようになれといった自棄的な気持ちに変わってきた。それは「生ける屍」のような生活であり、今ではかえって戦死をしていった同僚たちがただうらやましかった。

しばらくすると、今度はさらに南のニュージーランドへとわれわれは移された。首都のウェリントンから東のほうに一山越えたところにフェザストンという小さな町があったが、その町のはずれに、有刺鉄線の柵で囲まれた戦時捕虜収容所が急造されていた。周囲は広々とした牧場で、日本などでは見られない別天地を形造っていた。羊の群を唯一の相手に、小さな柵の中で、約三ヵ年の年月を過すこととなった。表面はまことに静かな変化のない単調平凡な生活であったが、内面的には苦悩の連続であった。しかし、それを通して、わたしは赤裸々な人間そのものの姿に、次第に深く目を開かれていくようになった。

わたしは、それまで日本の「聖戦」を「聖戦」と信じて戦ってきた。しかし、捕虜になっての一つの発見は、相手には相手の立場があり、相手なりの正義があるということであった。これまでは日本の立場こそが絶対に正しいものと信じて疑わなかった。しかし、それが相手の世界にはいってぐらついてきたのである。こうして、日本的なものから世界的なものへと大きく目を開かれていったとき、いったいどこに正義なんてあるのかわからなくなってしまった。国家は国家で結局は自己の利害で動いているのではないか。わたしの心はいつしか国家そのものに対する不信と、また同時に人間そのものに対する不信へと変えられていった。世の中というものがさっぱりわからなくなった。また自分自身をささえてくれるなにものもなくなってしまった。

そのうちに、この収容所にかつて日本に宣教師として行ったことのある英人が軍隊付チャプレンとして着任し、日本人のためにも週

一回の聖書の集会を開くようになった。しかし、キリスト教というものを、なにか女性的でバタくさい西欧の宗教と思い込んでいた当時のわたしは、そうした集会に見向きもしなかったし、また、外国宣教師なんかに自分の魂まで束縛されてたまるものかと思っていた。

たったひとりで暗中模索の日々が続いた。そのころである。たまたま収容所の中にあった日本語の書物の中に、あの徳富蘆花の「勝利の悲哀」という一文を見出したのは……。それは二回、三回と読んでいくうちに、次第に強くわたしの心をとらえるようになった。ここに少しく抜萃してみよう。「……所詮、人は有限を悲しみ、無限を慕うて止まない。一念にせよ、情にせよ、これを果しこれを晴す時は、ここに空間を生じここに悲哀を生ず。私共の悟るべきはここにある。影を追わんか、実を捕えんか。皮相に止まらんか、中に不朽なる或る物を尋ねんか。これ実に一刻の猶予を容れざる厳粛なる問題であります。……諸君。一国の使命は一人の使命である。宇宙を支配する法則はまた一人を支配する法則である。宇宙の目的はまた同時に一人の目的でなければなりませぬ。身は渺たる蒼海の一粟であっても尚宇宙の大をもってしても換うべからざる尊いものが含まれている。しかるに有限の境に甘んじて何の知るところもなく、何の悟るところもなく空々漠々たるはまことに浅ましいことではないか……」。これらのことばはわたしの心を強く打ち、これまでになく求道の熱意をたぎらせた。蘆花のこの文章は最後に次のユダヤの預言者のことばをもって結ばれていた。「しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない」。わたしが聖書を謙虚に読んでみようと思うようになったのは、このときからである。当時柵内にたった一冊あった日本語の旧新約聖書を開いて、その第一ページから読むことを始めた。だが聖書の真理はそう簡単に理解できるものではなかった。

そこには起伏があった。しかしそれらを通して、わたしは次第次第に人間存在のまことの姿を示されつつあった。夜中、心が冴えるままに、いくたびかベッドの中でひとり静かに沈思し、また呻吟したことであろう。わたしはこのときはじめて、自分という存在が、この無限の宇宙の中でまったく孤独であることを知った。真に頼るべき人間はこの世界にひとりもいないことを悟った。人間のドン底深淵が意識され、あまりにも弱い微細な自らの姿が、広大な空間に押し潰されるような衝迫を感じた。それとともに、またこの人間の弱さが何物かによって赦されないとするなら、すべての人間は永遠に絶望であることをも知った。まさにこのときである。あのイエス・キリストの十字架が自分の魂の奥底に初めて映ってきたのは……。やがて決断してすべてを神に投げかけたとき、わたしは救いの喜びを体験したのであった。それはまことに深い心の歓喜、歓喜であった。《もうこれでいつ死んでもいいぞ》。われとわが心にしみじみとこう言い聞かせることができた。あとはおつりの人生となったのである。

それからのち、週に一度の集会において、宣教師はよくこういうことを言った。「救われた人はそれを他の人にも宣べ伝えるはずですよ」と。最初は何気なく聞いていたことばが、次第にわたしに強く迫って来て、遂には召命と献身にまで強制した。もはやイエスのために生きようとする以外、自分にとって他の生活は考えることができなかった。

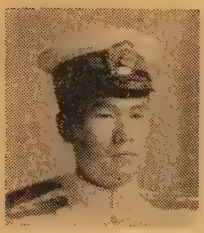
戦争捕虜からキリストの捕虜へ。小さな一つの戦争体験は、わたしに二つの大きな人生のカーブを記録させた。あとから顧みてみるとき、このようになったのは決して自分から選び取ったものではなく、ただそのように導かれて行ったにすぎないことを思う。ただ一つ確かなことは、かつて祖国日本を一身をもって愛しようとした者が、イエス・キリストを愛する者に変えられたということである。

（日本聖書神学校教授）

# 神を愛するようになるまで

## ――一つの戦争体験から――

新屋徳治



昭和17年当時の新屋氏

去る一月二〇日、米国の首都ワシントンにおいては、第三十五代大統領に選出されたジョン・ケネディの就任式が厳粛かつ盛大に行なわれ、世界の人々はこの若い四三才の大統領に、心からの祝福を送ったことであった。ところで、そのはなやかな就任式のパレードに、彼が太平洋戦争の際、海軍中尉として指揮をとっていた魚雷艇一〇九号が参加したことを、新聞は写真入りで報道していた。J・M・バーンズの書いた伝記『ジョン・ケネディ』の中にもこのことは劇的に触れられているが、この魚雷艇こそは、ソロモン群島での戦闘において日本の駆逐艦「天霧」と衝突しその場で沈没し、ケネディをはじめ乗員たちは海中に放り出される運命となった。そこはフカの住む危険な海面であったが、やがて近くの島にたどりつくことができ、土人の連絡で幸運にも味方に救出されたのであった。この出来事が、その後のケネディの人間形成にいかに大きく作用したかは容易に想像されることである。最近はまたこの物語が映画化されるという話も聞いている。

この太平洋戦争における一つのエピソードを最初に読んだとき、おそらくいちばん驚いた者の一人はこのわたしではなかったかと思う。それというのも、実はわたしもかつて約一ヵ年の間、この「天霧」という駆逐艦に乗り組んでいたことがあるからである。もっとも断っておかねばならないが、わたしが乗っていたのは衝突の当時ではなく、それより数年前のことである。しかしとにかく、非常に身近かなものを感ぜざるを得なかった。しかもことはそれだけでない。自分にとっても、あのソロモンの海は終生忘れることのできない意味を持つのであり、駆逐艦の墓場とさえ言われたあのソロモンの海で、同じように自分の乗っていた駆逐艦が沈められ、海上に投げ出されるという運命を経験したのであった。しかもわたしの場合、この体験なくして、神の愛を知るにいたるということはおそらくあり得なかったのである。

昭和一二年の三月、そのころ午込にあった府立四中を卒業すると、四月にはあの俗塵を離れ、山と水に囲まれた江田島の海軍兵学校に入学していた。われわれのクラスは第六十八期といって総勢三〇〇名、あの真珠湾の特殊潜航艇に乗っていた酒巻とか広尾といった連中も同じ釜の飯をくったものである。その年はいわゆる支那事変の始まった年であり、次第に戦争の規模は雪だるま式に増大していく情勢にあった。そんなわけで、卒業の時期も早められ、昭和一五年の夏には江田島をあとに遠洋航海へと上った。

当時の日本に支配的であったものは、なんといっても強い軍国主義的な風潮であり、まだ思想的に固定しない、また批判力の足りない若い世代の者に、それがいかに強く作用したかは言うまでもない。この世に生まれ出て

以来、キリスト教といったものに全く無縁に成長してきたわたしなども、ある意味では、その被害者の一人であったと言えよう。このところで、わたしは「神を愛するようになるまで」というテーマを与えられているのであるが、ここにある「神」とか「愛する」といったことばが、当時の自分にどのような意味内容を持っていたかを考えれば、思い半ばにすぐるものがある。

当時、「神」ということばは、決して珍らしいものではなかった。「神国日本」をはじめとして、やれ「天照大神」、「八百万の神々」など、神ということばにことかくことはなかった。天皇は「現人神（あらひとがみ）」であると頭から教育され、軍人が戦死すれば「軍神」として靖国神社に祭られるといった調子であった。聖書の神が、こうした神々とはまったく異質なものであるなど、かつて聞いたこともなかったのである。また「愛する」という場合、そのことばから第一に出てくるのは「愛国」ということであったろう。われわれ日本人の倫理も道徳も忠君愛国の一色にぬりつぶされ、それをかつて疑ってみることもなかった。わたしも、ただこの祖国日本を愛したいという一念に凝り固まっていた。しかも、この場合の日本を愛するということは、それを裏返えすと、日本の主張、利害に反する米英は、これを徹底的に憎まねばならないということであり、愛は決して日本という国境を越えることがなかった。右翼的、国家主義的なものの考え方に支配され、自分にはその誤りに気づく批判的能力も人生経験もまだ欠いていた。

短かい遠洋航海が終わると、一万トン巡洋艦「那智」の艦長付兼見張士として佐世保に赴任、やがて海軍少尉に任官した。このときはなんというか、おそらく学校を卒業して就職をするときにだれしもが経験するであろう、なんとなく一人前になったような喜びを感じたものである。前途は明るかった。それから半年あまりすると、問題の駆逐艦「天霧」に通信士兼航海士として転勤、駆逐艦生活のズボラで形式ばらない、しかもやるときはやるといった雰囲気がすっかり気に入って、連合艦隊での生活を楽しんだ。だがそのころになると、日米間の関係は次第に緊迫の度を加え、それはついにあの昭和一六年一二月七日の開戦において頂点に達した。

「天霧」は海南島の三亜から、山下兵団の輸送船団を嚮導してマレー半島の上陸作戦に参加、それ以後はシンガポール、スマトラ、ペナン、アンダマン諸島、インド洋といたって調子のよい順調な作戦を続け、いわゆる第一段作戦が完了するとともに、昭和一七年四月に呉に帰還した。そこで今度は海軍中尉として横須賀所属の駆逐艦「暁」の水雷長に転勤させられたのである。「暁」は当時北方担当の第五艦隊に編入されていて、あのミッドウェー作戦と同時に実施されたアリューシャン群島のキスカ、アッツ両島の攻略に従事した。しかし、ミッドウェー作戦は完膚なき敗北であり、太平洋戦の重要な転機となってしまった。ついで南方のソロモン群島東南端のガダルカナルが攻略されるに及んで、この島の争奪が天下分け目の戦いとなった。「暁」は寒い北の海から赤道を越えてこの方面に転進を命じられ、しばし激烈な戦闘に従事することとなるのである。

昭和一七年の一一月中旬、南洋群島のトラックを出撃した日本の戦艦「比叡」、「霧島」と、これを護衛する駆逐艦群は、真夜中を期してガダルカナルの敵飛行場に殴り込みをかける使命を帯びて同島に接近しつつあった。だが、その暗黒の海上には、巡洋艦を主力とするアメリカの艦隊がわれわれを待ちかまえていた。すぐに猛烈な夜戦が展開、そして敵側に最も近く占位していた「暁」は、真先に敵の集中砲火を一身に集めた。一弾は艦橋の後部に炸裂、アッというまもなく、この体は甲板にたたきつけられた。〝ああ、これで死んで行くんだな〟。どこかに引き込まれるような静かになる一瞬。しかし死んではいないらしい。起き上がると、立つこともできた。しかし心機転倒、すっかりあがってしまい、生きた心地はなかった。艦全体がもはやどうにもならない修羅場と化していた。やがて艦は傾斜を増しつつ沈んでいった。それから数刻、海中に巻き込まれていったときの呼吸の

ときには、わたしもまた小学校の全課程を自力で修了していた。

父母にせがんで、中学の講義録を、ついで大学の講義録をとってもらい、防空壕の中であるいはコウリャンを食べながら、勉強一路に専念した。

やがて終戦。人々の心の中に重くのしかかっていたものが、いっぺんに解きほぐされていた。わたしの心も……と、突然わたしは己自身の空虚さを強く覚えた。おれは今までなにをしていたのだろう。勉強、それなら勉強はいったいなんのため。終戦という解放された空気といっしょに来た二〇才という年令が、わたし全体を大きくゆるがせていた。

なんとかしなくてはいけない、そのなんとか……。それは一刻も早く世の中に出ることだった。わたしはまだ表にさえ出したがらない父母たちに隠れて、一本立ちへの道を歩き出すため、町に出た。

しかし人の余っている時代、だれが好き好んで手も足も口さえ不自由なわたしのような者を、雇い入れる者があろうか。わたしはしかたなく、よたよたした足取りで花を売り歩いた…お茶を…だめだった。容易にさばけないのみか、ときにはこじきに、ときには靴どろぼう扱いにされたりした。またふるえる手で、一日かかって二〇円の賃金をあげる袋張りもやってみた。が、こんなことでは独立はおろか小使いさえ得られない。

さすがのわたしも絶望した。すすけた外套を着たわたしは、ふらふらと死場所を求めて歩いていた。

神の御摂理か、町はずれまで来たそんなわたしの足を、フト止めさせたものがあった。幼い日、母が歌ってくれたような聖なる曲の音、わたしはひかれる思いで、ふらっとそのメロディの流れ出ている建物の中に吸い込まれるようにはいっていった。くしくもそれはキリストの教会だった。冷えついたクリスマスの宵のことだった。

## 初めて知った失恋の悲しみ

K教会のN牧師は、わたしをして神のみ前にぬかずく者としてくださったのみか、あれこれと個人的にわたしのゆくさきについて心配し、わたしを宣教師のH師に紹介してくださった。

H師の家は目黒の高台にあった。H師はスイス生まれの宣教師で、N牧師に負けないくらいな心の温い人だった。

「それならば当分わたしの所で……」H師にこう言われたとき、わたしの心はどんなに踊ったろう。

荻窪のわたしの家から通いで月給四千円、H師の家でわたしにあてがわれた仕事は庭掃き、使い走りその他の雑用だった。頬まれてできませんと言うのは悪いようだ。それにいかにもやさしい。とにかく懸命にやった。と意外のことができた。わたしは電気器具のちょっとした修理までやってのけていた。

H師の家にはM子、F子、S子という二人のメイドがいた。わたしにとって肉身以外初めて身近に接する女たちだった。毎日毎日ひざ突き合わせているうち、いつのまにかわたしは、その中のS子を異性としてひそかに愛するようになってしまっていた。S子が特別な目差しでわたしをみているようで、たまらなくしあわせだった。が、そんなしあわせは長くは続かなかった。病気がもとでS子はそこをやめ、お里の川崎に帰っていってしまった。S子のいなくなった勤め先、わたしは恐ろしいまでに身の空内を覚えた。とともにいなくなったS子への激しい思いが……。

半年たったある日、メイド中いちばん年上のM子の元へ、S子から結婚したというハガキが来ていた。

ひとりよがりな片思いだった。わたしはあうためてガタガタな己のからだを省みた。

この痛手から早く解きほぐされようと、わたしはエネルギーを使うことを夢中で探した。わたしは下手な文章を書き、キリスト教の新聞K紙その他のものに投稿しだした。文芸の同人雑誌の仲間にも加わり、小説らしきものを書いたりした。わたしの文章が、初めてK紙の紙上に活字となって組まれているのを見たときはうれしかった。悲しみが一ぺんに吹き飛んでいってしまったような気がした。

## わたしを救ったK子

ある蒸し暑い夏の夕、目黒のH師の家から

帰って来たわたしは、机の上に、わたしあての一通の封書が届けられていることを見出した。見知らぬ女性からだった。

K紙の読者、今後あなたと文通したい、手紙の内容はこうだった。

わたしはとまどった。とまどいながらも考えた。もうこりごりしたはずだのに、あの事件、S子を思って以来、かえってわたしの心に迫ったのは柔い女の心に触れたいという心だった。

わたしは返事を書いた。折り返し相手からまた来た。あるときはさり気なく、またあるときはお互に打ち明け話、ふたりの間にはひんぱんに手紙が往来していた。そのときの文通の相手がのちにわたしの妻になろうとは、そのときのだれが知っていたであろうか。四五カ月たったころだったろうか、「手紙だけのお友だちではなんですから、一度お会いしましょう」というK子からの提案があり、ふたりは初めて四谷の駅前で会った。

冷い雨がしとしとと降る夕べだった。わたしはK子と連れ立って四谷から国電に乗り、新宿で乗り替え、渋谷に出、渋谷で映画を見た。わたしにとって初めてのデイトだった。

その後ふたりはときどき会い歌舞伎に、大阪喜劇に、寄席に行った。わたしはK子を自分の恋人に仕立てようとやっきとなった。がどうしたわけか実感がともなってこなかった。かえって、これがふたりの間にプラスしていたのかもしれなかったが……。

わたしがK子を特定の異性として身近になが め出したのは、それからなお二年ほどたった、そう、あれはわたしが足の骨を折り、藤沢の病院で治療を受けていたころだった。K子は取るものも取りあえず、はるばる東京の地から悲嘆に暮しむわたしを慰めに来てくれたところからだった。K子はそんなにもこのおれを思っていてくれているのか、わたしはK子の愛に強く胸を打たれた。

わたしが東京のある病院に引き移ってからは、三日にあげず見舞いに来てくれた。

いつかしら、ふたりの間の意志の疎通はより深くなり、K子からか、またはわたしからか、そのどちらからともなく、まるで卵が孵められ、やがてかわいいヒナがかえるように、ごく自然に結婚への話が具体化されていった。

K子はまず山口にいる自分の父親に許しを乞う手紙を出した。山口の父親からの返事はわたしを不安がらせたようなものではなかった。それでおまえたちがしあわせになれば……と理解ある返事とともに一〇万にものぼる結婚資金がK子の元に届けられていた。

K子はまだ足の傷の癒え切らないわたしに代わって、部屋捜しから家庭日常調度品集めまで、ひとり奔走してくれた。

こと、ここに至るも、反対はわたしの家族からだけではなかった。結婚が教会で公にされ始めたとき、いろいろな点で反対する声もあがった。

## だれよりも妻を……

――教会でのわたしたちの結婚式は、とても貧しいものだった。ガランとした聖堂に、それでもわたしとK子の友が二、三十人参列してくれた。山口にいるK子の父親はあまり遠いので来られなかった。そしてわたしの家の父母たちは、実質上は許してくれたものの反対のしこりが抜け切らないせいか、とうとう来てくれなかった。

しかしH師に導かれながら神のみ前に夫婦になることを宣言し、ふるえる手で花嫁姿のK子のくすり指にエンゲージリングをはめてやったとき、わたしは心の中で思わず万才と叫んでいた。山あり、谷あり、行く先きはなお厳しいものであろう。が、今わたしは神のみ恵みのもと、この心の美しい妻を得た。夢と思っていた妻と呼べる女を。

わたしのすべてのエネルギーの源、それは妻であるK子となっていた。

妻K子は、この不自由なからだの文学志望の夫を四畳半一間のアパートの一室に残して今朝も早くから自分の勤めに出ていった。

妻のため、この愛する妻のためだけでも、わたしはりっぱな良いものをこの世に残してゆきたい。本立の上で置時計が軽いセコンドの音を立てている。静かな日中、わたしは原稿用紙の桝目に一字一字文字を埋めていく、妻の、わたし自身のしあわせを思いつつ。

（『月刊キリスト』愛読者）

応募原稿　1.

# 妻を愛するようになるまで

金沢恂

金沢氏夫妻

K子という女と結婚したいということを父母に初めて告げたとき、父母はむしろ意外なことを聞いたときのように目をパチクリさせた。あとは冷い、哀れむような目つきでジッとわたしを見つめていた。

当時、わたしの机の隅には見知らぬ娘の写真がキチンと額におさまって置かれているのを見、週に一回ぐらいづつもう何年となく同じ女文字の封書が、わたしの元に届けられているのを気づきながら、父母はわたしのことばを聞いて愕然とした。

わたしがある女を恋し、その恋心に燃えていることを、この父母はすでに知っていた。が、その恋が発展し、当然おもむくべき結婚へのコースを、ことこの不幸なからだの息子にかぎっては考えなかった。考えなかったのではない。否、考えること、それ自体恐ろしいようにみえた。このよぼよぼな息子、手に職とてない息子、それがどうして嫁を迎えられるのか。

「もう少し、考えたら？」

父母は言った。わたしもはや二七才、精液で夜具をじたじたと悲しく濡らしていたのに、父母はその臭気さえも見て見ぬふりをしていた。

日ごろ、しいて、結婚はすべきではないとまでは言わなかった。が、ことあるごとに父母はよくトラピストに行き修道士になった友の話を聞かせてくれていた。おまえもその人のように、と父母はそうわたしに願っていた。

結婚しようとしても、第一おまえのようなからだの男の所へわざわざ来る女もいまい、親子の気やすさ、父や母にあからさまにいって、息子の心を沈めようとしていた。

が、わたしはもう子供ではなかった。成熟した男となっていた。そんなわたしの前に得ようばかりK子が現われた。わたしは得るものを無性に得たかった。これは父母の言うような単なる欲望か。

わたしは祈った、祈って、また祈った。

神のみめぐみが、わたしの生来の気性と相まって作ったそれは、わたしのささやかな人生行路だった。恥しながらしあわせを得るまでの、そのわたしの姿をここに綴っていこう。

## 夢のない子

わたしは昭和二年三月、北鎌倉の静かな家で初声をあげた。父は内務省の役人だった。「じょうぶな子でね」母はよくわたしにこう言った。生まれたときはわたしはよく太り、よく眠り、またよく泣く子だった。

神のいたずらか、それとも神が与えてくださった尊い試練のたまものか、このじょうぶな子も一才半になった秋ぐち、ふとしたことから熱を出した。高熱は二〇日たっても、三〇日たっても下らなかった。病名はエキリだった。幸い生命は取り止めたものの、四〇度にも上る高い熱が三〇日も四〇日も幼い肉体

を襲い続けたのだからたまらない。病気がよくなり、退院したわたしのからだは、はやきのうまでのじょうぶなからだではなくなっていた。エキリは完全に癒ったけれど、熱のため、運動の中枢神経が犯され、全身マヒ、ケイ直、歩くどころか立つこともできない哀れな子となり果ててしまっていた。その上、舌がもつれ、先日までのおしゃまな口もどこへやら。

四つになっても、五つになっても、六つになっても立てない子。口もろくすっぽきけない子。こういう子がはたしてあってよいものかどうか。

父母は手当たり次第、有名病院に、灸院にマッサージ院にわたしを連れて歩き回ったが、いっこうに陽の目を見ない。「癒りはせんですよ」——どこもここも一応は治療してみるけれど、結局はみな同じことを言った。父母は動き疲れ、へたへたと崩れた。その結果得たものは重苦しい諦めだった。夢のないかわいそうな子、いつまで生きられるか知らないけれど、とにかくわたしたちのかわいい子、幼い生命が続く限りたいせつに育てましょう。これがせめてもの親の責任、父母は悲しみのうちにこう誓いあっていた。

### 負けずぎらい

夢のない子。それゆえにこそただ生きていてくれているだけで……。父母はこんな願いをかけながらわたしを育ててくれた。それだから幼いわたしはただの一回も父母たちからこうしなさい、ああしなさい、こうしてはいけない、ああしては……などと強制されたことはなかった。横になろうが、なるまいが、よだれをたらそうが、たらすまいがそんなことといっこうにおかまいなし、わたしはほんとうに自由な天地にいた、がそこは悲しいただだだっ広い野中、光のささない野であった。

崩れたわたしのからだも徐々にではあるが快復していった。しっで立ち、八つで歩き出した。二つ年下の弟が小学校に上がったとき「ボクも学校へ……」とせがんだ。しかし、父母はしいて学問を身につけさせようとは思わなかった。カナ一つ覚えさせようという気力もなかった。

わたしは学校に通っている弟がうらやましくなった。弟のように字が覚えたくなった。本が読みたくなった。わたしは弟が学校から帰り、そのまま置いて遊びに行った弟のランドセルから、そっと小学一年の教科書を引き抜き、それを見、ひとり悦にいっていた。遊びから帰って来た持ち主である弟がこれを見て泣きわめいた。かくして一冊の教科書を中に幼い兄弟は争った。叫び声を聞きつけ、仲裁にはいった母は困った顔をした、母親をして困った顔をつくらせたわたしが得たものは、弟と同じインクのにおいのするま新しい教科書だった。こうしてわたしの学問への厳しい道は始まっていた。とともにおぼつかない足取りだったけれど、歩けるようになったわたしの心に、表に出て遊びたいという欲求が大きくなった。しかし、これには大きな障害があった。すべてに大らかだった父母たちは、ことこれに至ると大きく制約した。一つは危いということ、そしてもう一つには家のため、他の兄弟たちのために、不具の子の兄弟がいるということを大きく知られるようになってはみっともないというのだった。

知識欲にかられ、表に出て行くわたしは、なるべく出したくないと思う父母にとっては、決して良い子ではなかった。父母たちのすきを伺ってはこそこそと表に出、子供らの遊ぶのを見るだけでは足りなく、その仲間に加わって遊んだ。負けずぎらいのわたしは、自らも竹で鉄砲を作り、他の腕白どもと野っ原を駆けめぐる戦争ごっこまでやった。

「じゅんちゃんには、ここはちょっと無理だよ」

仲間にこう言われても、歯を食いしばりながら、草むらを渡り、丘の頂上に登るわたしだった。

### 神へたどり着くまで

わたしは二〇才になっていた。時は昭和二一年、戦後の混乱時代だった。

八つのとき、弟の教科書を引ったくって読んだわたしは、その後、父母から毎年弟と同じものを買ってもらった。わたしは、その教科書を余分に買ってもらった参考書と首っぴきで勉強した。かくて弟が小学校を卒業した

ってこいさ」

やっと木村牧師の来意ののみこめたころには、もう帰りじたくでした。

そうして「まとまったぞ、まとまったぞ」と、雲内教会の牧師館へ飛びこまれたのでした。

わたしたちは、この道はふたりで静かに耕したかったので、こう第三者に高ビシャにやられるのは不服でしたが、かといって拒否するのは惜しかったのでしたから、「まアいいさ」と、ふたりで笑いました。

牧師館を訪れたのは、それからのちでした。小さい会堂にふさわしく、小さな館でした。礼拝堂の横の赤れんがの半間巾の路地を行きつくと、食堂兼居間兼寝室という八畳の間の横腹へ出るようになっていて、隣り近所の七つの便所にとり囲まれているという、行きどいたドンヅマリでした。

しかし、二階はそれらを超えて、遠景と光線と風通しとに恵まれていましたが、ここに敵は、老母とふたりのおいと四人で暮していました。

おいは敵の長兄正の遺児で、兄は小学下級のダンマリヤの恥ずかしがりや、弟は未熟児で底ぬけのジブクリヤでした。

話は故障なく進んで、あついが夏休みのうちに挙式と、（学年末まで日ノ本学園の責任を果たすつもりでしたから）そんな相談で休暇になると、すぐ、例の牧師館をたずねますと、玄関にたくさんのげたがぬぎっぱなされて、二階が妙にざわめいています。おとなっても必事がないので、上がってみました。

すると、ギクリ、シャクリと相当大きな音を立てている敵の床をめぐって、教会員が心配そうな顔を並べています。

昨日、同志社の校内伝道から帰って、疲れたと横になったとたんにでだしたシャクリが、ずっとつづいていて止まらないというのです。

もう、びっくりさせたくらいじゃだめなのです。柿のへたを足のうらにはってくださったり、せんじ薬をもって来てくださったり、賀川さんは大きな声で気合いをかけたりしてくださいますが、依然としてギクリ、シャクリです。主治医は胃の手当をして、洗ったり投薬したりしてくださいますが、そのうちにもう嚥下不可になっていきます。

教会のかたがたは「奥さん！　帰らないで……」と頼まれます。はじめて呼ばれたこの「奥さん」という呼びかけも気にならないほど、みな緊張しきっています。オロオロしていた母も「ああ、これで助かった」と、病人をわたしにたくして、台所へ下りて行きました。

シャクリは十日間つづきました。それが止まると息が止まるのですから、とめられないような気もします。わたしは文字通りの不眠不休です。しまいには足がきかなくなって、はいずったりしていました。

その苦しい息の中から敵はいうのでした。

「きみとの婚約は、今のうちに破っておく、きみはもう自由なのだ……」と。

しかし、老母とふたりのおいを宙にほおり出すことはできません。敵が逝くなら、この三人はわたしが引きうけるはずだと思いました。

息の止まる回数はふえていきますし、人工呼吸の時間は長びいてきます。

見舞にみえた木村牧師は、告別式を勝手に引きうけて、役員たちに「会堂のいすは皆出してしまって、立ってもらうことにしよう」とか、「花をおいてはせまくなりすぎるから……」とか、しきりにさしずをしていられます。

しかし、わたしは敵に息のある間にぜひしておきたいことがあります。

とうとう木村牧師を枕頭に引っぱって来てもらいました。そして、

「いま、ここで結婚式をしてください」

と申しました。敵は気息奄奄です。肯定も否定もできません。

ところがです。わたしはこのとき、全く崖からつき落とされるようなことばを、木村牧師からきいたのでした。

わたしの怒りは心頭に燃えた、ところではありませんでした。全身が怒りに燃え立ったのでした。

しかし、しあわせな日がきました。多聞教

会の執事でおありになったお医者さま（残念ながらおなまえを失念、ササなんとかいいましたが）が、「奥さんがゆるしてくださるなら、わたしは主治医に黙って一本打ってみたい注射がありますが……」

とおっしゃってくださいましたのをお受けしますと、シャクリは十一日ぶりにピタリと止まりました。息は止まりません。そこへ、これも独断でお願いしておいた野間菊子女史がみえ、頭をクルクルと坊主にして氷のうをあててくださいました。このおふたりの先生だけが脳底膜炎とのご診断でした。

つまり、疲れが極度にきてのシャクリだったらしいのです。校内伝道ですから、集回の回数は多いのですが、それだけでなく、夜を徹して相手講師の金子卯吉牧師と語りあかしたというのですからむちゃでした。金子牧師の頭の中は豊富ですが、こっちは絞り出すのですからたまりません。それに出かける前に一つなにか大仕事があって、そうとう疲れていたそうですし。

そんなこんなで予後を野間女史の衛生院に入院、文字通り皮をはぐようによくなってまいりました。見舞うたびに変わっていました。

「さア、いよいよ、結婚式」

と、みなが考え出しました。言い出しました。

しかし、わたしは承知しません。どうしたときかれても、釈明するさえいやなのです。あの敏の枕頭できいた木村牧師のことばが、心臓に突きささったままなのです。それで、「一年間は結婚しません」と言いはりました。一年たてば自然に木村牧師のことばが蹴とばせると考えたのでした。

が、長谷川の母、わたしの母、米沢牧師夫妻（これは神戸教会を会場におかりする関係上、式のときに仲介の労をお願いしてありました）などが、しきりに、わたしの主張を解こうとつとめ、木村牧師も、

「きみ、ああでもいわなきゃ、きみがひっこまないじゃないか。怒るなよ、ぼくだって、これでも苦労人なんだよ。ぼくはきみを助けたかったのだ……」

と和解につとめてくださいます。もちろんそれでも解けてはいませんでしたが、とうとう一年を折半して、六ヵ月でがまんをして、二月の一二日に挙式いたしました。

新婚旅行は普断着にかえて、神戸教会の前から雲内教会の前まで、ふたりで菓子折をさげて市電でゆられて帰った、それがそうだったのでした。

朝日新聞の村上氏に電車で出会い、「ご結婚式はいつでしたかネ」「いましがただったのです」「エ？」てな珍問答をしつつ。

こんなふうで、わたしたちは、ホームインの入口で相当ごたついたものですから、これがアクヌキにでもなったのか、せっかく、西尾幸太郎牧師から、「大いにけんかしろ」との祝辞をいただいていたにもかかわらず、あまりけんかの味を知らずに四十何年を過ごしました。

これはふたりが伝道者であったからでもありましょうが、ひっかかりやすい時代を、ふたりが、かたみがわりに、伝道旅行に出かけていましたので、たまの出会いがたいせつだったからかもしれません。

しかし、彼はわたしにとってはよいブレーキでした。わたしが服を着出したときは「いっしょに歩かない」と申しました。でも歩きました。牧師になりたい願いを十年間もちつづけて、十年間、「やめておけ」といわれつづけました。しかし、按手礼をうけたときにいちばんよろこんでくれたのは彼でした。浜教会の設立には大反対でした。でも召される二日前にも、わたしのある報告をきいて「それは大きなことだったネ」と喜んでくれました。

彼はものの位置をかえるのがキライでしたので、かえ好きのわたしは機会をつかむのに苦労しました。今は、その気がねがいらなくなったのですが、好きキライをこえて、なにもかもそのままでといった思いで、ポツンとしています。そうして、ひとさまの死後の営みに幾度か仕えた牧師としての心が、いかにピンボケだったかを、しきりにかえりみています。

（日基教団芦屋浜教会牧師）

# わたしたちが結婚するまで

長谷川初音

このごろ、しきりに、わたしたちの結婚事情を聞かれますので、「これはどうも」と思ってますやさきに、また編集氏からのこの課題、このぶんでは、いつか一度は白状しなければならないらしいと、覚悟をきめましてペンをとりました。しかしながら面伏です。

姫路の日ノ本女学校が認可をとるのに、なにがなんでも、わたしがいると、わたしにはびっくりもさせない、考えもさせない、という強引さで呼びかけられ、とうとう公立の学校に籍もおいたままで、お役人さまがたがみえる一日前という日に、すべりこみセーフしたのが大正五年のお正月。

ソンナですから、おちつくようになれば、わたしの教会の籍は綿町のバプテスト教会と学校ではきめて、S・Sの女学生の組のふりあても予定されていました。

ところがちょっとのぞいてみた組合教会は無牧のうえに会員が一〇人未満、会堂は痛み切ってガタガタ。こんなのを見ますと、どうも心をひかれます。とうとう、そのガタガタの二階で風の吹く日は、ユラユラとゆられて暮す身になってしまいました。自称自任の婦人伝道師であります。学校には悪い教師でした。

そのころの敵は雲内教会を牧してましたが兵庫部会の幹事だか小使だかをうけたまわってましたので、ときどき、この無牧教会を応援に来ました。彼だけではありません、かわりあって田中免毛、今泉真幸などという先生も来てくださいました。そういうときは自然、わたしは接待係であり、コックであり、司会者でありということになりますから、親しくなります。しかし、どなたともそうなので、敵に特別どうということはありませんでした。

いや、そのころのわたしは、牧師になりたいの思いでいっぱいでした。二年ほど前からそういう思いがきざし出して、このころがもっともえさかっていたのでした。

大正六年の五月、日ノ本学園に来て二度目の誕生日を迎えようというとき、わたしは一つのプランをもちました。

というのは、昨年の五月一五日、わたしは生徒さんたちにねごみをおそわれたのでした。愛のこもった美しいコーラスで起されたのです。それだけではありません。出る教室出る教室で、ハッピー・バースデー・ツー・ユーを歌ってもらったのです。そうして宿に帰ってみると、床の間を美しく飾って可愛らしい贈り物がいろいろと並んでいるのでした。ほんとうに感激しました。公立の学校にいては思いもかけないことです。

それで、今年はひとつ先まわりをして、なにか献げたいと思いました。あれこれと考えをめぐらせていますうちに、献げる相手が校門を出てしまいまして、姫路全市の子供さんをよろこばせてみたくなったのでした。

さいわいにそのときの舎監、高田郁子女史（のちの西尾幸太郎夫人）のお誕生日も同月同日なのです。協力してくださることになりました。舎生は全員手伝ってくれます。

あっちへ、こっちへと走りまわり飛びまわり、小学校へ、市役所へ、警察へと思いがけないやっかいなこともありましたが、しかし、万事好調好調です。

五月一五日は毎年好天ですが、この日の空は特別に澄んでいました。姫山公園はいっぱいの子供子供です。

お話は西阪保次先生。マイクのない時代です。ご迷惑でした。高田女史はお菓子や飲みものに気をつけて、その、のどに奉仕していてはくださいましたけれど……。

会がすむと旗行進です。赤地に白で、「神は愛なり」と出した三角旗の行列が全市に流れて行きます。その日に教えた「さんびか」を歌いながら、デモなどということも知らなかったのですが、今から考えればあれはたしかに教会学校のデモでした。

ところで、問題はその旗なのですが、少し前に神戸でS・S大会があったとき、わたしはその旗を見て来たのでした。それで、その旗の注文万端を、そのときの世話人であった敬に頼んだのでした。「前と同じのを」といって。

彼は、こころよく引きうけてくれました。なんら批判的態度もなかったのでしたが、旗代の領収書を送ってよこすときに、つい筆がすべったのでしょう。「女のクセにエライことを……」と書いてよこしたものです。

若かったわたしには、それがひどくひっかかりました。

お礼状が果たし状？になりました。そんなのがいったりきたり……だが妙なものです。それがいつのまにか愛の手紙に変わっていったのです。イヤ、どうも。

たぶん、そのあとだったでしょう。わたしは雲内教会の特別伝道に招かれました。安部清蔵、山口金作などという先生とごいっしょだったのですから光栄ものでした。

だいたい、雲内教会の会堂は、ちょっとした金持ちなら、あれくらいの客間はもっているだろう、と思われるような小さなものでしたから、それに人があふれたところで、しれたものだったのですが、姫路になれた目には、それでもはれがましい御川でした。

とにかく、これがわたしの雲内教会にふれた第一歩でした。あのころの可愛らしかった自分をいとおしみます。

あのころの敬はよく特伝を計画したものと、みえます。

あるとき、木村清松伝道をやりました。ちょうどそのころ、あの教会には婦人伝道師がいられて、それが病身だったので、敬はなにかにつけてよくいたわってあげていました。それが、木村牧師のお目にとまりました。木村牧師は単刀直入型の方です。夕食のとき、

「オイ、きみ、おれに世話をさせろ」

と出られました。（そうです。このへんは何度もきかされた敬のセリフです）

「ぼくは、伝道に来てもらったんだぜ、私生活にはさわらないでいてほしいナ」

「テレルなよ、わかってるよ、まかせろ」

「イヤ、ほんとうだ。ぼくにはあの人と結婚しようなんて意志は毛ほどもない」

「じゃ、ほかに意中の人があるのか、白状しろよ。のりかかった船だ、一肌ぬぐよ」

「ありがたいけれど意中の人なんかないよ。だが、タイプは考えている」

「どんなタイプだ。さがすよ」

「まア、いうなら、いま姫路の教会でガンバってるあの藤浦さんのようなタイプさ。この夏も、あの人はべんとう持ちで、一ヵ月の青島（チンタオ）伝道に出かけたりしたが…」

「ようし。ひきうけた」

「いけないよ、きみ。ぼくは、ああいうタイプ、どいってるので、藤浦さんとはいってはいないよ。ぼくのうちは……」

「いいよ、いいよ、まかしとけ、まかしとけ」

で、翌日、木村牧師は姫路へ飛んでみえたのでした。

「きみ、長谷川くん好きか？」

「……」

「長谷川くんとこへ行ってやらないか、長谷川くんは待ってるよ。牧師の家内はつらいがネ、しかし、いいこともあるよ、きみならも

神の自己犠牲的愛がむなしくなるであろう。わたしたちが「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして」神を愛せねばならないのは、ここにおいてである。この場合には、神を愛することがギリシャ思想におけるように自己獲得的でなく、自己犠牲的性格をもつのである。むしろ、自己犠牲な神の愛を証しすることが、神を愛することの内容となるのである。――神への愛はキリストへの奉仕という形で具体化される。「だれでもわたし（キリスト）についてきたいと思うなら、自分を捨て自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」（マタイによる福音書一六・二四）。神を愛し、キリストに奉仕することは、自己を得ることではなく、自己を捨てることである。「われわれのために神が最愛の独り子を棄てたもうたことを示されたからには、われわれはいっさいをささげてその神の愛を証しするために奉仕せねばならない。われわれの生命はその事以外のためにささげられてはならない。神の犠牲愛が如何なるものであるかを証しするために、われわれ自身が犠牲をささげることを、われわれは命ぜられている」（拙著『神』八八ページ）。「神の愛が犠牲の愛であることは、最愛の対象を奪い去られ、自己の幸福を棄てる人間によって始めて、証しされるからである。この証しの奉仕がなかったならば、神の愛の真相はついに人間に対して示されなかったであろう。そして人間は神の愛を犠牲なき愛として受け取ったであろう」（同九八ページ）。

さて、このようにしてわたしたちの場合にはギリシャ思想の場合と違って、神を愛することは自己獲得的ではなく自己犠牲的な性格をもっていることが明らかになった。しかし、ここでわたしたちは一つの重大な反省を迫られる段階に達したのである。それはやはり「犠牲」ということをめぐっての反省である。犠牲はエロースと区別されるアガペーの本質であり、これによって初めて真実の愛が保証され得た。しかしまた、犠牲ということには一つの問題性も指摘されるのである。それは犠牲に伴なう一つの矛盾的な性格である。これをわたしは従来「痛み」ということばで表現してきた。具体的にはキリストの十字架に結晶している。ところで問題とは、痛みのもつ矛盾的・逆説的性格が、「愛」の固有性と相容れないのではないかということである。愛の固有性とは、積極性であり、自然さであり、なだらかさである。このような性格をもつものであって初めて、「愛」の名に価する。あのギリシャ的なエロースが、さまざまの問題性をもつにもかかわらず、なお発言権を要求し得るのは、それが愛としての固有性をもっているからである。およそ自己獲得的な愛ほど、積極的で自然的でなだらかなものはないであろう。しかるに、アガペーが「自己犠牲」の痛みを本質としているかぎり、それは果してエロースに匹敵する積極性や自然さやなだらかさをもっていると言えるであろうか。もし愛の固有性をもたないならば、たといアガペーがどのように純粋であろうとも、真実に「愛」の名には価しなくなるであろう。このことは、人間に対する神の愛についても、また神に対する人間の愛についても、同時に当てはまることである。この愛が、たとい純粋であっても、愛の固有性を失っているなら、とうてい解決とはならないであろう。

この反省に対して、わたしが従来与えてきた解決の示唆は、神の「痛み」が直ちに神の「愛」になるということであった。（文語訳聖書で神が「痛む」と訳されているエレミヤ記三一・二〇が、口語訳聖書で神が「したう」と訳されていることは、この間の消息を示

すともいえよう)。聖書においては、自己犠牲的な痛みは同時に積極的な愛なのである。このことを最も明確に示しているのは、次のようなことばである、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」(ヨハネによる福音書三・一六)。ひとり子を賜わるということは、自己の最愛の対象を放棄することであるゆえに、固有の意味において自己犠牲であり痛みである。しかし神は、この自己犠牲の痛みにおいて世を愛したもうたのである。痛みは直ちに愛なのである。

このような「神の痛みに基礎づけられた愛」に対応して、神に対するわたしたちの愛もまた自己犠牲の痛みを突破して、積極的な愛へと展開せねばならない。ここにおいて、「神を愛する」ことはあのギリシャ的エロースに劣らない固有性をもつに至らねばならない。「自分を捨て、自分の十字架を負って」キリストに奉仕することは、自己犠牲の痛みをもって神を愛することであるが、しかしおよそ「神を愛する」というからには、愛の固有性たる積極性と自然さとなだらかさとが伴なわれていなければならないのである。そうでなければどうして「神を愛する」ということばが適用され得ようか。

しかし、注意深い読者ならすでに気づかれたであろうが、わたしたち人間の場合には神の場合と一つの点で決定的な相違がある。それは、わたしたちの場合には「痛み」が「愛」にまでならねばならないということばが使われることである。神の場合には「痛み」は直ちに「愛」であるけれども、わたしたち人間の場合には「痛み」は「愛」にまでならねばならないのである。自己犠牲の痛みが神に対する積極的な愛になるのは、わたしたち人間の場合にはあくまで命令の対象であり当為の課題である。このことは考えれば考えるほど矛盾したことである。なぜなら、およそ「命令」される「当為」は決して積極性や自然さやなだらかさをもち得ず、どうしても抵抗感を伴なうからである。積極的な愛にならねばならないと命令することは、すでにその積極性の破たんを意味している。

このように反省してくるとき、「神を愛する」ということは、宿命的に破たんすることが明らかになってくる。わたしたちがどうしても「神が愛する」という真理へとふたたび帰りゆかざるを得なくなるのは、このためである。わたしたちは自己犠牲の痛みをささげて神の痛みを証しし、それに奉仕し、かくすることによって神を愛しようとする。「喜ばしき自由なる思いをもって」(ルター)神を愛しようとする。しかし、この「愛」の思いはわたしたちの場合にはあくまで未完結であり、破たんに宿命づけられている。わたしたちの自己犠牲は、積極的な「愛」からふたたび逆説的・矛盾的な「痛み」へと引きもどされる。これはとりもなおさず、「神を愛する」ことが破れることを意味する。愛が破れることこそ、罪にほかならない。神に対するわたしたちの罪は、ここまで徹底するのである。

「神を愛する」ことの破たんを救うものは、「神が愛する」という福音以外にはない。しかもこの神の愛は、罪ある人間を救うものであるがゆえに、あくまで自己犠牲の痛みを本質とするのである。この福音にささえられつつ、わたしたちはこの福音を証しすべく、「神を愛する」ことへむかっていで立つのである。

(東京神学大学教授)

れたのである。

アリストテレスもこの点ではプラトンの思想を受けつぎ、かつこれを発展させた。エロースが梯子をのぼりつめ、神に到達するとき、それは究極目標に到達したわけであるから、それ以上のぼりゆく必要はなくなり、エロースの運動は停止して、静止にはいる。これ以後は、運動ではなくして、観想が始まる。観想こそ究極の境地である。——したがって、すでに最高段階に位する神は、もはや何ものをも追い求める必要はなく、ただ静止して、自己に視入る観想をなすだけである。神は、自己以外のすべてのものを自己へむかって動かすけれども、自己自身は決して動かないものである。言いかえれば、神はすべてのものから愛されるけれども、何ものをも愛しないのである。なぜなら、ギリシャ的な意味では、およそ「愛する」ということは、なんらか欠乏しているものについてのみ当てはまるのに、神はすでにすべての価値の総括として、すべてのものを所有しており、したがって他の何ものをも求める必要がないからである。「神を愛する」ことは当然であるが、「神が愛する」ということは不合理なことである。ギリシャ思想においては、「神を愛する」ことは成り立つけれども、「神が愛する」ということは成り立たない。

さて、わたしたちはここで立ちとどまって、「神を愛する」ことがギリシャ的に理解されるとき、一つの特質が生まれることを指摘しておきたい。それは、犠牲を伴なわないということである。エロースは「貧」から「富」へむかって向上してゆくのであるから、これは獲得であって放棄ではない。神は最高価値として「富」の究極であり、その神を愛することは自己獲得であって自己放棄ではない。神を愛する人間の愛が獲得であって放棄でないように、神自身もまた決して放棄や犠牲を企てない。すでに富んでいる神は、その富を享楽するだけであって、決してその富を放棄して貧しくなることはない。——神がこのようであれば、これに応じて人間もまた同じ精神によって導かれるのである。犠牲をはらわないとき、愛はどうしても虚偽となる。エロースにとっては、他者愛も実は自己愛の変装である。虚偽の愛とは、他者愛の変装をした自己愛である。そのとき、他者は自己にとっての手段として利用されているにすぎない。手段として利用された人間は、このようなことをした相手の人間を、ゆるしがたいものと考えるであろう。「ゆるしがたい」という判断こそ、罪としての判断である。エロースの世界においては、たとえ「神を愛する」ということが登場しても結局罪は解決されないのである。

## 二

イエス・キリストの福音は、このようなギリシャ思想の支配していた世界のただなかに突入してきたのである。これがアガペーの愛である。そこでは、「神を愛する」のでなく、「神が愛する」ということが起こったのである。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」（第一ヨハネ四・一〇）。ここで明確に「神が愛する」という音ずれが語り出されている。これは文字通り、ギリシャ人には愚かなものである（第一コリント一・二三）。ギリシャ人にとって「神を愛する」ことは合理的であるが、「神が愛する」ことは不合理的だか

らである。しかし、愚かさはここにはとどまらない。すでに引用されたことばにおいて、神は人間を愛するために「御子をおつかわしになった」としるされている。御子は父なる神にとっては最も価値ある対象である。その御子を放棄したもうたということは、父なる神にとってはまさに自己犠牲であったのである。なぜこの自己犠牲がはらわれたのであろうか。それは、神が愛したもうた相手が、罪人という無価値・反価値的な存在だったからである。有価値的存在を愛することは、自己獲得的であって自己犠牲的ではない。しかし相手の価値に依存しないで、相手自身のために相手を愛するとき、愛は自己犠牲を本質とするに至るのである。キリストにおいて示された神の愛は、このような愛であった。それはギリシャ思想にとっては愚かであるが、「召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシャ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである」（第一コリント一・二四）。

しかし、さらに決定的な真理は次のようなことばの中に示されている、——

「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（第二コリント八・九）。

ここでは、プラトンがエロースの説明に際して用いた「富」と「貧」ということばが用いられている。しかし、キリストのアガペーにおいては、エロースと逆のことが生起したのである。エロースは貧しくあったのに富を追い求めた。アガペーは富んでいたのに貧しさを目ざした。あの「愚かさ」ということばは、ここにおいてこそ妥当するであろう。貧しい相手を富む者にするために、自己自身富んでいたのにあえて貧しい者となることほど、ギリシャ人の知恵から見て愚かなことはないであろう。しかし、「キリストの恵み」とはこのようなものなのである。驚天動地とはこのことである。奇跡といって、これ以上の奇跡はないであろう。わたしたちが救われるということは、このような意味において「富む者」とされることである。

しかし、わたしたちがどうしても忘れてならないのは、わたしたちが救われて「富む者」とされるのが「彼の貧しさ」によってであるという一事である。この一事は、たとえ天地が崩れ去っても、むなしくされてはならない。わたしたちはこの一事を証しするために生きているのである。このように生きることこそ、キリストを愛すること、すなわち、神を愛することである。ここで始めてわたしたちは厳密な意味において、「神を愛する」ということばを用いるのである。「厳密な意味において」ということは、パウロが反省したようなギリシャ思想との対決を通過した上で、ということである。これを通過した上でならば、わたしたちは「神を愛する」ことを真剣に志さねばならないのである。実に、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして」、主なる神を愛せねばならないのである。

しかし、このことは具体的にはどのようなことを意味するであろうか。神の愛の自己犠牲的性格を証しすることである。「証しする」ということは、人間を超越している神の真理をば、人間に内在していることがらを通して示すことである。これが「証し人」の意義である。この証し人が立てられなければ、超越的な神の真理はついに人間にとって理解不可能なものとなるであろう。これではふたたび

# 「神を愛する」ということ

北森嘉蔵

## 一

「神を愛する」という主題は、考えれば考えるほど複雑微妙な消息を感じさせる。なぜなら、この主題はいっぽうではキリスト教的にいってきわめて「自明的」なことであるにもかかわらず、他方ではなかなか自明的でないところがあるからである。そのことを端的に示しているのは、次のような事実である。——

イエスは最大のいましめとして次の二つのものを挙げている、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」。「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」。（マタイによる福音書二二・三七、三八）。——ここでは明確に「神を愛する」ことが命じられている。その限りにおいて、この主題には、いちおう自明的なことといえよう。——ところが、不思議なことがあるのである。イエスに対してそれほど思実であった使徒パウロが、一律法の全体はこの一句につきる」として、総括的に示しているいましめは、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」だけであって、あの「神を愛せよ」といういましめは脱落しているのである。（ガラテヤ人への手紙五・一四）これはどういうことであろうか。パウロの軽卒から出た手落ちだろうか。パウロほどの人が、そういうことをするはずはなかろう。それなら、イエスに対する意識的な反抗だろうか。「使徒」パウロが「主」イエスに対して、反抗するはずはあるまい。そうすると、パウロはよくよく考えた上で最も妥当

なことにして、「神への愛」を脱落させたに違いないということになる。ここに、イエスに対する神学者パウロの相違点がある。「神学者」とは、福音について厳密な反省を使命づけられている人間のことである。パウロはおそらく世界最初の、しかも世界最大の神学者であった。「神を愛する」ということをめぐっては、イエスは(救い主キリストとしてのことは今いちおう保留して)、虚心に無邪気に生きたが、しかし、パウロはこのことを厳密に反省する使命を自覚したに違いない。その結果、いましめの中から「神を愛する」ことを脱落させて、「隣人を愛する」ことだけ残したのである。それではなにゆえに、「神を愛する」ことには厳密な反省が加えられる必要があるのだろうか。そして反省の結果、脱落させられる必要があるのだろうか。

要点は、福音がギリシャ思想と対決しなければならなかったところにある。「神を愛する」という同じ表現と概念が、ギリシャ思想においては福音とは真正面から対立する本質をもっていたのである。かくして、福音の宣教者たるパウロにとっては、「神を愛する」ことは、もはや自明的ではあり得なくなったのである。むしろ、ギリシャ的な意味での「神を愛する」ことへむかって、対決の姿勢をとらざるを得なくなったのである。それでは、ギリシャ思想における「神への愛」は、どのような問題性をもっていたのであろうか。一言でいえば、それは典型的にエロースの性格をもっていたのである。エロースとは、相手を相手そのもののために愛するのでなく、相手を自己のために愛することである。言いかえれば、相手のもつ価値を愛することである。価値を愛することが、自己愛の変装になるのは価値がつねに自己にとっての価値だからである。――パウロの宣べ伝えねばならなかったキリストの福音が、アガペーを本質としていた限り、ギリシャ的エロースに対決を迫られたのは当然である。アガペーとは、相手を自己のためにでなく、相手を相手のために愛することである。相手の価値に依存しない愛である。――ところで、ギリシャ思想においては、「神を愛する」ことが典型的にエロースの動機によって考えられていたのである。ここに複雑微妙な消息が生じてくるのである。

プラトンからアリストテレスに至る線では、「神を愛する」ことは次のように考えられていた。プラトンによれば、エロースは富(ポロス)を父とし貧(ペニア)を母として生まれた子である。「富」の子であるかぎりでは、エロースは富んでいるべきはずであるが、「貧」の子であるかぎりでは、エロースは現実には富んでいない。この中間的存在からして、エロースは絶えず追い求めるという性格をもってくる。何を追い求めるのか。自分を現実に富ませてくれるもの、すなわち価値あるものを追い求めるのである。美しいものとか善いものとかである。しかも、その価値には低いものから高いものへとさまざまの段階があるので、エロースはちょうど梯子をのぼるように、低い価値からさらに高い価値へとのぼってゆく。これがプラトンのいわゆる「愛の梯子」である。そして決定的に重要なことは、この価値の階段の最高位に神がおかれることである。神は最高の価値である。したがって、神こそ人間によって最も愛されるに価するものである。神を愛することこそ、「貧」の子たるエロースが現実に「富」を獲得する道である。したがって、神を愛することは当然のことであり、最も自然的なことである。――このようにして、「神を愛する」ことは、徹底的にエロースの道に従って考えら

〈思いと祈り〉

# 上にあるもの

シュラッター
井上良雄訳

汝ら上にあるものを思い、地にあるものを思うな。汝らは死にたる者にして、その生命はキリストと共に神の中に隠れあればなり。

（コロサイ三・二、三）

上にはわれらの父がいまし、われらの主がいまし、神とのまったき交わりによって生まれるものが存在する。下のこの地上には、自然がわたしに与えるもの、すなわちわれわれの肉体とその衝動が存在し、さまざまの従属関係と服従の義務をともなった人間的交わりが存在する。そして、それらさまざまの力から解放されるためには、死が必要である。なぜかと言えば、それらの力は、単に外側からわたしを動かすのではなくて、わたしの生命の根底においてわたしを捕えているからである。わたしは、それらの力を自分から棄て去って、それらの力なしに生き続けることはできない。わたしがそれらの力から解放されるのは、わたしの現在の生命が終りを告げることによってだけである。

そのような終りは、わたしがイエスのものとなることによって、わたしのために用意されている。それが、地がわたしに与えるすべてのものからわたしの欲望を引き離してくれる力である。そのような死は、決して損失ではなく、神の報復的な怒りの結果というようなものではない。そうではなくて、そのような死こそ、わたしに生命を与えるものである。この生命は、キリストがそのみもとにいます神の中に存在する。それゆえに、それはまた隠されていて、わたしの身においては目に見えず、わたしのからだとわたしの地上の境遇の中に働いてはいない。それがわたし自身のものであるのは、キリストが生きていまして、その救主としての務めをわたしに対して行ない、その交わりをわたしに与えたもうからである。したがって、わたしはこの生命の栄光を、自分自身の経験を通して立証することはできず、自分自身の行状を通して他の人々に示すことはできない。わたしがそれを示すことができるのは、キリストがわれわれの生命であるゆえに彼を指し示すということによってだけである。

しかし、この生命は神のみもとに隠されているのであるから、確実な場所に安全に保護されているのである。それゆえに、もはや恐れはなく、疑いもない。今や必要なのは、ただ一つのことだけである。すなわち、わたしが上を見上げること。下だけを見ないこと。自分の信仰を地上に固着させないこと。父のみもとにいますあのかたに固着させること。——

生ける御神よ。わたしは生命を追い求めます。死にゆくわたしども——地を故郷とするわたしどものために、あなたは生命をみもとに用意してくださいました。しかし、あなたがわたしを地上に置きたもうのは、上にあるものをわたしに拒みたもうからではありません。どうか、わたしの目を上に向けて注ぎ、覆われぬ顔を上に向けさせてください。アーメン。

# 生と死

もはやわれ生くるにあらず、キリストわがうちにありて生くるなり。今われ肉体にありて生くるは、われを愛してわがためにおのが身をすて給いし神の子を信ずるによりて生くるなり。

（ガラテヤ書二・二〇）

パウロは、自分自身について、二つのことを語った。すなわち、自分は死んでいるということと、自分は生きているということと。彼が死んだのは、律法によってである。彼は律法に対して罪を犯したのである。また、彼が死んだのは、イエスが罪人である彼のために忍びたもうた十字架によってである。しかし、パウロは、律法と十字架のそのような審く力を、生命に至らしめるものとして経験した。彼は、自分の生命の根底を、キリストが生きたもうという事実の中に発見する。彼は、自分の生命を、死んだ者である彼自身の存在や行為から引き出しはしない。彼は、キリストが単にご自身のためにだけ生命の栄光化に達したもうたのではないということを知っている。われわれをも、ご自身の生命によって造られたもの、またそれを証しするものとしたもうということを知っている。

イエスは神のみもとにいまして神の姿と栄光を持ちたまい、われわれはそれに反して自然の中にあり、自然が与えてくれる姿を持っているのに、どうしてそのようなことが起り得るのであろうか。したがってわれわれは肉であり、朽ちゆく肉であるのに、どうしてイエスの生命がわたしの中に働くことができるのであろうか。パウロは次のように言う。もちろんわたしは肉の中に生きているが、そのことはわたしをキリストから分かちはしない。なぜかと言えば、肉の中に生きているわたしをキリストに結びつけ、彼の生命をわたしの中に働かせる一つのきずなが存在しているからである。それは信仰である。信仰によって、わたしは、自分の地上的な姿にもかかわらず、彼がわたしの中に生きていますということを知る。なぜかと言えば、わたしは自分の信仰を彼から与えられたのであり、彼に由来するものは生命だからである。

しかしわたしは、自分の信仰の根拠を持っているだろうか。パウロは言う。信仰の根拠はイエスの愛の中にある。死によって証しせられた神の御子の愛の中にある。彼により頼む固い信仰は、この愛の上に建てられる。わたしはイエスの生命を、もちろん今はまだ見ない。しかし、わたしは彼の愛を見る。なぜかと言えば、彼はわたしのためにご自身をささげたもうたからである。それゆえに、わたしは信じるのである。

聖なる御神よ。あなたが殺したもうわたしの内部にあるものは、死なければなりません。なぜかと言えば、それはわたしから生命を奪いとるからです。あなたはわたしどもの人間的存在を死に渡したまいます。それは、あなたがわたしどものために生命を用意したもうたからです。主キリストよ。死から生命が生まれる様を、わたしはあなたにおいて見ます。それを見るのは、わたし自身の身の上においてではありません。しかし、あなたは、わたしどもをみもとに引き上げたまいます。わたしどもが自分自身の中に見出す、すべてのものをこえて、引き上げたまいます。そして「わたしを見よ。わたしを信ぜよ。わたしは汝らのために死ねる者、そして汝らのために生ける者」と語りたまいます。それゆえに、わたしは次のように乞いねがうことができます。どうかあなたの死の力にならせ、あなたの生命の力にならせてください、と。アーメン。

一九節に「寄留者」ということばが出てきますが、この寄留者と旅の家とはおなじ語源であり、住まう所は寄留者と住まう所ということになりましょう。そしてこの寄留者というのは、いなかから東京に一年なり半年なり一時的に寄留しているというのではなく、二〇年、三〇年、あるいは一生涯、否、孫子の代までそこに寄留している。しかしいつまでたってもいわゆるよそ者であって、その土地の市民権をもたぬ者という意味です。イスラエルはエジプトにあって、まさにこの寄留者でありました。彼らはのちバビロンに捕えられて行きましたが、そこでもまた寄留者であったのです。

ヘブル人への手紙には、信仰者は「地上では旅人であり、寄留者である」といっていますが（一一ノ一三）、旧約の信仰者にとっては、エジプトやバビロンはもちろんのこと、彼らの故国ともいうべきカナンさえも、やはり寄留地であったのであり、永遠の住家ではなかった。永遠の住家は実に天国にある。イエス・キリストを信ずる信仰者もこの点においては旧約の先祖たちと変わりがない。われわれが神の用意された「都」にたどりつくまで、この地上は仮のやどりにしかすぎないというのです。

要するに人生は旅である。地上にはわれわれがほんとうに落ちつき得る場所をもたない。またもつべきではないというのが聖書の説く人生です。旧約の民であるイスラエルの歴史は、旅に始まって旅に終ったと称してよいであろう。先祖アブラハムは神の召をうけてカルデヤのウル（古代バビロンの都市）からパレスチナにやって来た。彼の孫ヤコブの代には、ヘブル人は饑饉に追われてエジプトに下って行った。それから、また四百年を経てエジプトを出で、シナイの荒野を放浪したのち、ヨルダン河を渡ってカナンに侵入したということになっています。そして、古代のヘブル人はカナンに定着するまでだいたい遊牧の民であったのであるから、彼らはその家畜をつれ、甲の地点から乙の地点にまで、牧草を求めて移動しなければならない。彼らの住まいも木や石で建てた家屋ではなく、すぐ折りたたんで持ち運ぶ天幕です。そのような活動的な古代ヘブル人の生活の中に始まった彼らの宗教が、「旅」の性格を強く持っていたということは容易にうなずけることであります。彼らが自由というものを精神的にも生活的にも激しく求めたということもそこに原因するものでありましょう。

またヘブル人の宗教が行動的であり停滞的でなかったということも旅ということに関係がありはしないか、むずかしく言えばヘブル人のものの考え方が時間的であって、空間的でない、主体的であって、観想的でないということもそういうところからきているのでありましょう。

旅は厳しいものであり、ことに交通の不便な大昔の旅は決して物見遊山の楽しい快いものではない。エジプトを出たヘブル人が砂漠の生活の窮乏に耐えかね、エジプトには「肉の鍋」があったといって、モーセにその苦痛と不満とを強く訴えたということも無理からぬことであります。砂漠には精神の自由はある、しかし生活の豊かさはない。日本でも「旅はうきものつらいもの」というではありませんか。

## 三

さて、そういう旅において神の律法が詩人の歌となるというのはどういうことなのか。まじめに考えれば、人生というものは決して春の野を行くような朗かな楽しいものではない。そういうこともたまにはないとは言えないが、疑いがあり、不安が

あり、争いがあり、戦いがあり、憎しみがあり、醜さがあり、むなしさがある。大げさにいえば、ただひとり荒野を旅する孤独と寂寥とが影の形にそうごとくわれわれの一生につきまとっています。そのうえ、神の命令としての律法を背おって生きて行かねばならぬということは、とうていやり切れぬ荷やっかいなように思われます。

しかし苦しみあればこそ喜びもあるのではないか。苦しみがなければ喜びがあっても、それは喜びとは感ぜられないでしょう。あるユダヤ人の学者が、人生というものはただ生活とか生命とかということだけではない。生活ないし生命プラス命令である。ユダヤ教の立場はそこにあるといっていますが、キリスト教の場合もまた同様です。

人間の生活はただ食べて飲んで寝るというだけではない。それでは人間と動物となんの異なるところもない。人間は神の命令を背負って生きている。神の命令とはなんであるか、それを一つ一つの場合に、具体的にはっきりさせることはなかなかむずかしいことでしょうが、とにかく神の命令、その意志にしたがって生きる、そこに神を信ずる者の生きがいある、生涯があるのだということになりましょう。

そういうところにわれわれの覚悟をしっかりきめて、人生の、ときには明るいが多くは暗い旅路を続けるとき、思わない力と助けとが与えられ、楽しみと喜びに満たされる。ですから詩人も「わたしの望みはあなたのおきてにあるからです」と歌っています(一一九ノ四三)。荒野や砂原を旅する旅行者はただ一眸(ぼう)のみわたすかぎりただ砂原だけではない。思いもうけざるところにオアシスがあり、そこには清らかにして豊かな水があふれるように吹き出で、草木が青々と繁っている。砂漠には必ずこのようなオアシスがある。

砂原だけを見て、オアシスに気づかないのではどんなに忠実に神の律法を守り行なっても、それは「歌」とはならぬでしょう。歌はやはり、楽しく、喜ばしくなければならない。哀歌、悲歌というものもありますが、しかしそれを歌うことによって、やはり慰められ励まされるわけです。悲しみが悲しみだけで終ってしまうならば歌をうたうこともない。ここに「旅の家の歌」とある。この歌の原意は、琴のような楽器を伴奏としてうたう歌という意味です。声高らかに感激と力とをもってうたう歌をいうのでありましょう。

最初に律法のないところに福音は意味をなさないと申しました。もし律法の生活を砂漠の旅にたとえるならば、福音はその砂漠の中のオアシスとも言えるのではないか。エジプトを出たイスラエル人が、カナンに到達するためには、どうしてもシナイの荒野を通らねばならなかった。この地上の生活をはなれては天国はありえない。地上の生活は、それ自身最後の目的ではないかもしれぬが、そこを通りぬけなくては天国にはいることは許されていません。

そうであるためには、ぜひともオアシスが必要です。オアシスがどこにあるか、かわいたのどをうるおすべき泉、烈日の光と熱とから身をかくすべき涼しき木陰、そこにしばし憩うことによって、さらに激しい旅をつづけ、目的地に到達する行動がふたたび始められます。このような意味において「あなたの定めはわが旅の家でわたしの歌となら」なければなりません。

(青山学院大学・日本聖書神学校教授・美竹教会牧師)

伝道説教

# 人生は旅である

浅野順一

――あなたの定めはわが旅の家で
わたしの歌となりました。詩篇一一九ノ五四――

## 一

旧約の詩篇には律法を歌ったいくつかの歌があります（一、一九、一一九篇）。そのうち一一九篇は最も長いものであって、それは詩篇の中でもいちばん長い歌であります。この歌はイロハ歌であり、原文では八行ずつ一組、二二組からなっており、その一組の毎行の頭字がイの組ならイの字、ロの組ならロから始まっているのであって、形式的にたいへん整えられた詩であります。この詩があまり形式的に整いすぎているため、全体が単調であり、内容の繰返しも多く、ときには退屈さえも感ずるほどです。しかし、ところどころたいへん美しい、また含蓄の深いことばにぶつかることもあります。有名な「あなたのみことばはわが足のともしび、わが道の光です」というなどはその一つでしょう。（一一九ノ一〇五）

この詩の最初に律法が「おきて」「あかし」「さとし」「定め」「戒め」などいろいろ違ったことばで言い表わされていますが、結局おなじものを指しています。そしてこの詩人の律法に対する敬虔な態度がよく歌われています。

いったい、「律法」とはどういうものなのでしょうか。われわれはすぐ律法をさかさにして法律として受取りがちです。しかし旧約の律法はわれわれの考えるような条文的な法律なのでしょうか。そういう意味で旧約は律法であり、新約は福音だと考えるならば、それはとんだあやまりだといわなければならぬでしょう。一一九篇の詩人も「わたしはもろもろのたからを喜ぶように、あなたのあかしの道を喜びます」と歌っているのですが（一四節）、もし「あかし」すなわち律法が法律の条文のようなものなら、どうしてこのような喜びが出てくるでしょう。

そもそも、旧約でも新約でもそれはことばそのものが表わしているように契約の宗教です。そして契約ということは、旧約でいえば神エホバと民イスラエル、新約でいえば救主イエス・キリストと、その体である教会との間の特別な関係を法的に示したものであり、したがって、その契約と律法とは切りはなせぬ関係にあります。

律法は人間に対する神の信仰的道徳的、ときには儀式的な命

令であり、イスラエルが神の民であり、教会がイエス・キリストの体であるためには、どうしても守り行なわねばならぬものです。そのことなくしては、イスラエルは律法の民であり得ず、教会は主の体であることができません。

福音ということも、この律法を離れては成り立ちがたいことです。福音なくして律法の真の意味はわかりませんが、同時に律法を離れては福音は無意味であります。福音と律法とはいわば相互緊張の関係にあります。律法の意味に徹せずしてすぐ福音に飛びつこうとしても、それは無理だといわなければならぬでしょう。福音ということを聖書の中で最も徹底的に説いているパウロが、律法の問題に苦しみぬいたのもそのためだということができます。これは宗教改革者ルターの場合でも同様でした。

さてわれわれ日本人にわかりにくいものは、この律法です。いま、福音ということを神の愛ということばにおきかえ、律法を神の義におきかえてみるとします。神の愛はありがたくいただくが、神の義はごめんこうむると考えるならば、その愛はなんと無意味な浅薄なものになることでしょう。

そもそも「義」ということは黒と白、正と不正、善と悪を分ける働きであり、「愛」ということは、そのように分かれたものをふたたび一つにまとめる力だと言ってよい。キリスト教の信仰は、善いことも悪いことも無差別にいっさい平等で飲み込んでしまうこと、なにごともマアマアといって腹の中に納めてしまうことを許さない宗教です。イエス・キリストの十字架はもちろん、神の愛の現われであるが、またその義の現われでもある。イエス・キリストが神に逆らう人間の罪を背負い、人間に代わってその罪のさばきを神の前に受けた、それが十字架であります。「さばき」ということは善と悪とを分けることであり、義とおなじ働きです。聖書の神は愛であるとともに義の神であるから、そこにさばきが出てくることは当然です。しかし、聖書の神はまた愛の神であるので、さばいた者をそのままでは捨ておかず、もし心から自分の罪を悔いるならばそれを必ず救い上げる。詩篇に「あなた（神）は悔いし、砕けた魂をすておかれない」と歌われているとおりです。その意味ではキリストの十字架は、たしかに罪人にたいする神の赦しと救いをはっきり示したものといえましょう。

ついでですが「契約」ということばは法律用語であり、律法と不可分であって、そのかぎりにおいては神の義としっかり結びついています。しかし契約はまた神の救いの約束であり、それは神の愛を示しているものであります。モーセの十戒のごとき、旧約の律法の代表的なものといえますが、その前文には、イスラエルを奴隷の国エジプトから救い出した者はほかならぬエホバである。そのエホバが、これこれのことをその民が今後守り行なうべきものとして命ずるという意味のことが記されています（出エジプト記二〇ノ一―二）。

## 二

さて前おきがたいへん長くなりましたが、詩篇一一九篇の詩人は「あなたの定め（すなわち律法）はわが旅の家でわたしの歌となりました」と歌っているが、それはどういう意味でしょうか。

そのことにはいる前に、少しことばの説明をしておきましょう。「旅の家」というのは、原語ではただ一語で住まう所という意味です。それならばだれが住まう所か、おなじ一一九篇の

# 目をあげて見る

池田　鮮（あらえ）

小さいときのことである。それがどこのおばあさんであったのか、いっさい覚えていない。

尋常六年生まで住んでいた北海道の東端Nという所は、ごたぶんにもれず港町らしく坂の多いところであったが、そのおばあさんは、その日、坂の上から下へと歩いてきたのである。わたしは坂の途中にある自宅の前に立っていた。澄み切った日であったから、秋口ではなかったかと思う。というのは、このあたりは南から張り出してきた黒潮が、親潮とぶつかって初夏から真夏にかけて猛烈なガスがかかって、真昼でも一メートル先は乳色の中に閉ざされ、世界は自分ひとりになってしまう。それに雨のようにからだを濡らすので、真夏でもオーバーやマントと称するものを着なければならなかった。

さて、その日は寒くなく、うらうらに晴れていた。他に人通りもないこの坂道を上から下へと、そのおばあさんは歩いてきた。わたしはじっと見ていた。特別、なにか起こるような気配もない静かな暖かなムードがあたりを支配していた。すると、少しあごを前方に出すようなかっこうで歩いてきた彼女が、ちょっと立ちどまったのである。それはちょうど偶然というか、幸運というか、わたしより三メートルほど離れた所であった。おばあさんは立ちどまって、顔をもう一段上にあげると両手を目にもっていった。そして、親指と人指し指とで両のまぶたを開いて、前方を見渡して、方向を確かめると手を下ろし、また歩きはじめたのである。

この奇妙な動作にわたしはすっかりどぎもを抜かれ、おばあさんの後姿が坂をおりてしばらく行って曲り、見えなくなるまで、じっと見送ったのである。確かにもう一度おばあさんは立ちどまった。そしてもう一度、同じ動作をくりかえした。そしてやがて視界から消えた。やがてわたしは自分で目を一ぺん閉じて、おばあさんがしたようにまぶたを二本の指で上下に押し開けて見た。するといつも見なれている向かいのKという寺の風景が、何か新しいもののように飛びこんできた。それっきりそのまぶたの長いおばあさんのことは忘れてしまった。

ところがさい銭箱にレプタ二つを入れる寡婦の記事（ルカ伝二一章）にいたって、このことを忽然と思い起こした。そしてついでに羽仁もと子先生を思い出したのだが。「イエスは目を上げて、金持たちがさい銭箱に献金を投げ入れるのを見られ……」というのが書き出しである。目をあげて見られたというのがその問題点である。普通の日本語では、「イエスは金持たちがさい銭箱に献金を投げ込むのを見ておられたが……」というところを、「目をあげて見て、おられた」というのである。おばあさんも、方向を見さだめる前に、目をあげて、そして見た。さらにおばあさんは念入りだったが確かに目をあげて見たのである。

少し気をつけて読んでみると聖書には、この種の表現がきわめて多い。「目をあげて畑を見なさい」収穫のときがせまっている。マリヤが墓に行って「目をあげて見ると」天使が立っていた。そのほか旧約ではもっと多い。たとえば、ヨブが灰の中に坐していると友人がやってくる。「彼らは目をあげて遠方から（ヨブを）見たが」見わけがつかなかったなど。

つまりこれはユダヤ的表現なので、われわれが一動作で見るとか、言うとかいい表わすのを二動作に言うのだろう。「見る」は「目を上げて見る」。有名な山上の垂訓にも「イエス、口を開き……教えて言われた」。日本式に「イエス教えたもうた」ではすまされない。「口を開」かねば言えないじゃないかなどの理屈は通用しない。これがユダヤ的具体性というものであろうか。まわりくどいことである。あるいはヘブル人のまぶたが長すぎるのか。

（日本YMCA同盟総主事）

## アシジに聖跡をたずねて

菅　支那子

去る一月中旬の一週間にわたり、ローマで開かれた第十回国際社会事業会議と、この大会を中心として、その前後に開かれたわたくしの関係する二つの国際会議に

出席するため、クリスマス前夜から一月末にかけて、主にローマに滞在して、心ゆくばかり見物する機会を得た。

会議終了の翌日、冬のイタリヤとしてはまれにみる天気清朗な朝、イタリヤ観光会社の組織するバス旅行団に加わって、ローマの宿舎を出た。寒中なお緑色を呈する草原を横切り、アペニンの山々を越え、息つくまもないほど続々と眼下に展開する景色に見いった。聖者に関連すると思われるウンブリアの町々を通って、約三時間後に待望のアシジに着いた。

アシジはスバシオ山の斜面に静かに横たわっていた。丘の中腹から頂上にかけて、中世ふうの民家や教会がぎっしりと建てられ、いちばん頂上には古城がそびえている。中腹から下はオリーブ樹でおおわれている。バスが近づくと、アシジの町は巨大な岩山のように迫ってくる。バスは急坂を登って町にはいり、さらに登って大聖堂の横の広場でとまる。この町はなぜかくも不思議な精神美に輝き、世界中の人々をひきつけてやまないのか。その理由の一つは、もとより愛によって神と人間との壁を打ち破り、宇宙創造の神秘のただなかにわけいった聖フランシスその人にあるが、二つにはスバシオ山の岩があたたかくて、軟かなローズ色を呈し、目に訴える色彩を越えて、なんとも言いがたい霊的雰囲気をかもし出しているためではなかろうか。

有名な話にあるあの十字架が聖フランシスに呼びかけたとき、彼はその呼びかけを聞いて、改築したといわれる聖ダミアノ寺院——その十字架は彼の聖服とともに、今日は聖クララ寺院におさめられている——、彼の忠実な最初の女弟子で、第二フランシスコ会修道院長となった聖クララの寺院、聖フランシスが木切れをまくらに寝たといわれる石の床、彼と弟子たちが祈りのかくれ場であったカルツェリとよばれる洞窟、彼が小鳥に説教した場所を示す僧院の側のはしばみの木、いずれも七百年の昔、聖者とその弟子たちの簡素な生活ぶりを、生き生きと物語らないものはない。聖ダミアノ寺院にある修道女たちが用いた彩飾された楽譜や聖歌隊席を見ると、今日の盛んな教会音楽の先駆を思わせる。またこの食卓で聖クララが食事をしたと、案内の修道士が教えてくれると、中世の修道院に始まった、オックスフォードやケンブリッジその他の大学にある食堂（レフェクトリー）の前身を見るように思った。ことに聖ダミアノ寺院にある小さな聖クララの庭に出て、ふり注ぐ朝の太陽の光をあびると、「ブラザー・サン」と太陽讃歌を口ずさまざるを得なかった聖フランシスの心が、少しはわかるように思えた。

さて、聖フランシス大聖堂のことであるが、この聖者に捧げられた数多い教会堂のうち、最初のもので世界的に有名なこの大聖堂は、上と下との二つの教会からなっている。一二二六年一〇月四日、聖フランシスが亡くなると、遺骸は一時、小さな聖ジョージ教会に運ばれている。しかし、早くも一二二八年七月一六日、フランシスが聖者の列に加えられると、さっそくその翌日から会堂の基礎工事が始められた。フランシスコ会修道院とともに、下の教会ができ上がると彼の遺骸はものものしい護衛のもとに地下の教会に移されて、今日ではアシジへの巡礼者の尊崇の中心となっている。人々は厳かな祈り心をもって、貧困の使徒の墓に近づくが、ますます豊かに恵みを与えられて、ここを辞すに違いない。

大聖堂の二つの教会を飾る絵画は、ピサのギウンタ、フィレンツェのチマブエとジオット、ローマやシエナ派の画匠のものであり、一三、四世紀イタリヤ絵画史に一大時期を画すものである。しかもこれらの画家たちは、聖者の祈りと生活ぶりが人々を感動させるあの同じ熱意をもって、しばしば、無報酬で大聖堂のほとんどの壁を塗りつぶしたとのこと、絵画史上にも珍しい美談である。これらの絵画を貫くテーマは、聖フランシスの生涯とキリストのそれとの平行線であるが、もう一つの動機は十字架である。ことに上の教会には、ジオットの手になる聖フランシスの生涯の重要場面の壁画がぎっしりならんでいるが、偉大な聖者のためによくもかく偉大な解説者が与えられたものと感心する。本堂の入口近くに、あの有名なジオットの小鳥説法図を見出して、古い知己に出会った喜びを感ずるのは、おそらくわたくしひとりだけではあるまい。

（日本女子大学教授）

## 3人の漁夫をたたえて

日本最初の聖書和訳は、1837年、シンガポールでドイツ人宣教師カール・ギュツラフによる『約翰（ヨハネ）福音之伝』だが、この和訳事業に協力した無名の漁夫3名乙吉・岩吉・久吉の名を130年ぶりに思い起し、出身地の愛知県知多郡美浜町小野浦で、去る3月5日、その記念碑の除幕式が行なわれた。この3人は、千石船宝順丸で江戸に向かう途中難破、そのまま漂流してついにマカオへ漂着、ギュツラフ氏の世話をうけて、聖書和訳事業を手伝いながら異郷で一生を終った。

写真は、中部日本新聞社主催、日本聖書協会（総主事荒井信太郎）後援の式で除幕する駐日西ドイツ大使ウィルヘルム・ハース氏。

月刊 キリスト・5月号

巻頭随想

# 集会における祈り

斎藤 勇

いのりがいかにたいせつなものであるか、改めていうまでもない。たいせつであればあるほど、そのことばを つつしまなければならない。密室の祈りは、瞑想的であることが多いから、ことばを口に出さなくともよかろう。けれどもだれかといっしょにいる場合、ことに集会、とりわけ礼拝における祈りは、ことばの用い方によっては、祈りとしては聞かれなくなることもある。牧師はその方面の訓練を受けていることでもあろうが、われわれ一般信徒は、集会でいのるとき、よくよく注意して、祈禱会の雰囲気をこわさないようにしなければならない。

まごころのこもった素朴で簡潔なことばが最もふさわしいこと、言うまでもない。しかしそれは、よほどの用意がなければ、なかなか出てくるものではない。「どうぞ」をひっきりなしに繰り返したり、甘ったるいことばづかいになったり、長々と説明したりすると、聞いている人は心ならずもほかのことを考えてしまうだろう。

甘ったるい、子供が母親にねだるときのようなことばは、親しみがあるようでもあるが、人と人との対話ではなく、人が神に申しあげる祈りには、ふさわしくあるまい。いのりはいみのる、心身を清めて宣べることであると、日本でも昔から考えられてきた。慎しみ深い心を表わすことばを用いるべきである。

それで思い出すことは、主の祈りである。その英訳はいまでも古風な表現を保存している。近ごろは、イギリスやアメリカには現代語訳と称する聖書がかなり数多く出版されたが、たいがいの訳は、主の祈りには古風なことばを踏襲している。今日は二人称単数をザウ、ザイ、ジーということがない。クウェイカーはそれを用いたが、今は一様にユー、ユアと言っているようだ。それにもかかわらず、主の祈りにはユア・ネイムとは訳さず、ザイ・ネイムとしてある。(もっとも、例外がないではない。アメリカ人グッドスピード訳とイギリス出版「基礎英語」訳にはユア・ネイムとある。ただしグッドスピードも参加した「改訂標準訳」は「ザイ・ネイム」としており、また「基礎」英語にはザウ、ザイの形がないので、ユアとするほかいたし方がないのである。)最近イギリスで初版百万部では足りなくなり、すぐ三五万部とかを増刷したという「新英訳聖書」(あるいはニュー・イングリッシュすなわち現代英語に訳した聖書という意味かもしれない)にも、ザイ・ネイムとある。ことに注意すべきは、カトリック教の聖職者であるロナルド・ノックスという名文家の訳が思いきり現代語をとり入れたものであるのに、主の祈りだけは三五〇年前の「欽定英訳」とほとんど同じであるということである。つまり、祈りのことばは甘ったるい俗語ではふさわしくない、また昔から言いなれてきたものはむやみに変更しないほうがよい、ということになる。すこし余談らしくなったが、文語と口語との間に共通点の多い英語でも、かような訳になっているのであるから、文語と口語とはなはだしくちがい、かつ口語にもさまざまな使いわけのある日本語においては、公けの集まりにおける祈りのことばの使い方には大いに用心しなければならない。いったい、われわれキリスト教徒の間にはもっと国語に対する関心があるべきではあるまいか。

そのほか、ひたすら神に対することばであるいのりの中に、人を相手にする説教のような、あるいはひとり言のようなことばがはいってくることは困る。ことにそれが数分間もつづくときは、いのりの心を失わせる。

(東京大学名誉教授 国際基督教大学教授)

2. 「アラトスムーサ」 12世紀のギリシャ古典注釈書より

3. 福音記者マタイ　「ロッサノの福音書」より　6世紀中葉

4. 福音記者（マタイ？）　1400年頃のエチオピヤの写本より

基督教美術の歴史にたずさわるものが、ほとんど例外なく探究の心をそそられるもの、それは、異教的世界から基督教世界へという移行の過程である。最古の基督教美術であるローマのカタコンベが、あの快楽と頽廃の町、そして、今は死の都市であるポンペイの壁画にあまりにも良く似通っていることは周知の事実である。しかも、異教世界の文化を外の形としてまといながら、そこに、それとまったく対立する新しい内実がすでにかもし出されていた。

写本さしえの場合にも、このような異教世界との交流は、ほとんど数えるのにいとまのないほどである。とりわけ、哲学を愛し、詩神を讃えてやまなかったギリシャの人々の遺産は、思想面のみならず、図像の世界にもしばしば忍びこんできた。今日ここに見る「福音記者像」にしても、そのもとは、おそらくギリシャの写本の巻頭を飾っていた、神々の霊感を受ける著者の像であったにちがいない。詩神ムーサの働きによって、詩人は霊感をうけ詩作するという思想は、あの有名な対話篇のみならず、ギリシャ文化の至るところに見られるのである。

しかし、「大いなるパンは死んだ」。そして、今こそわれわれを語らしめるのはだれか。それは聖霊であり、天の使である。黙示録の4つの活物（人・獅子・牛・鷲）は、そのまま4人の福音記者の象徴となった。彼らはあるときは若々しい青年の姿に、あるときは苦行の東方の修道士の姿に、そしてあるときなどは、異形の熱帯の人の様に描かれている。中世の人々の心に映じた彼らの姿は、その時、その所の理想と経験によってさまざまであった。

しかし、様式の異なるゆえに、これらの芸術は分裂の相の元にみられなければならぬのか。色彩の、形の異なるところでは、究極的なるものも、また異なっているといわねばならぬのか。否、彼らの手にした筆は、みなひとつの告白を重々しく録している。「イエス・キリスト、神の子、救い主」。

青年文庫シリーズ [illegible]

# 幸　福

[illegible]蔵著

[illegible] 〒8円

[illegible]代人の中には幸福を熱心に求[illegible]が、[illegible]にはそれを喪失して、絶望的な苦しみにさい[illegible]れ[illegible]ている人々がいかに多いことであろう。著名[illegible]学[illegible]、また文学にも精通している著者がキリスト[illegible]る[illegible]とは何かと平明なことばで読者に語りかける。

# 結婚の倫理

[illegible]雄著

[illegible] 〒8円

「性の肯定」「性における人格」[illegible]婚の[illegible]誓いと思いやりに」などと具体的な問題にふれ[illegible]ら[illegible]教の結婚観とその倫理を学ぼうとする青年男[illegible]

既刊

キリスト教と文学　[illegible]友著　[illegible]円　〒[illegible]円

自然科学と時代思潮　[illegible]義勝著　[illegible]円　〒[illegible]円

音楽とプロテスタンティズム　[illegible]主著　[illegible]円　〒[illegible]円

# 愛唱　讃美歌　百選

[illegible]円・〒[illegible]

わが国で一般に広く愛唱されているさんびかを「讃美歌」「古今聖歌集」「リバイバル聖歌」中より100曲選んで曲と歌詞を載せ、それぞれに適切な解説を付し、各曲には略符もつけてある。

全ページ美麗カット入り。

教会に[illegible]
学校に[illegible]
コーラス[illegible]
グループに……


日本基督教協議会文書事業部

東京都中央区銀座4の2
振替　東京11679

# 聖書のさしえ (5)

辻　　成史

1. 福音記者ヨハネ　8世紀末

## 5月号・目次

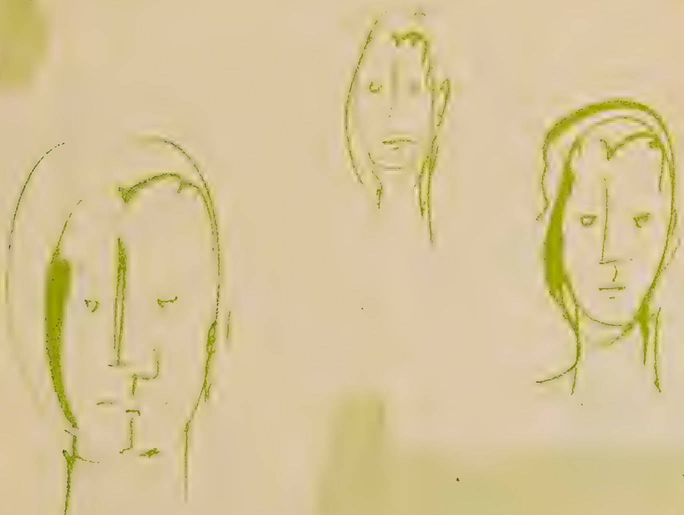

随想　日をあげて見る……池田　鮮…6
アシジに聖跡をたずねて……宮　支那子…6

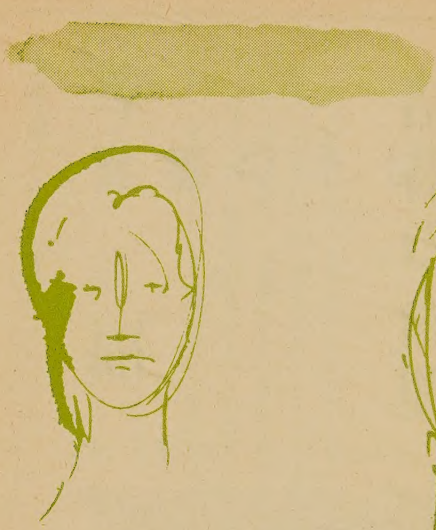
連載　人生の旅……浅野順一

特集・愛するということ

わたしたちが結婚するまで……長谷川初音…20
神を愛するようになるまで……新屋徳治…28

＜読者応募原稿＞




信仰に生きる　〝暗黒の住人〟に光を……37
―点訳奉仕に生きる老夫婦―

聖句をめぐる座談会　ともに喜び、ともに泣く……(司会)石島三郎……46
―ロマ一二・一五―

キリスト教のいろは5　人間の値うち……島村亀鶴……50

人生相談室　浪人生活と教会……(回答)気仙三一……54

社会を見る目　池田内閣の宗教政策……宮崎彰……56

書評　幸福と愛への招待……小林宏……45

童話　アレッポの乞食娘……太田博也……58
―第五章　ぼたんの花とあやめの花―

讃美の泉……津川主一……68

生きる意味について　労働するということ……佐古純一郎……62

連載小説　夜警番の日記……椎名麟三……70

読者の声……75

表紙・藤城清治　カット・山中春雄

山本泰次郎編

全二十五巻

# 内村鑑三 信仰著作全集

宣教百年の日本キリスト教が
世界にほこる不滅の金字塔！

刊行決定!!

昭和三十六年十月第一回配本
以後毎月一回配本
昭和三十八年十月完結予定

## ▼本全集五つの特色

一、著書、論文、説教、文章、詩歌など全部を集めた。聖書注解全集と合わせれば、日記、手紙、雑文（一部）を除いた日本文はほとんど全部ということができる。

二、全巻を著書、教理、実践・人生の各編に分け、さらに教理、実践・人生編を約九十の項目に分け、必要に応じてそれをさらに小項目に分類した。

三、本文を新字体、新かなに書きかえて読みやすくした。

四、聖書注解全集をも包含する総合的索引（一、聖句索引　二、標題索引　三、事項索引　四、年月別作品（標題）表）をつけた。

五、各巻に解説をつけ、また必要に応じて編者注をつけた。

## 一、著書編（第一―八巻）

「キリスト信徒のなぐさめ」「求安録」「余はいかにしてキリスト信徒となりしか」（和訳）「代表的日本人」（和訳）「宗教座談」「キリスト教問答」「愛吟」「所感」など一八冊の著書と四編の文を系統的に編集

## 一、教理編（第九―一六巻）

信仰とキリスト教の教理に関する大小約八〇〇の論文文章を神、キリスト、聖霊、罪、赦、十字架、再臨、復活、天国、神学、礼典、信仰、愛希望、祈りなど四〇余の項目に分類編集

## 一、実践・人生編（第一七―二四巻）

実践と人生の諸問題に関する大小約九〇〇の論文文章を伝道、教会、生涯、家庭、非戦、平和、独立、政治、社会、日本、アメリカ、諸徳、真理、理想、科学、天然、文学、芸術、人物、歴史、地理など約六〇の項目に分類編集

## 一、索引（第二五巻）

内容見本贈呈

東京・銀座　振替　東京11357

教文館

5月6日

ゴールデンウィークの土曜日に、みんなで主催し、みんなを招き、みんなが"主"を知る

東京クリスチャン・クルセードは始ります

6月4日

TOKYO

当代一流の音楽家たちが皆様にお贈りする音楽と、世界的伝道者が皆様にお伝えするメッセージの祭典

入場無料　整理券は東京クリスチャン・クルセードか、各教会、都内各プレイガイドで差上げます。詳細は東京都渋谷区宮益坂上安田ビル内東京クリスチャン・クルセード事務局へお問い合せ下さい。

於 東京都体育館　PM. 5時30分開場

自然に吸入できる

肺

結核直接治療機

岩井式

油脂吸入機

米国特許U・S二八七一、八五五号
日本特許二二八、九八三～五号

岩井式油脂吸入機は結核菌の殺菌剤、発育阻止剤ゴマカブリン酸を一粍の一万分の一の極微粒子として肺胞まで到達させ、直接結核菌に作用せしめることによって肺結核を治療する新治療機！

研究所にお出で下されば岩井式吸入機にて浸潤、空洞が数カ月毎に萎縮消失し治癒した治療例が数多く保管してありますから、何時でも希望者の無料閲覧相談に応じます。

文献希望者には療養の心得を無料贈呈

横浜市神奈川区旭ケ丘六〇ノ十二
電話(49)一五二四
三四二一

岩井式油脂吸入機株式会社
岩井油脂物療研究所
所長医学博士　田沼息正
発明者　岩井良平

道順＝東横線反町下車松本消防署坂上。横浜駅西口よりバス31にて栗谷田下車

昭和36年5月1日発行（毎月1回1日発行・第13巻第5号）昭和24年2月3日第3種郵便物認可　昭和34年12月11日国鉄東局特別扱承認雑誌第692号

# 月刊キリスト

5

特集・愛するということ

「神を愛する」ということ　北森嘉蔵

愛するようになるまで　長谷川初音・武藤富男
新屋徳治・応募原稿

伝道説教　人生は旅である　浅野順一